

宮崎県新富町文化財調査報告書第5集

県営一つ瀬総合パイロット事業尾鈴Ⅱ期地区川床工区に伴う
埋蔵文化財調査報告書

KaWa ToKo

川 床 遺 跡

1986.3

新富町教育委員会



図版 1 川床遺跡航空写真

序

この報告書は、新富町教育委員会が、宮崎県の委託を受けて実施した、川床地区県営農村基盤総合パイロット事業に伴う埋蔵文化財発掘調査記録であります。

本調査では、弥生時代後期～古墳時代初期にわたる墓制である円形および方形周溝墓を含む土壙墓が195基検出されました。

これらの中には、九州の中でも最も古いと考えられる周溝墓もあり、極めて貴重な発見でもありました。この報告書が、社会教育及び学校教育に利用されることを期待いたします。

最後に、本書の刊行にあたり、現地調査から、報告書発刊まで御援助いただきました北九州市立考古博物館館長小田富士雄氏をはじめとする諸先生方や、宮崎県教育委員会文化課の職員、ならびに関係各位の御協力に対し、深甚の謝意を表します。

昭和61年3月31日

新富町教育委員会

教 育 長 小 田 幸 一

本文目次

第Ⅰ章	調査に至る経緯と組織	1
第1節	調査に至るまでの経過	1
第2節	調査の組織	1
第Ⅱ章	遺跡の立地と環境	3
第Ⅲ章	遺跡の概要	5
第1節	発掘調査の経過	5
第2節	基本層序	5
第3節	遺構の概要	6
第4節	出土遺物の概要	18
	出土土器	18
	出土鉄器	38
付編	新富町川床遺跡出土赤色顔料の分析結果について	45

挿 図 目 次

遺 跡 位 置 図 (第1図)	2
調 査 区 配 置 図 (第2図)	3
土 壤 墓 実 測 図 (第3図～第57図)	51～105
周 溝 墓 遺 構 実 測 図 (第58図～第63図)	106～111
出 土 鉄 器 実 測 図 (第64図～第72図)	112～120
出 土 磺 実 測 図 (第73図～第75図)	121～123
出 土 石 器 実 測 図 (第76図)	124
出 土 土 器 実 測 図 (第77図～第92図)	125～140
川床 1号墳 遺構実測図 (第93図)	141

第Ⅰ章 調査に至る経緯と組織

第1節 調査に至るまでの経過

昭和58年度から59年度にわたり、川床地区において県営農地基盤整備事業が計画された。事業計画地内には、国指定史跡新田原古墳群の一画にあたり、埋蔵文化財の取り扱いについて、宮崎県一つ瀬土地改良事務所、一つ瀬土地改良区、新富町耕地課、教育委員会、宮崎県教育委員会文化課と協議を重ねた結果、昭和58年度（一期分）については、所在の指定46号墳およびその周囲を含め、土地の削平を行なわないこととした。昭和59年度工事予定の二期地区については、昭和58年8月、新富町教育委員会が行なった遺跡の確認調査において、かなりの量の土師片が表採され、遺跡の存在が確認され、これにあわせて、事業地内に所在する新田原古墳群第70～77号の取り扱いについて再度、関係機関との協議を行なった結果、指定古墳およびその周辺については、現状のままとし、現状保存の不可能な一部道路および水路敷については、全面発掘調査を行ない、記録保存することになった。

発掘調査は、国、県の補助事業として、一つ瀬土地改良事務所より、委託を受けた新富町教育委員会が調査主体者となり、昭和59年8月16日より、翌年1月31日まで実施し、整理作業は新富町中央公民館および県文化課で行ない、報告書作成については、新富町教育委員会が行なった。なお、出土遺物および図面等については、新富町教育委員会が管理し、新富町中央公民館に保管する。

第2節 調査の組織

発掘調査主体 新富町教育委員会

調査指導 宮崎県教育委員会

　　面 高 哲 郎（文化課 主任主事）

　　永 友 良 典（ “ 主任主事）

　　北 郷 泰 道（ “ 主 事）

特別調査員 小 田 富士雄（北九州市立考古博物館館長）

事 務 局 新富町教育委員会

　　教育長 小 田 幸 一

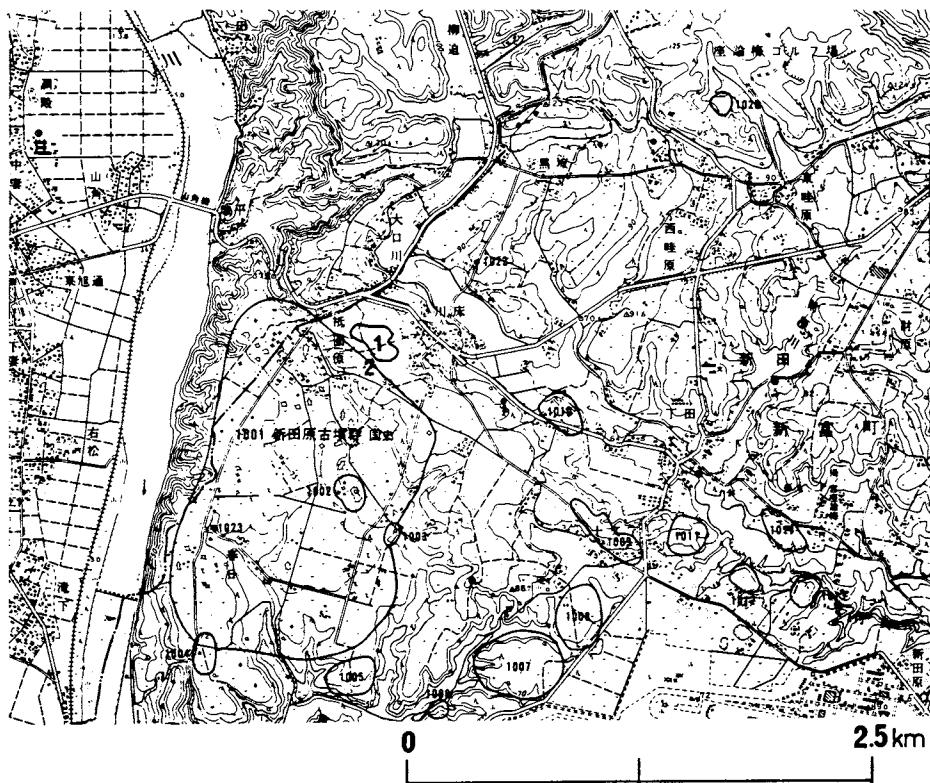
　　社会教育課長 比江島 武 志（現） 山 本 繁 幸（S59年度）

　　課長補佐 山 崎 達 男（“） “ （ “ ）

係長 図師武年（現）高正静夫（S59年度）
主事 松原富美彦（〃）
主事 有田辰美（調査担当）

発掘調査を実施するにあたっては、県営農地基盤事業を企画担当された一つ瀬土地改良事務所および一つ瀬土地改良区、地元関係者の御配慮とご協力によるところが多大で、直接調査においては、宮崎県教育委員会文化課の職員を始め、鹿児島大学法文学部考古学教室生の応援をいただいた。また、工事と基盤整備事業が11月以降、競合する形となり、遺構の拡がりから、工事施行者である宮崎県農業開発公社には、調査の進行に御配慮いただいたことを記して感謝したい。

尚、報告書作成に伴う遺物の整理・復元・実測については、宮崎県教育委員会文化課の職員をはじめ、宮崎県埋蔵文化財センターの関係者に協力を頂いた。

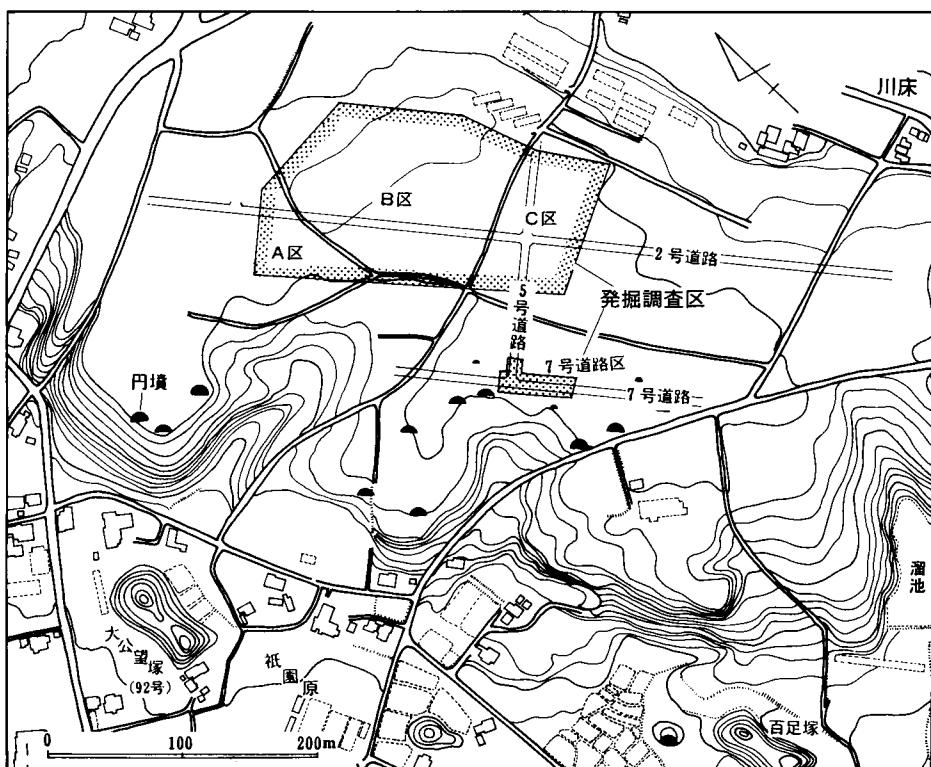


第1図 遺跡位置図

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

新富町は宮崎市の北約20kmにあり、九州山地から東流する一つ瀬川により、西に西都市と相接し、南に宮崎郡佐土原町と接している。北には、標高70~90mの洪積台地を介し、児湯郡高鍋町と接し、東には、日向灘に望む。その町域は、地形的に一つ瀬川北岸の河岸段丘面を含む冲積平野と野地・原などと呼ばれる洪積台地に占められている。また、この洪積台地は宮崎平野に広く広がる平坦面の顯著な段丘地形となっており、その代表的なものに標高120m級の茶臼原面、標高90m級の三財原面、標高70m級の新田原面がある。

本遺跡は、児湯郡新富町大字新田字川床・谷畔・祇園原に所在し、北に鬼付女川およびその支流に開折された谷により、新田原台地（通称）に残された標高90~91mの三財原面に立地する。この台地より南西には、標高75mの台地が広がり、約600mで急峻な崖となり、南流する一つ瀬川に落ちる。また南側には、標高70~75mの台地が広がり、主に畑作地帯として利用されており、この中には、僅かに水田も営まれている。



第2図 調査区配置図

川床地区周辺に所在する弥生時代～古墳時代の遺跡としては、南東 2,200 m に、昭和56年～58年に発掘調査された弥生時代後期の集落跡である新田原 A 遺跡がある。川床遺跡と同じ台地の西および南の縁辺部には、新田原古墳の最北辺にあたる円墳群があり、その台地の麓にあたる祇園原の集落付近の前方後円墳 8 基ほか、円墳とあわせて、新田原古墳群の一大支群となっている。これら古墳群の周辺からは、若干の土師片、須恵片が採集されているが、住居跡等遺構の存在は、確認されていない。またこれより北方約 2 km には、国指定茶臼原古墳群（西都市）が、北西 2.5 km には、国指定千畠古墳群が、西方、一つ瀬川を越えて 2.2 km には、国指定西都原古墳群があり、本遺跡周辺は、日向における古墳の最も密集した地域にあたる。

なお、宮崎県内での弥生時代後期～古墳時代にかけての土壙墓、周溝墓など墓地について^{注1}は、弥生中期～後期初頭とされる石蓋土壙墓の朴ノ木遺跡（高崎町）や、後期とされる土壙墓の大萩遺跡（野尻町）^{注2}があり、庄内併行期に比定されている東平下遺跡（川南町）^{注3}の方形周溝墓があり、布留併行期と考えられる下屋敷 1 号墳（新富町）^{注4}がある。

注

1. 長津宗重氏の教示による。
2. 宮崎県教育委員会「大萩遺跡」 I 1975
3. 川南町教育委員会「東平下周溝墓群－2号方形周溝墓」 1982
4. 新富町教育委員会「新富町・下屋敷 1 号墳発掘調査中間報告」『宮崎考古』第 9 号 1984

第Ⅲ章 遺跡の概要

第1節 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和59年8月16日より翌年1月31日まで現地作業日数117日を要した。調査は、事業地内にあった比高1.2mの高まり（B—168号）に着手し、調査前の地形を確認のため、墳丘に12.5cm間隔の等高線で平面図測量を行なった。9月にはいると、各道路区を中心漸次、トレンチ溝を入れ、遺構の検出に努めた。こうした中で、5号道路と2号道路の交叉点から西側に延びる2号道路区西側において、土壙墓が次第に確認されていった。あわせて、新田原古墳群第70号～77号に近接する7号道路区において、円墳のカットされた形の周溝及び墓壙主体部が検出された。10月にはいると、7号道路区の古墳の調査とにあわせ、ほぼ道路敷部分遺構検出作業は終了し、遺構、遺物の集中は、2号道路区に沿った地区に限定され、その周辺への遺構の拡がりが、予想されるに至った。そこで遺構の拡がりを確認のため、50mグリッド線に沿って、トレンチを入れた結果、土壙墓群の拡がりは、20,000～30,000m²に及ぶ広大なものとなった。しかしこの周辺については、当初遺構・遺物がないことから、調査区からはずされており、この部分の対応のため、再度、関係部局との協議となった。

協議の結果、基盤整備工事も進行中で、一部分についての変更は可能であるが、全体の現状保存について、悲観的な結論に至った。こうして、墓域全部を全面発掘することとなった。それまでのトレンチおよび、部分的発掘の結果、遺構検出に都合のいいアカホヤ土（明黄褐色土）まで耕作されていたので、耕作土の除去は重機によって行なった。土壙墓の調査はA区からB区、C区と行ない、遺構がほぼ出尽くした12月29日には、一部土層断面図未了を含めて、航空測量のため写真撮影を行なった。明けて、1月にはいると、残る土層断面図作成及び周溝の平面図作成を行なった。こうして、機械に追われる中、1月31日調査を終了した。

第2節 基本層序

川床遺跡の基本層序は、第Ⅰ層灰黒色土（耕作土：20～25cm）、第Ⅱ層黒色土（5～10cm）、第Ⅲ層明黄褐色土（アカホヤ土、第Ⅰオレンジ：20～25cm）、第Ⅳ層黄褐色土（アカホヤ下層土層：5cm）、第Ⅴ層黒色ローム層（小白班粒を含む：25～30cm）、第Ⅵ層黒褐色ローム層

：25～30cm）第VII層褐色ローム層（50～55cm）、第VIII層暗黃褐色土（第IIオレンジ）となっている。B区土壙墓群の北西に東西に残る最高位面（標高91m）付近は、黒色土ではなく、南に僅かに傾斜する関係で南側については第II、III層が比較的厚くなっている。

第3節 遺構の概要

本遺跡からは、円形周溝墓、方形周溝墓、木棺墓、木蓋土壙墓、変形土壙墓の計195基、古墳2基が検出されている。土壙については、土壙計測表によった。この中で特に特徴的なものを概述する。また、土壙墓、木棺墓、木蓋土壙墓は、台地の中、最高位面の東西方向を中心に分布しているが傾斜はほとんどわざかしかない。主軸方位は、ほぼ東西を基調とするが、これに直交するものもあり、また、北東～南西と中間位の方位を示すものもある。

土壙墓、木棺墓はその造り方で次のように分類できる。

土壙墓（I類）について

まず長方形に掘り、中央部に埋葬部とある棺部の壙を掘り込む二段掘の壙墓があり、目づめ用の粘土が確認されるものが多く、木蓋土壙墓と考えられるもの（Ia）と、一段掘り込みの土壙がある（Ib）なおこのIbの中には、木棺墓の中のb類と同類と考えられるものがあるが、木棺の小口および長側板等の掘り込み施設のないものは、この類に入れた。その他にc類として棺部の掘り込みを一段目の土壙の長軸側下場から横に掘り込んだ形式がある。

木棺墓（II類）について

まず長方形に掘り、その中央部に棺を組み立てるための壙を掘り込む一段掘りのもの（IIb）また、一段掘りであっても小口部掘り残して小口板に替えるもの（IId）、小口部に掌大～人頭大の川原石をもって小口板に替えるもの（IId）がある。この中IIaはIaと土壙の掘り方に基本的に差異はない。唯IIa類は中央部棺部壙が長軸および短軸にやや広く、ほぼ長方形と規格的に整ったものが多い。

B-1号

B-49号円形周溝墓の北40mに位置する二段掘りの木蓋土壙墓である。主軸はN-85°-Wで頭位は東と推定する。規模は、上端で主軸長2.20m、幅1.28mを測る。内寸法は主軸長1.85m、幅は頭位側31cm、足位側20cm、深さ28cm。木蓋の目づめ用と考えられる白色粘土が僅かながら認められた。棺内には、柳葉鏡が礫にのる形で副葬されていた。

B-2号

B-49号円形周溝墓の北側のグループにある二段掘りの深い木蓋土壙墓である。頭位は東

と考えられる。主軸方位はN—59°—Wである。墓壙の規模は上端で2.39m、幅1.34mを測る。棺の内寸法は、主軸長1.47m、幅は頭位側38cm、足位側20cm、深さ57cm。木蓋部は僅かに段を有し、足位側に特に白色粘土が認められた。埋土下層に鉄鏃が確認されている。

B—4号

上部がかなり削平されている二段掘りの木蓋土壙墓で、主軸長2.07m、幅1.14mを測る。頭位は、鉄鏃、礫の副葬された西側と考えられ、主軸N—85°—Eである。棺の内寸法は、主軸長1.46m、幅が頭位側で約37cm、足位側約39cm、深さ約38～45cm。目づめの白色粘土も棺部肩および埋土に確認している。鉄鏃は、矢先を頭位に向け左手床直上に出土している。

B—5号

棺部および土壙の掘り込みは、比較的緩やかな木蓋土壙墓である。主軸はN—78°—Eで、頭位は西にある。土壙の規模は、主軸長2.10m、幅0.94m、棺部の内寸法は、主軸長1.39m、幅は頭位側約45cm、足位側約21cmである。一段目肩部には、白色粘土が残り、特に両小口部には多く認められた。副葬品として鉄斧と礫がある。鉄斧は着装部を頭位に向けての出土である。

B—6号

二段掘りの木蓋土壙墓で、掘り方は、比較的整っている。主軸はN—79°—Eで頭位は不明である。土壙の規模は、主軸長2.26m、幅1.05m、棺部の内寸法は、主軸長1.61m、幅は西側で40cm、中位で46cm、東側で42cmで深さ47～55cmで棺底はほぼ水平である。遺物は確認されていない。

B—7号

B—72号周辺グループの中にあっては、数少ない一段掘りの土壙墓で、埋葬形態は不明である。主軸方位はN—80°—Wで主軸長2.42m、幅1.04m、底部内法は、主軸長で2.16m、幅89cmで西側小口部に約15cmの段を存している。床面はほぼ水平となっている。副葬品として鉄鏃に小礫が重なる形で東位脇の床面より約5cmの高さで出土している。

B—8号

二段掘りの木蓋土壙墓で、棺部側壁はほぼ垂直気味に掘り込まれている。主軸方位はN—52°—Wで頭位は棺の幅から西側と考えられる。土壙の規模は、主軸長1.95m、幅1.14m、棺部の内寸法は、主軸長1.61m、頭位側幅40cm、中位38cm、足位側27～31cm、深さ43cmを測る。棺の床面は西側が高いが、ほぼ水平である。遺物は、棺外粘土上に16×10cm大の川原石があ

り、木蓋部の抑えとも考えられる。白色粘土は、中央掘り込み肩から北、西、東方向は、一段目掘り込み下場まで充填され、南側は約15cmまで遺存していた。これは、木蓋の大きさを示すものと思われる。

B-9号

二段掘り込みの木蓋土壙墓と思われる。土壙の縦横比が2.4を越える短軸の短かいタイプでかなり整った土壙墓である。主軸方位はN-18°-W頭位は東と考えられる。土壙の規模は主軸長2.19m、幅77cm、棺部の内寸法は、主軸長1.72m、頭位側幅37cm、足位側で24cm、深さ26~28cmで、床面はほぼ水平である。出土遺物はない。

B-10号

二段掘り込みの木蓋土壙墓で上部土壙も棺部と同様、頭位と考えられる西側に幅の広いタイプである。主軸方位N-76°-W土壙の規模は主軸長で1.95m、幅は西側で93cm、東側で72cmを測る。棺部の内寸法は、主軸長1.48m、頭位側35cm、足位側24cm、深さ34~36cmで床面は僅かに中央部が低い。また、足位側においては、埋葬直前における棺部の拡張に係わるのか棺の側面がえぐり込まれていた。出土遺物なし。

B-11号

二段掘りの木蓋土壙墓、主軸方位はN-58°-W。主軸長2.15m、幅1.12m、棺部の内寸法は西側で44cm、東側で33cm、深さ43cmを測る。床面はわずかに中央部が低くなる程度である。棺部掘り込みの上部肩を5~10cm残して、一段目掘り込みには全体的に白色粘土が認められている。

B-12号

棺部掘り込みが残り二段掘り込みの木蓋土壙墓である。主軸方位はN-60°-Wで頭位を西とする。土壙の規模は、主軸長2.24m、幅1.24m、棺部の内寸法は、主軸長1.35m、幅は、頭位側36cm、足位側23cm、深さ約14cmと木蓋をのせるには余裕が少ないが、棺の肩部の周囲には10~20cmを残して一段目掘り込み下場まで白色粘土が認められることから、棺部に直接木蓋をのせていたと考えられる。また、頭位側棺外に小礫が一点出土している。

B-13号

二段掘り込みの木蓋土壙墓で主軸方位はN-30°-W、頭位は東におく。土壙の規模は主軸長2.37m、幅1.55m、棺部の内寸法、主軸長1.58m、頭位幅38cm、足位幅30cm、深さ35~45cmを測る。棺部の肩にあたる東西および、南には僅かに段を有し、木蓋の長さ約1.7m前後幅を約53cmと推定することができる。なおこの有段部より長軸方向の東西には目づめと思わ

れる白色粘土が詰められていた。副葬品は頭位側右手に埋葬主軸に平行して剣先を頭位側に向け、小石とのセットで出土している。ほぼ床面直上の出土。確実に棺内副葬と考えられる。

B-14号

二段掘り込みの土壙墓で頭位側に小口板差しこみ穴が掘り込まれ、小口部より足位側15cm小口平行の掘り込みがある。枕に関する施設と思われる。主軸方位N-75°-W、棺部の掘り込みは垂直ないし内傾し僅かに袋状となっている。土壙の規模は主軸長2.36m、幅1.47m、棺の内寸法は主軸長1.38m、頭位幅39cm、足位幅27cm、深さ54cmを測る。棺内からは胸部左手より鉄鎌が矢を頭位に向けて、小礫とのセットで副葬されていた。木蓋部の痕跡があり、長軸1.57m、短軸45cmのほぼ長方形である。

B-16号

主軸長2.59m、幅1.57m、棺の内寸法は西側29cm、中位33cm、東側24cm、深さ25~28cm、主軸方位はN-87.5°-E、棺部中位から西側にかけて、白色粘土が巡っており、木蓋の大きさを長軸1.80m、短軸50cmと復元できる。頭位不明、西側粘土上より、磨製石斧の一部が出土地している。棺部擴の深さを除き、B-17号にはほぼ同じ。

B-17号

二段掘り込み式の木蓋土壙墓で、主軸方位N-2°-E、土壙規模、主軸長2.58m、幅1.18m棺の内寸法、主軸長1.66m、西側幅32cm、中位39cm、東側34cm、深さ40cm、床面はほぼ水平で棺の北東隅に朱らしきものが確認されているので頭位は東と考える。副葬品として左手に、鉄鎌の矢先を東に向けて出土している。ほぼ床面直上、また白色粘土が主軸方向の両肩に充填され、長軸側にも棺に沿った形で少量確認している。復元木蓋の長さ1.82~3m、幅は棺擴の上場に各8cmプラスの55cmと推定される。

B-21号

二段掘りの土壙で棺部側面は丁寧に整形、掘り込まれる。主軸方位N-86°-E。頭位を西とする木蓋土壙墓。棺部の肩より土層図に観察されるようにアカホヤブロック、黒褐色ブロックが木蓋の横に裏込めされていた。短軸方向についても同じである。土壙の規模は主軸長2.50m、幅91cm、棺の内寸法は主軸長1.62cm、頭位側幅38cm、足位幅19~21cm、深さ約32cm、床面はほぼ水平。

B-22号

二段掘りの木蓋土壙墓で棺部の掘り込みがやや西側にずれた形で掘り込む。主軸方位N-67°-W、頭位は西と思われる。土壙の規模は、主軸長2.03m、幅1.04m、棺部の内寸法は主

軸長 1.30m、頭位幅 43cm、足位幅 28cm、深さ 24cm を測る。鉄鏃 1 点頭位側右手に副葬、床面は足位側が 5cm 位高い。

B-24号

主軸長 2.61m、幅 2.03 の隅丸方形に近い一段目掘り込みの頭位側棺外に小口板の掘り込みの痕跡があり、中央部に棺部を掘り込む二段掘り込みの土壙墓。主軸方位 N-70°-W で東を頭位とする。棺部の内寸法は主軸長 1.68m、頭位幅 37cm、足位幅 29cm、深さ 16cm 内外、床面はほぼ水平。棺の深さおよび頭位の掘り込みから長側板を棺部肩に持っていた可能性あり。棺内下層埋土より礫 1 点出土。

B-25号

主軸 N-73°-W、主軸長 2.10m、幅 1.30m の一段目掘り込みに棺部を南側によって主軸を約 10 度西に傾け掘り込まれた二段掘土壙墓。棺の内寸法は、主軸長 1.48m、東側幅 21cm、西側 18cm、深さ約 10cm、床面はほぼ水平で東側に小口板？の掘り込みをもつ、副葬品と鉄鏃 1 点を棺内床面直上より出土、矢先を西側に向けての出土。棺の深さから直接木蓋をのせたとは考えられない。

B-28号

二段掘り込みの木蓋土壙墓で、主軸方位は N-65°-E をとり、西側を頭位とする。棺部の主軸長 1.47m、頭位幅 41cm、足位幅 27cm、深さ 32~36cm を測る。側面掘り方は極めて整形されており、典型的木蓋土壙墓である。出土遺物なし。

B-30号

二段掘り込みの木蓋土壙墓で N-83°-E を主軸とする。棺部側面の掘り方は丁寧に仕上げている。棺の内寸法は主軸長 1.73m、頭位幅 35cm、足位幅 25cm、深さ 18~23cm を測る。棺内頭位の左手に矢先を東に向けて鉄鏃 1 点が出土している。頭位側の段は埋土最下層上面で鉄鏃出土レベル。

B-32号

土壙墓群中最北辺屋根部より、やや北に下る部分での出土。主軸方位 N-52°-E による。頭位を南側とする二段掘り込みの木蓋土壙墓。棺部の掘り込みは、ほぼ垂直とする。棺部の内寸法は主軸長 1.76m、頭位幅 30cm、足位幅 22cm、深さ 33~45cm を測る。棺内頭位側左手の床面直上出土であるが向きについては不明。

B-33号

二段掘り込みの木蓋土壙墓で N-9°-W を主軸とする。頭位は不明。中央部掘り込みは南

北とも幅は狭く25~27cmである。棺の内寸法は主軸長1.59m、深さ18~20cmを測る。棺部の北側主軸方向に段を有すが目的は不明である。出土遺物なし。

B-34号

B-168号のすぐ西側に位置する二段掘り込みの木蓋土壙墓で棺部掘り込みの肩部に白色粘土が囲むようにほぼ巡っていた。主軸方位はN-67°-Wで東を頭位とする。棺内の頭位側左手床直上に鉄鎌および礫が副葬されていた。棺部の内寸法は、主軸長1.70m、頭位幅40cm、足位幅30cm、深さ約28cmを測る。

B-35号

二段掘り込みの木蓋土壙墓、棺部はほぼ垂直に掘り込み側面の仕上げは丁寧。N-79°-Wを主軸方位とし、頭位を西とする。棺の内寸法は、主軸長1.56m、頭位幅42cm、足位幅34cm、深さ約45cmを測る。なお、棺内主軸線上の頭位部分より、切先を頭位に向けた鉄鎌と小礫が床面上より出土している。

B-36号

IIa類に属する組合せ式木棺墓で、長側板は小口板に挟まれるタイプ。主軸長2.60m、幅1.92mを計る。棺部の内寸法は長軸、1.48m、幅63cmを計る。棺外上場に白色粘土があり、上板との目づめと考えられる。鉄鎌副葬。

B-37号

二段掘りの木蓋土壙墓で、棺部側壁をほぼ垂直に掘り込んでいる。主軸方位はN-63°-Wで頭位は、棺部の形状から東側と考えられる。土壙の規模は主軸長2.78m、幅1.35m、棺部の内寸は主軸長1.64m、頭位幅40cm、中位37cm、足位側30cm、深さ25~30cmを測る。棺部肩には木蓋の目づめと思われる白色粘土がほぼ全体に巡っていた。副葬品は、一段逆しの鉄鎌1点と小石が出土している。

B-39号

二段掘り土壙墓で棺部掘り込みが極めて整形されている。長軸方向棺部側壁両端に幅3.5cmの掘り込みが残り、小口板を内に挟み込む木棺墓と考えられる。尚、中央部床面に白色粘土のブロックがあり、北西隅からは朱が認められた。主軸長2.80m、幅1.41cm、棺の内寸は主軸長2.10m、幅56.5cmを測る。

B-40号

主軸長2.00m、幅1.18m、棺部の内寸は主軸1.59m、幅33cm、深さ20cmを測る。横断の観察から棺部土壙肩に裏込めと思われる硬めの黒色土層があり、長側板の存在がうかがえる。

出土遺物には、頭位と思われる西側より、鉄鎌（39）および鉄鎧の付着した小石がある。

B-41号

棺部土壙のみの検出であるが、当初僅かに上部土壙と思われる黒色土が残っており、木蓋土壙墓の可能性が大きい。棺部の内寸は主軸長1.74m、深さ30cmで頭位側幅42cm、足位側幅30cmを測る。このことから頭位は西側にあったものと考えられる。出土遺物は、小石と鉄鎌（84）が銹着気味に床面直上より出土している。

B-42号

主軸長2.83m、幅1.77mとかなり幅広の組合せ木棺墓と考えられる。棺部は主軸長1.77m、幅63cm、深さ48cmを測る。小口板の掘り込みに差しかかっての床直出土である。主軸方位はN-71°-W。

B-43号

主軸長2.32m、幅1.27m、深さは中心部で50cmを測る。長側板の掘り込みが一段掘りの下場に沿って特に小口部に明確に残り、小口板を内側に挟み込んだ組合せ木棺墓。棺部の内寸は長軸方向に最高2.10mを幅は約49cmを測る。主軸方位はN-87.5°-W。副葬品としては鉄鎌の上に小礫や銹着した形で出土しており、棺部南西隅の内側床直上の出土である。

B-45号

極めて典型的な木蓋土壙墓。棺部壁面は、直線的に立ち上がり整っている。肩部には白色粘土がほぼ全体に残り、特に長軸両側においては厚く残り、木蓋の長さが確認され約1.80mと計測された。土壙の規模は、主軸長1.45m、幅1.15m、棺部の内寸は主軸長1.56m、中位幅約42cm、深さ28cmを測る。主軸方位はN-71°-W。頭位は西側。副葬品としては棺内から小石と鉄鎌各々が北西隅に重って床直上に出土。

B-46号

二段掘りの木蓋土壙墓で棺部側壁は丁寧に掘り込まれる。形の整った典型的なタイプ。主軸長1.90m、幅1.30m、棺部の内寸は主軸長1.53m、幅35~6cmで深さ約30cmのほぼ整った長方形を呈している。棺部の肩口は、ほぼ全面粘質土が巡る。副葬品として、棺部南西部隅の床面直上より小石と鉄鎌1点が出土している。

B-48号

主軸長2.75m、幅1.50mの不整形。棺の内寸は長軸1.55m、幅48cm、深さ約39cmの棺部の大きさに比較し、一段目の掘り込みが大きい木蓋土坑墓と思われる。棺部の掘り込みは、丁寧である。幅の関係から内側に長側・小口板の可能性もある。

B-50号

二段掘りの木蓋土壙墓と思われる。主軸長 $1.88m$ 、幅 $99cm$ 、棺部の内寸は、やや小さくて主軸長 $1.25m$ 、幅 $38cm$ 、深さ約 $27cm$ を測る。主軸方位はN— 75° —W。

B-51号

本遺跡中2例しか認められなかった小口部掘り残しの土壙墓で、主軸長 $2.47m$ 、幅 $1.17m$ 、棺部の主軸長 $1.40m$ 、幅約 $41cm$ 、深さ西側で $37cm$ を測る。掘り残し小口部は東西ほぼ水平で、長側板はこの二つを挟んでたてかけられ、また木蓋も直接この上に置かれたものと思われる。

副葬品は、棺部床直上に鉄鏃1点(56)が出土している。

B-52号

主軸長 $2.17m$ 、幅 $1.05m$ 、棺部の内寸は主軸長 $1.62m$ 、西側幅 $36cm$ 、中位幅 $28cm$ 、東側幅 $25cm$ を測る。木蓋土壙墓で、棺部側壁はほぼ垂直に立ちあがる。頭位は棺の形状から、西側と思われる。棺部床面より肩までの深さ約 $45cm$ 、検出面までの深さ約 $95cm$ を測る。副葬品は

B-53号

一段掘りの土壙墓で主軸長 $2.39m$ (下場で $2.15m$)、幅 $1.06m$ (下場で $85cm$)検出面よりの深さ約 $51cm$ を測る。埋土の観察からこのⅡ層は、組み合せ木棺の木蓋の落下を想起させる。尚、主軸方位はN— 32° —Wで頭位は不明。

B-54号

二段掘り込みの土壙墓で棺部の掘り込みが乱れている。西側の棺部肩には目づめと考えられる粘質土が残ることから、木蓋を持っていたと考えられる。主軸長 $2.28m$ 、幅 $1.06m$ 、棺部の主軸長 $1.09m$ 、中位幅は $45cm$ 、深さ $15\sim20cm$ 。検出面までの深さ約 $1m$ 。南西棺部肩の粘質土上に小石と刀子が副葬されていた。主軸方位S— 87.5° —W。

B-55号

主軸長 $2.26m$ 、幅 $99cm$ で棺部は西側に偏って掘り込まれている。棺部の主軸長 $1.20m$ 、幅約 $36cm$ の極めて整った長方形を呈す。棺部の肩にはほぼ全面白色粘質土が認められ、西側においては、棺内まで流れ込みがみられた。棺部の大きさから、小児の土壙が起想される。主軸方位はN— 79° —Wで頭位は不明。副葬品はない。

B-56号

主軸長 $2.06m$ 、幅 $1.10m$ 、棺部掘り込みは、西側から東側小口に向って広くなっている、頭位を東においたものと思われる。主軸長 $1.29m$ 、幅は西側 $25cm$ 、最大 $40cm$ を測る。棺部側壁は丁寧に掘られ、床面は西側に傾斜しており、足位部は抉り込んで掘られている。棺部の

深さ足位側で37cm、頭位側19cm、中心部床面より検出面まで約55cmの深さである。主軸方位 S—55°—E。

B—57号

主軸長 2.11m、幅 1.17m 最深部で検出面まで53cmの一段掘り土壙墓。主軸方位 N—27°—W。短軸方向北東側下場より南西側下場に向って傾斜しており、その差17cm。南西側側壁は抉り込まれており死床もこの壁に沿った部分が考えられる。出土遺物なし。

B—58号

二段掘りの木蓋土壙墓。主軸長 2.30m、幅 1.15m、棺部掘り込みは西側小口部が狭く18cm、東側小口部に向って僅かづつ広がり、最大幅36cmを測ることと鉄製品の痕跡から東を頭位と考える。棺部の深さ約30cm。主軸方位は S—87.5°—E。

B—59号

主軸長 2.30m、幅93cmの二段掘土壙墓。主軸方位 N—55°—W。棺部掘り込みは南東部小口部が狭く21cm、頭位と思われる北西側小口に向って直線的に広がり、最大値の31cmとなる。床面はほぼ水平となっている。棺部床面より棺部肩まで18~38cmで検出面まで約67cmの深さとなっている。主軸方位は N—55°—W。出土遺物なし。

B—60号

二段掘りの木蓋土壙墓と思われる。一段目は南側にやや広い長方形で掘り込まれ、主軸長 2.32m、中位幅 1.10m を測る。棺部土壙は、そのほぼ中央に主軸長 1.46m、幅35cmの各コーナーが隅丸の長楕円形に掘り込む。深さ約25cm。主軸方位は N—29°—W。出土遺物なし。

B—71号

一段掘りの極めて丁寧に壁面は面取りされた土壙墓で小口板の建て込み穴が両側に掘り込まれている。それを挟み、壁面との間に長側板を置いたものと思われる。土層観察から、小口板掘り込み穴に小口板の厚さを表わす柔かい層が確認され、約5cmの板が想定される。土壙の規模は、主軸長 2.24m、幅82cm、両小口板の内法が 1.87cm、想定長側板の内法58cmが考えられる。床面より、検出面までの深さ58cmを測る。主軸方位は、出土遺物を頭位とすれば S—55°—E である。副葬品は、小石と布に包まれた剣一振が朱とともに出土している。

B—72号

小口を掘り残す二段掘りの土壙墓で、本遺跡からは二例検出されたうちの一つである。一段目掘方は、主軸長 2.26m、幅 1.40m、深さ約50cmを測る。主体部は両小口に挟まれる主軸長 1.53mを測る。小口の両側には、長側板が置かれたものと考えられ、この両長側板に挟ま

れる主体部幅は、約64cmが復元できる。一段目掘方床から主体部床まで約10cmである。掘り残しによる小口上部には、木蓋が乗せられていたものと考えられる。頭位は不明。無茎鉄鏃が主体部東側より出土している。主軸方位はN—28°—Wを示す。

B—91号

一段目掘り込みのほぼ中央に極めて整った側壁でやや中央に膨らんだ主体部を28～30cm掘り込んだ木蓋土壙墓で、主体部肩の主軸方向両側に目づめの粘土が残る。副葬品は鉄製矢じりを南に向け、棺底直上出土。頭位は南にもつ。主軸長2.12m、幅1.03m、主体部の主軸長1.57m、幅中位で44cmを測る。主軸方位N—27°—W。

B—92号

B—91号と同じく、主体部をほぼ中央にもつ一段目掘り方の床がほぼ水平な木蓋土壙墓で、頭位は、主体部の幅42cmを測る北側と考えられ、足位側は、幅30cmと狭くなっている。棺部の深さ25～30cm。副葬品はない。主軸方位N—60°—W。

B—93号

一段目掘り込みの深さ約15cmから主体部の主軸をやや東側に寄って整った長方形プランで、深さ約24cm掘り込まれた木蓋土壙墓と考えられ、主体部の主軸長91cm、幅は南側で28cm～北側にやや広がり、32cmを測る。数少ない小児土壙墓。出土遺物なし。

B—94号

主軸を2.26m、幅1.05mの長方形プランの土壙の中央に主体部を掘り込む。主体部は、東側小口で幅45cm、西側小口で幅の広い東側が頭位と考えられる。東側より鉄鏃出土。主軸方位S—50°—E。

B—95号

二段掘りの木蓋土壙墓。一段目掘り方は、主軸長2.26m、幅88cmの長方形プランで、主体部掘り込みは、東側小口にやや広く、35cm、西側小口で25cm、主軸長1.48m、深さ約50cmを測る。土層断面観察から、第Ⅲ層の白色粘土、15cm大のアカホヤブロックを多量に混入した土が、主体部の掘り方に沿って落ち込んでおり、これらは木蓋上の埋土と考えられる。

B—96号

B—168号円形周溝墓の東側にある。主体部が一段目掘り込みから横穴式に掘る土壙墓3基の一つ。一段目プランは、主軸長約2.00m、幅80cmの長楕円形を呈し、その西側下場から、主軸長約1.90m、北側小口部で幅約56cm、南側小口部で約30cmの主体部が掘り込まれる。頭位は北側、なお、この主体部より鉄鏃片が確認されていたが、現場で紛失している。主軸方

位 N—68°—E。

B—97号

B—96号に近接する二段掘りの土壙墓で木蓋土壙墓と考えられる。切り合は、撓乱のため不明。主軸は、B—96号とほぼ同じのN—66°—E。一段目掘り方の壁は、丁寧に整えられ、肩部は、木蓋を架けるためかほぼ水平で、僅かに粘質土が観察された。主体部掘り方は主軸長1.56m、幅39cmのほぼ長方形で、直線的に約50cm掘られ、床面で角をつくる。鉄鏃は、南側床直上出土。

B—98号

主軸長1.84m、幅77cm、最深部25cmの長楕円形プランで、僅かに中心部に死床部らしきプランが確認できる程度。主軸方位N—38°—W。

B—99号

主軸長1.77m、幅0.82mのコーナーのある長楕円形プランの土壙の北側下場より、長軸に沿って横穴式に掘り込まれた土壙墓。主体部は、床面で主軸長1.35m、幅33cmを測る。横穴部分の埋土は非常に柔らかい黒色土であった。頭位は不明。出土遺物なし。主軸方位N—85°—W。

B—100号

B—96、99号と同じタイプの横穴式土壙墓。開口部が23cm内外と小さく、主体部の主軸長は、1.24m、幅は東側で約20cm、西側小口部分で35cm、深さ中心部で約15cmと極めて窮屈な規模で小児用か。頭位と思われる西側床面より、鉄鏃出土。主軸方位S—83°—W。

B—102号

主体部の深さが20～25cmと浅い二段掘り土壙墓。一段目の掘り方は、主軸長1.99m、幅0.74mのほぼ長方形プランを呈し、主体部掘方は、規格性のある造りである。主軸長1.57m、幅は約30cmの長方形、壁面と床面の境は明確に角をもつ。頭位は不明。主軸方位N—36°—Eを示す。

B—103号

一段目掘方が、検出時に僅かに判明した土壙で、一段目プランは削平されたものと考えられる。主軸長1.83m、幅0.09mの楕円形プラン。主体部は、主軸長1.64m、幅は頭位と思われる東側に広く、約33cm、西側小口部で18cm、深さ20～25cmを測る。東側小口部に小口板の差し込み穴が残る。主軸方位はS—73.5°—E。鉄鏃一点床直上出土。

B - 104 号

一段目掘方は、主軸長が 203m 、幅 0.87m 、長楕円形プランを呈し、肩部は明確な平坦面をもたない。主体部は、西側に寄って掘られ、主軸長 1.62m 、幅は 40cm 内外で中央部が少し膨らんだ長楕円形で、深さ約 28cm を測る。主軸方位 N— 17° —W。出土遺物なし。

B - 107 号

典型的な二段掘りの木蓋土壙墓。一段目の掘方は、主軸長 2.70m 、幅 1.22m の長方形プランで、主体部は、主軸長 1.74m 、幅 37cm 、深さ 35cm を測る。壁面は、垂直的に掘り下げている。中央部西側床面より、刀子 1 点が出土。主軸方位 N— 53° —W。

B - 108 号

IIa 類に属する組合せ式木棺墓で、長側板は小口板に挟まれる本遺跡でも数少ないタイプで B-36 号とあわせ、二例である。土層断面の観察からは、確実に底板を持っていた可能性が強い。また II 層の存在は板外の“裏込め土”にあたるものと考えられ、これにより長側板の高さが約 41cm と復元できる。

第4節 出土遺物の概要

《出土土器》

B-136号周溝出土土器（土器No.1～20）

1は、極めて大型の複合口縁壺で、復元口径約33cm、頸部外径20.5cm。肩部はなで肩で頸部接合面は小口接合と考えられる。口縁は頸部から外反しながら立ち上がり、中位で大きく開く。口縁端部上面内側に内傾する複合口縁をのせる。口縁外表に突帯をタテに貼り付け、左右下方より刻みを数条入れ、他に例のない矢羽根状装飾としている。焼成は良好。色は淡黄橙色。表面風化のため調整不明。

2は、同一個体と思われ、口縁外表には刻みが認められる。胎土、色調、焼成はほぼ同じ。

3は、複合口縁部で、復元口径23.7cmを計る。大きく内傾する複合口縁部端は、わずかにつまみあげている。口縁外表には、波長の短い波状文を描いている。胎土は1～2mm大の砂粒を含み、焼成は堅い。黄褐色を呈す。

4は、不明土器。7の土器に共通点が多く、口縁の可能性あり。

5は、突帯壺の頸部で頸部復元径21.5cmに平行してヨコにつまみあげた刻み突帯をつけ、口縁はわずかに外反する器壁の厚い個体である。調整は、突帯の上下にヨコナデがみられるほか摩耗がはげしく不明。この個体に相当する底部及び口縁端部は見当らないが、1と同様、極めて大型の壺が予想される。胎土には、1mm大の石英および1～3mm大の石粒を少量含み、小白斑を含むためキラキラと光る。色は淡い橙色および黄褐色。焼成は堅い上がりとなっている。表面はザラついた感じ。頸部約 $\frac{1}{3}$ の遺存。

6は、頸部に貼り付け突帯をもつ壺で、頸部から口縁はやや外傾しながら立ち上がる。端部は、図面では断面としているが風化のため判然としない。平坦面をもつことから口唇部との可能性もあり、単口縁壺の可能性が大である。調整は、口縁内面にタテ方向の目の荒いハケ目が残り、そのあとナデが行われたと思われる。胎土には、細粒および1mm大の砂粒を含み、光沢のある小白斑がみられる。焼成は良く堅い。色は淡い橙色を呈す。約 $\frac{1}{5}$ の残存。

7は、復元径7.0cmの高壊か器台の軸部と考えられ、下方に向ってわずかに開く。内面にはヨコナデ、外面はタテにヘラミガキがなされ、壊部外面より、同じくヘラミガキが行われ、頸部はヘラの厚さを表わす。約3mmの凹線が施される。胎土に1～3mm大の砂粒を含み、焼成はやや軟調である。色は淡黄褐色。約 $\frac{1}{4}$ の残存。

8は、長頸壺の肩部～胴部。胴部最大径は中位より下にもつ扁平な器形が考えられる。外面は風化のため調整不明、内面は肩部に指押さえ、胴下半がナデ。その間をヨコナデする。

胎土は1mm前後の石英を多量に含み、焼成は堅い。色調は外面橙色、内面は黒灰色。

9は、壺の胴部で扁球形をなすと思われ、図示したものは屈曲部分である。外面はタテ方向のヘラミガキ。内面は上半が指方向、細かいハケ目、中位が縦方向のハケ目、下半、左上りの細かいハケ引痕が施される。色調は外面が淡黄褐色で黒班あり、内面淡い黄褐色を呈す。胎土には微量の砂粒を含む。焼成は堅い。

10・11は、壺底部片。底に円盤状に粘土を貼り付ける。10は内面ヨコナデ、外面ナデによる調整。11は内面剥離、外面ヘラナデされる。胎土は1～3mm大の砂粒を多く含み、黄橙色を呈す。焼成は良好。底部径はともに5.0cm。

12は、復元口径37.4cmの大型高壺で、わずかに内湾しながら立ち上がる壺部をもち、壺部との接合近くにおいて内湾度を強め立ち上がる。壺部口径は33.4cmと比較的大きい。壺部と口縁は直接小口接合し、外面には壺部の粘土を突帶としてつまみ出す。そこより短く外反する口縁をのせる。口縁端部は上下にややふくらみ、口唇は平坦とする。内面においては、壺部との接合小口よりやや下方に明確な稜を作る。胎土は1～2mm大の砂粒を含み、焼成はやや良、色調は黄褐色から橙色。遺存度は壺部の約 $\frac{1}{2}$ 。

13・14は、裾部との接合に明確な屈曲点をもたないタイプで、下方に続く部分は大きく開くものと考えられる。脚柱上方に棒など工具による穿孔がある。壺部とは軸部差し込み。風化剥離がはげしい。胎土は1～2mm大の砂粒を含み、焼成はやや不良。色調は淡黄褐色。

15は、高壺脚部で壺部との接合は、軸部差し込みのあと、円盤充てんする。内面には、この時の押さえの棒状工具痕を残す。上面はミガキ面が残る。脚柱部はわずかにしばられた中位よりわずかに開きながら下方にのびる。胎土は、前述にほぼ同じであるが、焼成は良く、色はやや濃い黄褐色。約 $\frac{1}{3}$ の残存。

16・17・18は、高壺の同一個体と思われる。16は口縁で端部下方はわずかに垂れる。17は壺部で内面に稜をもち、外面に三角形状突帶を表わす。18は、脚柱端部断面が三角形を呈す。外面にタテ方向のミガキ、内面はナデ調整、胎土はともに1mm大の砂粒を含み、焼成は比較的堅ちである。色調は黄橙色、一部黒褐色部あり。復元底径26.5cm、約 $\frac{1}{16}$ の残存。

19・20は、同一個体と思われる。19はわずかに裾広がりに広がる脚柱で、大きく内反する裾部との屈曲部に円形透しをもつ。壺部とは軸部差し込み?の後、粘土を充てんする。20は19の裾部と考えられる。調整は風化のため判然としないが、外面ヘラミガキ、内面斜めのハケ目、端部内外面ヨコナデが見える。胎土に1～2mm大の砂粒および白っぽい粒子を含む。焼成は良好。淡い黄橙色を呈す。

B—49号周溝出土土器 (21~25)

21は、大型の複合口縁壺の口縁部。残存は約 $\frac{1}{20}$ と小さいため、復元口径31.7cmは大きすぎて口縁小口に大きく内傾する複合口縁をのせ、外表に櫛描波状文をつける。口縁内外ともハケ目、複合口縁の内面はヨコナデされる。胎土は1mm大の砂粒を含み、焼成は堅い。外面はぶい橙色、内面は浅黄橙色のぶい橙色。

22は、周溝を切る形の溝からの単体出土。川床周溝墓群唯一の須恵器、坏蓋と考えられ、口径14.3cmを計り、胎土に1~2mm大の砂粒含む。焼成は極めて良好で、断面はセピア色を呈す。内外とも青みがかった灰色。口縁部約 $\frac{1}{2}$ 、体部はほぼ完全に残る。底部外面に//印がある。

23は、複合口縁壺の口縁部。復元口径17.8cmで残存は約 $\frac{1}{10}$ と小さい。口縁端部上面に僅かに外傾する口縁をのせ、口唇は隅丸状となる。坏部外面は、ハケ目、複合口縁外面は、ヨコナデされ僅かに窪む。胎土に2~3mm大の砂粒を含み、焼成は堅い。淡黄へ灰白色を呈す。

24は、壺の頸部と考えられるが器台の軸部の可能性もある。肩端部内面は指押えが残り、頸部はナデ、口縁はハケ目、外面はハケ目の後、ミガキが施される。胎土は1~3mm大の長石および細かい石英粒を含み、焼成は極めて良である。浅黄橙色を呈す。

25は、比較的器壁の厚い高坏脚柱部上半で、接合は軸部差し込みの後、円盤充てんする。調整は、内面にヘラ状工具痕を残し、外面は、タテに細かいヘラミガキが施される。坏部中央は風化のため不明。胎土に1~3mm大の砂粒を含み、焼成は極めて堅い。浅黄橙色。

B—141号周溝出土土器 (26~30・35)

26は、壺の口縁部で、口縁部は「く」の字に外反するが、内外とも稜をもたない。口縁端部は丸く仕上げられる。外面はナデ調整、内面は指押え。色調は内外面とも淡赤褐色。胎土には1~4mm大の砂粒を含む。焼成は良好。

27は、長胴壺の胴部で、26と同一個体と考えられ、胴部最大径は中位より上にある。器面調整は、外面はタテハケ目調整、内面は胴部上半か左上りのハケ目調整、胴部下半がタテハケ目調整が施される。胴部中上位から下半にかけてススが付着する。色調は、外面が淡赤褐色、内面が淡黄褐色。胎土には1mm強の砂粒を多量に含む。焼成は堅い。

29は、高坏の口縁で、坏部は直線的に外方にのび屈曲部は上位にあり、そこから口縁部は外反する。端部は丸く收められる。屈曲部は木口で接合し、内外面ともに稜を有す。調整は、外面はタテ方向のヘラミガキ、内面がナデ調整と思われる。口縁部の屈曲部下半のヘラミガキは連続しない。色調は外面が暗褐色を呈し、黒斑部分と考えられる。内面は淡黄褐色、胎

土には1mm内外の砂粒を多量に含む。焼成は良好。28も同一個体と思われる。

30は、高坏の脚部で、円柱状を呈し、坏部と脚部は別々に作られる。坏部に脚部を差し込み一体化している。脚部の中央部分には粘土が充てんされる。器面調整は、風化が激しく判然としない。色調は外面が淡赤褐色、内面は淡黄褐色をなす。胎土には砂粒を含む。29の脚部と思われる。

31は、壺胴部で、38などの小型壺が考えられる。焼成は良、淡い黄褐色、調整は風化のため不明。

B-161号周溝出土土器 (32・33)

32は、胴半が、約 $\frac{1}{2}$ ほど残存した長胴の小型壺で、口頸部は残存しないが「く」の字に外反すると考えられる。胴部で3~4mm口頸部と肩の接合面で1~2mmと器壁が非常に薄い。外面の調整は、風化が進んでいるので判然としないが、ナデと思われ、内面は指頭オサエ、胴中位ではヨコ方向のハケ目が認められる。胎土は1mm内外の砂粒を含むものの精選されている。色調は、外面淡赤褐色、内面は淡黒色を呈している。焼成は堅い。

33は、小型丸底壺の口縁部で、口縁部は外傾し、端部は平坦面をなし、下方に若干垂れている。口縁部径が最大径となる。端部内面には、明確な稜をもつ。外面もヘラミガキによつて明確に稜が表現されている。内面ともていねいなヘラミガキ調整、胎土は1mm弱の白粒を少量含む。色調は外面が淡黄橙色内外の淡黄褐色、焼成は堅緻である。

その他のB区出土土器 (34~38)

34は、壺の底部で、底部は丸底気味のものに、径約1cm粘土板を貼り付け乳房状を呈している。胴部は扁球状をなすと考えられる。器面調整は、外面はていねいなナデ調整、内面がナデ調整。色調は内外面とも淡赤褐色を呈す。胎土には1mm弱の砂粒を微量に含む。焼成は堅い。

35は、台付鉢で、体部は砲弾状を呈し、口縁部付近で直立気味に立ち上がる。端部は丸く収められている。台部は上げ底をなす。内外面ともナデ調整。色調は外面が淡黄褐色、内面は淡褐色、胎土には砂粒を多量に含む。焼成は良好。

36は、体部が球形化した小型の広口壺で、胴部最大径は、器高の $\frac{2}{3}$ ほどの位置にあり、口径より大きく、やや肩のはった器形をなす。底部は、径2.5cmほどの小円盤をはりつけている。口頸部は「く」の字に短く外反し、口唇部はナデにより下方へ若干たれさがる。調整は、口径部内外面ヨコナデ、胴部は風化が著しいが、外面はタテヘラミガキ、内面上半は指おさえナデ、下半はタテ方向のヘラミガキである。底部から胴下半部にかけて径3~4cmの

黒斑がみられる。胎土は1mm大の砂粒を多く含み精選され、色調は淡黄褐色を呈する。焼成は堅い。遺存度は、口頸部約 $\frac{1}{3}$ 、胴部約 $\frac{1}{2}$ である。

37は、肩上半部以上と胴部の過半が欠失している小型壺で、胴部最大径はほぼ中位にあると思われるが、大きく横にタマネギ状にはった胴部が特徴的である。底部は径4cmほどの円盤をはりついているやや雑な平底である。内外面とも風化が著しいが、底部付近にタテハケ目の痕跡がある。胴部はナデもしくはミガキと思われる。胴部内面はナデと思われる。底部付近に黒斑がある。

38は、壺の胴部で、扁球形となし、胴部最大径は中位より下にある。短く外反する口縁部がつくと考えられる。器面調整は外面がていねいなナデ調整あるいはヘラミガキ、内面は上半が細かいヨコ方向のハケ調整、屈曲部がヨコ方向の粗いハケ調整。下半が細かな左上りのハケ調整。上半と下半は同一原体と思われる。上半と下半は、別々につくられ内面に細かなハケ調整が施されたのち接合され、接合部分に粗いハケ調整が行われたと考えられる。また、屈曲部から上約1.5cmの幅で粘土帯の接合部分が観察できる。色調は内外面とも淡黄褐色、胎土には砂粒はほとんど含まない。焼成は堅い。

C-35号周溝出土土器(39~46)

39は、長胴の複合口縁壺で胴部最大径は、中位より若干上位にあり、肩ははらず胴部は、長楕円形を呈している。頸部は、肩上端からわずかにたちあがり外湾する。肩と頸部の接合は、肩の木口部に頸部の木口が接合され、内外の稜はそれほどするどくはない。口縁部上半は、下半部上面からゆるく内湾ぎみにたちあがる。外面には、6条の比較的整美な波状文が施されている。口唇部は、平坦で内さがりになり、外面ではたちあがりぎみになっている。底部は、突出した平底である。調整は胴部外面は、細かいがやや削りぎみにはどこされたタテハケ目、下半、胴上半部は、左あがりの細かなハケ目が施されている。頸部も細かな左あがりの針状ハケ目で、口縁下はヨコナデされる。複合口縁部は、ナデのうち波状文が施文される。口縁上半部内面はヨコナデ、下半部は左あがりの細いハケ目、胴上半部内面は、左あがりの細かなハケ目、胴下半部は、タテおよび左あがりの細かなハケ目である。底部内面は指頭オサエで整形される。胎土は、1mm大の砂粒を含み、色調は淡赤褐色を呈する。焼成は堅緻である。遺存は、口頸部約 $\frac{1}{2}$ 、胴中位は直接接合しないものの約 $\frac{1}{5}$ 、下半部はほぼ完全にのこっている。

40は、壺部中位に整美な稜をもつ中型の高壺で、壺部内面の稜より下は内湾し、口縁部は立ちあがり氣味にやや膨らみながら外反し、口唇端部は斜めに平坦面を作る。外面において

は、より明確で内湾しながら稜の部分で約1cm立ち上がり外反する。内面はタテにヘラミガキがなされ、口唇端部はヨコナデ、口縁部および坏部は、タテにヘラミガキ、立ち上がり部分においてヨコ方向の弱いヘラミガキがなされている。胎土は良く精選された中に1~3mm大の石粒を含み、焼成は良好。色調は赤橙色であり、直接接合しないものの、他の口縁片は橙色から黒変部をもつものもある。遺存は約 $\frac{1}{6}$ 。

41は、高坏脚部で坏部との接合面より、脚裾までほぼ完全に遺存。軸部差し込みによる接合で、上部より僅かに締りながら、また裾に向って緩やかに広がる。裾部には、明確な稜をもたないタイプと考えられる。調整法については、内面中位より上に接合時の指によるナデ上げが残り、下位にはヨコナデが行われている。外面は所々にヘラミガキがなされており、所々に特有の光沢が残る。前述40と同一個所出土もあり、同一個体の可能性大。

42は復元胴部径15cmの壺で、底部はほぼ残り、胴部においては約 $\frac{1}{4}$ が遺存、最大径は胴部のやや上位におくものと考えられ、復元胴部の最大径15.0cmを計る。胴部中位から肥厚しながら底部に結び、尖底気味の底部を作る。内外面とも風化摩耗がはげしく、調整法は歴然としないが、底部内面に指押え、外面の一部に黒変があり、ナデが認められる。胴部外面は、風化摩耗が激しく、内面にかすかにハケ目が認められる。胎土には、1~4mm大の砂粒・石粒を多く含み、焼成は僅かに軟調のためもろい部分もある。色調は、内外面とも浅黄橙色である。

43・44は、小型高坏で坏部と脚柱部と直接接続しないが、脚部においては明確な稜をもたず、裾部が押しつぶれた脚部が続くものと考えられる。脚柱と坏部の接合は、軸部差し込みのあと上面はナデアゲがみられ、脚柱部は内外ともナデが行われ、脚裾にかけてはヨコナデがみとめられる。坏部は内外ともナデ、口縁端部付近はヨコナデとなっている。胎土はよく精選されているが、1~3mmの砂粒を僅かに含み、焼成は良好で、堅い仕上がりとなっている。色調は赤橙色を呈す。

45は、脚部は頸部より緩やかに内湾し裾を作るものと考えられる極めて短脚の小型高坏で、坏部下部を軸とし、それに脚を貼りつけている。内外面ともナデ仕上げ。なお、坏部と脚部の逆転の可能性もある。胎土は、精選され、中に1~3mm大の砂粒を含む。色調は、白っぽい浅黄橙色を呈す。焼成は、良くやや堅い仕上がりとなっている。脚柱部はほぼ残る。口縁、脚端部と思われる破片は採集されていない。

46は、小型壺の底部で、突出した平底である。内面は指で押されたものかへこんでいる。調整は、内外ともナデられている。胎土は、1mm大の砂粒を含み、色調は淡黄褐色。焼成は堅い。

C-36号周溝出土土器 (47~49)

47・48・49は、中型の高坏で、それぞれ接合部分を欠くが同一個体。坏部は内彎しながら口縁との接合部に続き、やや器壁を肥厚させ外に開き始める。内側には接合部に明確な段を有す。内外ともていねいなナデが行われ、口縁部外面にはヘラ削りがなされている。脚柱はエンタシス状にふくらみ、坏部との接合は軸部差し込みで、坏部上面がわずかにこり薄い。調整は、内面ナデ、外面タテにヘラミガキ。脚裾径約 $\frac{1}{10}$ の残存。椀を伏せた形のタイプ。胎土は、ごく細かい粒子で均一。石英を多く含みキラキラした感じである。火山灰起因か？焼成は堅く上がっている。色は脚柱部の内面が淡い橙色を示すほか外面は淡黄橙色で、脚裾の一部に黒変が残る。

C-103号周溝出土土器 (50~53)

50は、複合口縁壺の口頸部片で、頸部は肩部からすぐに「く」の字に外反する。短い複合口縁部は、口縁端上面から内傾して立ちあがり、その外表には波状文が施されている。調整は、内外面ともナデである。胎土は1mm大の砂粒を含み、色調は淡黄褐色を呈する。焼成は堅い。

51は、壺の底部でやや突出した平底である。胴部は球形をなすと思われる。器面調整は、胴部下半外面は細かなタテハケ調整、内面はヨコ方向と左上りのハケ目調整。底部はていねいなナデ。内面指おさえ調整が施される。色調は外面が淡黄褐色、内面が暗赤褐色を呈す。胎土には1mm内外の砂粒を含む。焼成は堅い。

52は、胴部が球形化した複合口縁壺で、胴部最大径はほぼ中位にある。頸部は、肩からするどく、「く」の字に外反し、口縁部近くでさらに外傾の複合を始める。複合口縁部は、口縁端部から5mmほどの短いものである。外側には、波状文は施されていない。頸部と肩部の接合は木口で接する。底部は、わずかに突出した平底である。肩部外面の調整は、ていねいなナデ、口頸部内面もていねいなナデである。胴内面は、ストロークの短いヨコハケ目で、底部近くは抑えナデが施されている。ほとんど砂粒を含まないザラッとした胎土で、色調は淡黄褐色を呈し、焼成は堅い。口縁部と胴部上半は $\frac{1}{2}$ ほど欠失している。

53は、胴部が球形化する単口縁壺で器高53.0cm 胴部最大径44.4cmを計る。口縁は肩部上端にのる形で接合し、外反しながら大きく開く口唇部は、丸くつくり、僅かに下に垂れる。底部は僅かに平底を残し、前述の53に比べて肩の器形。調整は外面が風化のため、明確に残らないが、胴部上半はタテ方向のハケ目、胴部下半は斜めのハケ目。内面は頸部に指押えが残り、ヨコ方向から斜めのハケ目が施される。胎土に1mm大の砂粒を含み、石英および光沢な微粒子を含む。色調は外面淡い黄橙色、内面は黄褐色を呈す。焼成は堅い。

C - 108 号周溝出土土器 (54~58)

54は、小型の鉢で口縁径11.0cm、器高9.2cm、胴部最大径は、頸部下2cmのところにあり、口縁径よりは小さい。球形の胴部はそのまま底部へとつづく。底部は1.5cmのややあげ底ぎみの平底である。口縁部は、内湾した胴部の若干内側から外反ぎみにたちあがり、外へひらく。肩部と口縁部の境は明確な段がつく、口唇部は丸く収まる。器面調整は、ナデである。胎土は1mm大の砂粒を含み、色調は淡黄褐色を呈する。焼成は堅い。口径部は $\frac{1}{3}$ 、胴部は $\frac{1}{2}$ 弱の遺存である。

55は、壺の底部片で、底部は、尖底気味のかろうじて平底を残すものである。調整は、風化のためよくわからない。胎土は、1mm内外の砂粒を多く含む。色調は、淡黄褐色を呈し、焼成は甘い。

56は、大型の壺の底部で、54に類似するものが考えられ、より明確な平底が考えられる。調整は、内面ハケ目が確認され、外面は底部に指押え痕が残り、その他は風化のため、明確でない。焼成は堅く、赤褐色を呈す。胎土には1mm大の砂粒を含む。

57は、小型の壺の口縁部で「く」の字に外反する。頸部内外面に稜を有する。端部は丸く収められる。口縁部は内外とも細かいヨコハケ目調整、頸部外反はタテハケ目、内面は指押え調整が施される。色調は外面が淡黄褐色、内面が淡赤褐色を呈す。胎土には1mm弱の砂粒を含む。焼成は堅い。

58は、胴部が扁球形をする広口壺か、長頸壺の胴部下半で底部は僅かに窪みをもつ、丸底をもつ。内外面とも風化のため剥離してはっきりしないが、外面にミガキらしき調整痕が残る。底部に黒変部がある。胎土に0.5~2mm大の砂粒を多く含み、石英および光沢のある微粒子を含む。焼成は良好で、淡い黄橙色を呈す。遺存は底部の約 $\frac{1}{2}$ 。

C - 109 号周溝出土土器 (59)

59は、ミニュチア土器（不明）、底部径2.7cmでわずかに丸味をもつ。底部のみの出土。口縁部を欠く。底より上位にしばり込まれた形で凹部をもち、外傾しながら立ち上がり、器壁を薄くし、内湾しながら立ち上がる。底部の厚みは1.2cmと厚い。胎土に1~2mm大の砂粒を含み、焼成はやや柔かい。色調は淡い黄褐色。

C - 116 号周溝出土土器 (60~73)

60は、口頸部が欠損した長胴の壺で底部から頸部までの器高45.0cm。胴部最大径は、中位より上にある。頸部、肩部は、木口で接合され、その接合面外側は一条のキザミ目の突帯がめぐっている。頸部以上は欠失しているが、肩部からすぐに外反するタイプで内面には稜を

もつ。おそらく「く」の字に外反しながら上部に複合口縁をもつと思われる。底部は、突出した平底を呈している。底面には、竹かなにかでひいたらしく、5条のへこみが平行に圧痕としてのこっている。器面調整は、外面は左あがりの細かなハケ目が認められる。胴上半内面肩近くは、ヨコハケ目、中位では左上がりのハケ目が施され、胴下半部は、指押えナデと思われる。胴中位から肩にかけて約 $\frac{1}{2}$ が欠損している。

61は、複合口縁をもつ器台の受部で、くびれ部から大きく外湾し、端部にやや内傾気味の口縁部がのる。口唇部は、丸く仕上げられる。下方にも若干拡張される。内側は丸味をもって立ちあがる。口縁部外面には粗い凹線文が施される。口縁部内面はヨコナデ。くびれ部付近にかけては、内外面ともハケ目調整で、外面はタテ方向、内面には左上りのハケ目、くびれ部内面下半には、上部のハケ目より細かいハケ目調整が観察できる。色調は、外面は淡黄褐色、内面は淡赤褐色、内面には一部黒斑を認める。胎土には、1mm内外の砂粒を含む。焼成は良好。

62は、複合口縁壺の口縁部で、擬口縁端部に上面に接合され、やや内傾しながら立ち上がる。（複合口縁部は、団面よりやや直立する可能性がある）口縁端部は平坦面を呈す。口縁部外面には、3条の凹線が施される。内外面とも風化が激しく調整は不明。色調は内外面とも淡赤褐色。胎土には1mm強の砂粒を含む。焼成は良好。

63は、壺の口縁部で頸部から「く」の字に外反する。端部付近でさらに若干外反する。外面は、風化が激しく調整は不明。口縁内面はヨコナデ。頸部はユビナデ調整。色調は外面が淡赤褐色、内面が淡黄褐色。胎土には1mm内外の砂粒を多量に含む。焼成は堅い。

64は、小型壺の頸部で、「く」の字に外反する口縁部をもつと考えられる頸部には高さの低い突帯がつく。風化が全体に激しく不明瞭だが突帯に列点文が施されていた可能性がある。色調は、内外面とも淡黄褐色、胎土には1mm弱の砂粒を含む。焼成は堅い。

65は、ミニチュア土器で、鉢型を呈し、底部は突出した平底をなす。手捏ね土器で全体に指頭痕を残す。内外面とも淡赤褐色、胎土はザラッとして砂粒はほとんど含まない。焼成はやや良好。

66は、頸部から胴部にかけて残存した長胴の壺で、頸部は、肩部端の上面に接合され、「く」の字に外反すると思われる。器面調整は、外面の頸部付近は、ナデ調整、肩部から胴部にかけてタテハケ目、胴部には左上がりのハケ目が施される内面の頸部付近は指押え、胴部にかけては、左上がりのハケ目が施される。また、内面頸部付近は、約3cm幅の粘土帶接合面が観察できる。色調は、内外面とも淡赤褐色を呈す。胎土には、1mm内外の砂粒を多量

に含む。焼成は良好。

67は、球形と思われる壺の底部で、突出した平底を呈す。底部中央付近は、若干凹む。器面調整は、風化が激しく不明。底部は指押えで指頭痕を残す。色調は内外面とも淡赤褐色、外面には一部黒斑が認められる。胎土には、1mm強の砂粒を多量に含む。67と同一個体と考えられる。

68は、やや長胴タイプの壺胴下半部で、残存率は約 $\frac{1}{3}$ 。底部は尖底気味のしづら込まれた底部をもち、安定した感がある。調整は内外とも風化のため、明瞭でない。焼成は堅く、良好な上がりとなっている。胎土に1～3mm大の砂粒を多く含む。色調は淡い褐色を呈す。

69は、胴部球形を呈す壺の底部で、胴部最大径は、中位より若干下位にある。胴部は、扁球形とも考えられる。底部は、丸底気味の尖底をなす。胴部外面は、左上りのタタキ調整。約3cm×5cm幅で時計とは逆方向に施される。底部付近は、ナデ調整と思われる。内面は、風化が激しくて不明。色調は、内外面とも淡黄褐色、底部付近に2cm×1cmの黒斑あり、胎土には1mm強の砂粒を多量に含む。

70は、大型高壺（脚部不明）。口径42.1cmで壺部は内湾しながら立ち上がり、壺部と口縁部との接続はやや内側、口縁がのる形で内外に1～2mmの整美な段を有し、口縁部はやや外反気味に立ち上がり、端部付近において外反度を強め、端部に結び端部は丸く作る。脚部との接続は、軸部差し込みのあと円盤を上から装てんする。調整法については、壺部内外面に荒いミガキが認められ、口縁部内面は端部にかけてヨコ方向のていねいなミガキがなされ、外面はヨコ方向のハケ目が行われる。内外の段部上方には、約7mmの幅にナナメ方向のハケ目があり、装飾性効果を現出している。残存は壺部のほぼ全部。胎土は、細砂粒を主体とし長石、各閃石、石英および光沢をもつ細粒を含み、表面はザラザラとした感じで、火山灰の混入が予想される。焼成は良好で、色調はにぶい橙色～明黄褐色を呈し、口縁部内外面に黒変がある。

71 脚柱部中位径5.0cm、脚柱高約8.0cmの高壺脚柱で、上面には壺部（内面）が残り、ていねいなナデがみられる。脚柱外面は、タテ方向のヘラミガキ、内面は棒状工具で調整、接合は、接合部はガッチリして肉厚である。下部は、脚部との変換部までの遺存である。胎土は、1～3mmの粉っぽい赤褐色と褐色の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は、白っぽい浅黄橙色を呈す。

72 71の脚部と思われる。底部復元口径9.9cm。色調、胎土は71に同じ。透しは脚柱部と裾部の屈曲部の下方にあり、遺存はほぼ $\frac{1}{2}$ で、三方透しか四方透しか不明（2確認）、

裾部口唇部の上方に段を有し、この部分までタテ方向のヘラミガキが行われ、裾端部にかけてヨコナデ、口唇は丸く作る。内面は斜方向に幅約10cmのハケ目、透し部分より脚柱接続部までヨコ方向のハケ目仕上げが行われている。

73は、前述2点の脚柱部下半に相当するものと考えられるが、脚裾部との接続部から裾部にかけて問題がある。なお、胎土、色調および調整法に差異はない。あえて同一個体との認識で並べて作図を行った。

C-117号周薄出土土器 (74~83)

74は、単口縁壺（口頸部、口頸～口縁部、口縁部の図上復元）で、口頸部にキザミ目突帯をもつ。復元口縁径18.8cm、復元頸部内径8.3cmを計り、口縁は口頸部より「く」の字状を呈し、外反しながら口縁端はわずかに平坦面を作り下方に垂れる。肩部と口頸部の接合は、小口面で行われる。胎土には1~4mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は橙色。

75は、複合口縁壺の口縁部より上半部で、復元口径19.7cm、口縁部は外反しながら開き、端部上面に外傾気味に複合口縁をのせる。口唇部は丸く作る。調整は、内外面ともヨコナデが行われ、複合口縁部外面に7条の櫛描波状文を回す。胎土は1~3mm大の砂粒を多く含み、焼成は普通、色調は外面淡橙色、内面淡黄橙色。

76は、復元口径15.5cmを計る複合口縁壺の口縁破片で、口縁部にはほぼ直立した形で複合口縁がのる。（複合口縁の接合からやや内傾気味のたち上がりも考えられる。）口縁内部端は僅かに外に張り出す。調整は内外面ともナデ、複合口縁外面に6条の櫛描波状文をつける。胎土には1~2mm大の砂粒を多く含み、焼成は良、色調は、淡橙色を呈す。

77は、中型壺の底部で、胴部は最大径を中位にもつものと考えられ、底部においてすばまり、かろうじて底を残す。調整については、底の部分にイネ科の植物纖維らしきものがあり、底部付近の立ち上がり部分にはタテにナデが行われる。ほかは風化のため、調整不明、胎土に1~3mm大の長石少量と、1~5mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。また、色調は淡黄橙色を呈す。遺存は底部約 $\frac{1}{3}$ 。

78は、球形化した体部をもつ壺と考えられ、わずかに平底を残す。調整法については、内部は剥離および風化のため不明であるが、外面はていねいなナデで若干光沢を帯びる。胎土に1~2mm大の石英を多く含み、焼成は淡い橙色を呈す。遺存は底部のみ。

79は、高杯口縁部で、作図では深い感じとなっているが、72のように比較的に緩く広がる杯部で、大型の高杯で78~82は同一個体と考えられる。82は、脚柱上半部で裾広がりのタイプからエンタシス状タイプの中間形で脚裾部の屈曲点は明確で椀をふせた形のものが考えられる。

胎土は1mm前後の細かい石英粒を多く含み、焼成は良好。内外面とも明褐灰色を呈す。調整は風化のため不明。

83は、高壺の脚柱部と脚裾上半部で、脚柱部はわずかに末広がりを呈し、脚裾部は、大きく外方へ広がる。内側においては稜をもつが、屈曲部は明瞭な一線をなさない。脚柱部と裾部変曲点直下には、内側においては稜をもつが、4穴の円形透しがあり、その中間点で、3cmほど下部にも透し穴が配されている。脚柱部は、壺部にさしこまれ、中央空間部は円盤充てんされる。風化が著しく調整は明瞭ではないが、器表はタテ方向のヘラみがき、内面はナデと思われる。

C-120号周溝出土土器 (84~92・107)

84は、複合口縁壺で、胴部最大径は34.5を計り、ほぼ中位にある。体部は球形を呈している。頸部は肩からすぐに「く」の字に外反する。頸部は肩部端上面に接合されている。複合口縁は、平坦な口縁端よりいくぶん内側から立ちあがり直立に近い。その上半は欠失しており、残存部には、波状文が施されているのが認められる。底部は、胴部のカーブのまま、わずかに平底を残している。調整は、風化が著しく判然としないが、胴下半はミガキに近いといねいなナデ、上半部はナデ調整と思われる。口頸部内外面は、ナデ調整である。胴上半部内面は、ヨコナデと指おさえナデ、下半部は、指おさえナデナデが施されている。胎土は、1mm大の砂粒を含み、色調は、淡赤褐色を呈するが肩部以上は、淡黄褐色を呈している。焼成は堅い。

85は、底径3.6cmの平底をもつ壺の胴下半部で、底部はやや肥厚した器壁をもち、球形化した胴部からやや尖底気味に底部に結ぶ。調整は風化・摩耗のため、明瞭に残らないが、僅かに外面斜目下方へのハケ目が残る。内面は、斜目～横方向の幅広いハケ目が施される。底部下面はナデ？。胎土に細砂粒、石英、長石、雲母などに加え光沢な微粒子を含み、ザラついた感がある。焼成は良好で、色調は内面がにぶい橙色。外面、橙色および明赤褐色を呈す。胴部外面に黒変部をもつ。

86は、複合口縁壺で、肩部が欠失しているが、胴部最大径は31.5cmを計り、中位にある。頸部は直立ぎみに立ちあがったあと外反するが、外反の度合に弱い。複合口縁部は、口縁端上面やや内側上がりから内湾ぎみに内傾する端部は丸く收める。外面には、波長の短い波状文が施されている。わずかに突出した底部は、突レンズ状の平底をもつ。風化が著しく、調整は判然としないが、胴部外面はヘラミガキもしくはていねいなナデ。頸部から口縁にかけては内側ともナデと思われる。胴内面上部はヨコハケ目、下半部はナデおよびユビオサエ調整

である。

87は、複合口縁壺の肩～口縁部。肩部端上面にはほぼ直線的に外傾する口縁をのせる。復元口径18.9cm。図示されたよりやや外傾する可能性あり。口縁端部上面よりやや内側に内傾する複合口縁を貼り付ける。頸部内外とも明瞭な稜をもち、内面には指押えが残るほか、内外とも風化のため調整不明。残存率、口径部約 $\frac{1}{6}$ 。胎土に1～3mmの砂粒が多く含み、長石を少量含む。焼成は良好で、色調は、外面橙色、内面はにぶい橙色を呈する。

88は、87の底部と思われる、やや尖底気味の底部で僅かに平底を残す。調整は外面にタテ方向のハケ目のあとナデが施される。胎土、焼成、色調は87に同じ。

89は、壺肩部で頸部以上を欠失す。なで肩の肩部上端に外反する口縁をのせるものと考えられ、肩部内面は輪積み痕が残り、その継ぎ目を指押えしている。頸部内面は明瞭な稜がみられないが、ヨコナデが残る。外面はタテ方向のハケ目による調整が行われる。胎土には、1～3mm大の赤褐色、褐色砂粒を多く含む。内外とも橙色。焼成は極めて堅い上がりとなっている。

90は、複合口縁壺の口縁部で、口縁部下端は直接頸部と接続するものと考えられ、極めて立ちあがりのないタイプである。口縁は大きく外反し、口縁端部下に張り出し丸くつくる。複合口縁は、やや内側に内傾気味に立ち上がるものと考えられる。残存は、口縁部～頸部の約 $\frac{1}{3}$ 弱。復元口径約14.0cm。調整は外面に斜方向のハケ目がみられる。胎土には1～3mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好、内外ともにぶい橙色を呈す。

91は、複合口縁壺の口縁で短かく外反する口縁に端部はヨコナデされ、端部上面に複合口縁をのせる。頸部との接続は不明、内外ともヨコナデ。胎土には1～3mm大の砂粒を多く含む。焼成は良、色調は内外とも浅黄橙色。

92は、比較的中型の壺の底部で、90・91などの底部にあたるものと思われる。球形化した胴部と張り出し気味の平底の間に明瞭な稜をもつ。底径3.7cm。器壁は胴部下半にかけて少しづつ、薄くつくり、外面はタテ方向のハケ目、底近くはナデを行う。内面は調整不明、焼成は良好。色調は内外ともにぶい橙色。

C-122号周溝出土土器(93～104)

93は、壺の口縁部で、小型丸底壺か、直口壺の口縁と思われる。口唇部は、丸く収っている。調整は、風化のためよくわからない。胎土は、砂粒を含まない精選されたもの。色調は、淡赤褐色を呈し、焼成は甘い。

94は、小型壺の肩～口縁部で、口縁部は「く」の字に外反する。口唇部は丸く収っている

が、あるいはもう少しのびの可能性がある。胎土は、1mm大の砂粒を多く含み、色調は淡赤褐色を呈している。焼成は甘い。

95は、なで肩を呈する壺の肩部で、わずかに残った頸部は、直立ぎみに外反すると思われる。肩と頸部の境は外面では明瞭だが、内面では稜をなしていない。外面は、タテおよび左あがりのハケ目調整、内面は指頭ナデあげおよび指頭押え。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色を呈する。焼成は堅い。

96は、複合口縁壺の口縁部小片、複合口縁部は、内傾しており高さは低い。その外面には、波状文が施されている。調整は、内外ともヨコナデ。胎土は1mm大の砂粒を含み、色調は、淡赤褐色を呈する。焼成は堅い。

97は、高坏口縁部で坏部との接続部分は不明、長く外反しながらのびる口縁に口唇は平につくり、下方に僅かに膨れる。調整不明。胎土に1～2mm大の石英粒を含み、ザラッとした感じの胎土。焼成は良好、色は淡い橙色。

98は、壺の底部で若干尖底気味の丸底である。胴部は球形を呈すると思われる。外面はヘラミガキあるいは、ていねいなナデ調整、内面はナデ調整が施される。他の壺の底部と比べると薄手である。色調は内外面とも淡黄褐色、胎土には砂粒を含む。焼成は堅い。

99は、小型の鉢または壺の胴部と思われる。胴部最大径は、中位より上にある。砲弾形の体部に尖底の底部がつく。器面調整はナデである。色調は、外面が淡赤褐色、内面は淡黄褐色。胎土には砂粒を含む。焼成は良好。

100は、壺の底部で、あげ底ぎみの平底を呈している。調整は内外面ともナデか？胎土は砂粒をあまり含まず細かい。色調は淡黄褐色を呈し、焼成はやや軟い。

101は、壺の底部、底部は平底を呈す。球形の胴部へ続くと思われる。外面は、ていねいなナデ調整、内面は、風化が激しく調整は不明。色調は、内外面とも淡赤褐色。胎土には1mm強の砂粒を多量に含む。焼成は堅い。

102は、長胴壺の胴部下半と考えられる。外面はていねいなナデ調整、内面はナデ調整、色調は外面が淡赤褐色、内面が淡黄褐色を呈す。胎土には1mm強の砂粒を多量に含む。焼成は堅い。

103は、壺の底部で、球形をなす胴部をもつと考えられる底部は、突出した平底である。胴部下半外面の調整は、風化が激しく不明。底部付近は、ナデ調整、内面は細かなヨコ方向のハケ目調整。色調は外面が淡黄褐色、内面は淡褐色、胎土には1mm内外の砂粒を多量に含む。焼成は堅い。

104は、複合口縁壺の肩から口縁にかけての破片、復元口径13.5cm。頸部は、肩からすぐ 「く」の字に外反する。頸部は、肩端部上面から立ちあがっていて、その接点内面では、稜が形成されている。複合口縁部は、口縁端部上面から内湾気味に内傾してのびている。そして外面には、複合鋸歯文が施されている。器面調整は、風化のため判然としない。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、色調は淡赤褐色を呈している。焼成は甘い。

C-127号周溝出土土器（105・106）

105は、壺の肩部、丸く胴部に続くと思われ、球形化した壺になると思われる。口頸部の形状は不明。風化のため調整はよくわからない。胎土は、1mm大の砂粒を多く含む。色調は淡黄～淡赤褐色を呈し、焼成は甘い。

106は、大型高壺の脚柱部と壺部、脚裾部が残存している。脚柱はわずかに上すぼまりの円筒形で、外面の調整はタテヘラミガキ、内側は指頭によるタテ方向のナデ調整されている。壺部は脚柱部から斜め上方にのび、中央部は円盤充てんされる。内側面ともヘラミガキ調整である。脚裾部は、脚柱下端からするどく弧を描きながら外方へおれまがる。透しは、円形のものが確実には1穴あり、おそらく4方透しと思われる。外面はタテヘラミガキ、内面はていねいにナデ調整されている。

107は、やや不整形を呈した単口縁壺で、器高28.0cm。口径14.8cm。胴部最大径は22.7cmを計り、胴中位から若干上にある。肩のはらない球形をした胴部である。口頸口は肩からすぐ「く」の字に外反し、口縁部近くで、外傾がさらにつくなる。口唇部は丸く収まる。胴下半部は、部分的に急激にすぼまり、かろうじて平底を残す。底部へと続いている。肩と頸部の接合は、互いの木口部で接しているが「く」状をなす。器面は、口頸部内外面はナデ、肩上部内面は指押え、胴部内外面はナデ調整されるが内面においては、皮などを使ったのが細かなハケ目状を呈する部分もある。胎土は、砂粒を含むがそれほど多くない。色調は、淡褐色を呈し、焼成は堅い。口縁部は $\frac{3}{4}$ 遺存し、口縁部は部分的に欠損がみられる。

108は、若干長胴を呈する壺肩部以下。胴部最大径は、中位もしくは、若干下にあり、いくぶん下膨れを呈している。肩はなで肩と思われる。底部は突出した平底である。肩上部以上は、欠失しているが肩からすぐ「く」の字に外反する頸部をもつと思われる。器面調整は、風化が著しく、不明である。胴内面下部は、指押えナデである。胎土は1mm内外の砂粒を多く含み、色調は、淡赤褐色を呈する。焼成はいくぶん甘い。

C—15号周溝出土土器（109～115）

109は、ややなで肩の肩部をもち、長胴から球形化と変化する壺の頸部以下。頸部より底まで33.1cm。胴部最大径を中位より若干下にもち29.3cmを計る。底は、わずかに突出気味の平底で底径2.9cm。口縁部は、複合口縁と考えられ、頸部との接合は、肩部上端に直接接合し、やや開き気味に立ち上がるものと思われる。頸部内部に明瞭な稜をもつ。調整は、外面右下がりのハケ目仕上げが行われ、底部に平底形成時の指押えが残る。内面は、同様ハケ目。焼成は比較的堅いが、表面は風化している。胎土に1mm大の砂粒を含み、外面、赤褐色および橙色内面、明黄褐色を呈す。

110は、複合口縁壺の口縁部で、頸部付近を欠くが、外反しながら開き、口縁端部上面の内側にやや内傾気味に立ち上がる口縁（複合）をのせるため端部は外に拡張された形となる。複合口縁端部は、比較的薄く丸く收まる。全体的に風化摩耗しているが、内外面ともヨコ方向のハケ目がかすかに残り、複合口縁外面に、山の大きい櫛描波状文が重ねられている。胎土に0.5～1mm大の砂粒を多く含み、長石も含まれる。焼成は良、色調は内外とも淡黄橙色を呈す。

111は、前述の110にはほぼ同様の複合口縁壺の口縁で、複合口縁は前述の110よりやや長めの2cm、復元口径16.4cmを計る。櫛描波状文は波長の短いものが残る。胎土には0.5～2mmの砂粒を多く含み、長石・石英粒も含む。焼成は良好、色調は、橙色か淡い黄橙色を呈す。

112は、復元口径42.2cmの大型の高壺で、壺部と口縁部の接合部は、口縁が壺部にスライドした形で、内外とも明確な段を形成し、ここより緩やかに外反しながらのびる。端部は、斜めに平坦面を作る。調整は、口縁部外面はヨコ方向のハケ目が全面施され、その他の内外面は風化のため調整が明らかでないが、ヘラミガキの可能性強。胎土は均一のザラザラした感じで石英粒を多く含む。焼成は良好で色調は黄褐色を呈する。

113は、大型高壺で壺部は、いくぶん内湾しながら外方へのび、口縁部は大きく外反する。口縁部の半径は壺部の半径より大きい。口縁端部は丸く收まる。口縁と壺部の境は、内面において明瞭に段差をもつが、外面の稜はあまく、壺部から口縁部へと自然に移行する。わずかにエンタシス状になる円筒形の脚柱外側から壺部に接合され、中央部は円盤充てんされている。脚柱下端からは、脚柱とは明瞭な屈曲をもつ球の一部を切りとったような脚裾部のがのび、脚柱との接合部のわずかに下方に4穴の透しがある。脚裾と壺部の半径はほぼ等しい。脚柱および壺部、脚裾部の上半外面はタテヘラミガキ、脚裾部下半部はヨコ方向のヘラミガキが施こされている。口縁部の外面は浅いが、荒いヨコハケ目調整である。脚裾部内側は、

口縁部外面と同じ原体による左あがりハケ目、口縁部内面は、タテ方向のヘラミガキ、坏部内側はミガキである。脚柱部内側は、ハケ目原体状のものでヨコ方向に強くナデられる。

114は、高坏の口縁部で、坏部との接続部分までの出土。復元口径41.0cmを計り、口縁は大きく、外反し、開く。口唇は丸く作る。外面はヨコ方向のハケ目調整、内面は斜めのミガキが施される。胎土に1mm大の砂粒を含み、火山灰質粒子を多く含む。焼成は良く、赤橙色を呈す。

115は、裾部と考えられ、外面、タテ方向のミガキ、内面は、ナデが行われる。底部口径20.6cm、胎土には1mm大の砂粒を含み、焼成は良い。色調は、全体赤橙色を呈す。

その他の出土土器（116～138）

116は、小型丸底壺で口縁部と体部は直接接合しない。厚手でいくぶん不整形の壺である。体部は、上半部で内湾し、口縁部は大きく外へひらくが、粘土の接合のせいか器面が波うち、口唇部近くでやや立ちぎみになる。口唇部は丸く収まる。底部は丸底だが、わずかにとがりぎみである。口縁部は体部よりも径が大きく長い。体部外面はミガキ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデ調整される。

117は、復元口径38.7cm、復元底部16.8cm、器高22.15cmの高坏で、坏部屈曲部の内面に稜をもち、口縁部は外反しながら長くのびる。口縁端部は面取りされ、わずかに下がる。脚柱は、エンタシス状にふくらみ、脚裾部は、内反しながら端部を丸く作る。調整法は、坏部内面はタテ方向のヘラミガキ、口縁端部をヨコ方向のヘラミガキ、端部はヨコナデがなされている。外面は、屈曲部上位までヨコ方向のハケ目の上にタテ方向のヘラミガキがなされ暗文様の効果をもたらしている。坏部下部はミガキがあるが風化がはげしい。脚柱部外面はタテ方向にていねいなヘラミガキがされ、脚裾部はヨコ方向のヘラミガキ。脚裾部内面はていねいなヨコナデ、脚柱内面は粗いヨコナデ。坏部との接合部は、棒状工具による接合時の突き痕が残る。胎土は1～4mm大の砂粒を多く含み、長石を少量含む。色調は内外面とも浅黄色を呈し、坏部に黒変がある。焼成は良好。

118は、壺の底部で平底である。外面の器面調整は、皮か草状のものによるタテのナデあげである。内面はユビによるナデおよびオサエ調整される。胎土は、1mm大の砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色であるが、かなりの部分を黒斑が占めている。焼成は堅い。

119は、底から内湾気味に立ち上がる底部で、中型の壺。外面は風化のため、調整不明。内面はナデが施される。実測図より立ち上がりは緩い可能性あり。胎土に1～4mmと比較的大きな砂粒を含む。焼成は良く、外面橙色、内面は淡い黄橙色を呈す。

120は、鉢で復元口径27.8cmの胴部は内湾氣味に立ち上がるものと考えられ、やや立ち上がりを強くする部分の胴部上位約 $\frac{1}{6}$ の遺存で、口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部は細く丸く作る。胎土は1～2mm大の砂粒を含む。焼成は良好で色調は淡い黄橙色。

121は、壺の胴下半部で、胴部は扁球形をなし、底部は丸底氣味の平底である。器壁は胴部付近では比較的薄手であるが、底部にかけて厚くなる。器面調整は、外面は胴部下半まではていねいなナデあるいはヘラミガキ、底部はナデ調整。胴部内面はヨコナデ、底部内面は指押え、色調は内外面とも淡黄褐色、外面胴中位から底部にかけて黒斑あり。焼成は堅い。

122は、器高7.8cm、復元口径13.0cmを計る小型の深鉢。僅かに平底を持ち、内湾氣味に立ち上がり、口唇は丸く収める。全体的に風化が著しく、口唇外表にヨコナデが残るほかは不明。胎土に1～3mm大の白灰・黒色等の砂粒を含む。焼成は良。内外とも淡い赤褐色を呈す。尚この鉢は、C-9号周溝墓のほぼ南からの出土で上向きにおかれ、内部の土からベンガラが検出されている。

123は、鉢で口径部は、外あがりに短く外反し、端部は丸く収まる。底部の大部分は欠損しているが、若干突出ぎみである。調整は内外ともていねいなナデ調整と思われる。内面には、ベンガラが少量確認されている。本遺跡唯一の土壤墓供献である。

124は、小型鉢で口縁部は、短く直線的に「く」の字に外反し、端部は丸く収められる。胴部ややはり、口径と胴径がほぼ同一である。底部は尖底を呈す。器面調整は、内外面ともナデ調整、色調は淡黄褐色。胎土には砂粒は含まず緻密。焼成は良好。

125は、僅かに突出氣味に平底をもち、胴部は、やや長胴のタイプ。調整法は風化のため不明。

126は、整美な台付小型丸底壺。いくぶん外反しながら斜め上方にのびる口縁部と口縁部近くに最大径をもち、あまりはらない胴部が特徴で、口縁部と胴部の高さはほぼ等しい。幅広い口縁部外面には、全面浅い波状文が施されている。また、口縁部と胴部の境には、一条のキザミ目突帯がめぐっている。胴部との明瞭な屈曲点をもち、「く」の字に大きく外反する脚部に胴部は差し込まれている。脚端部には、2条の状線がめぐり、その外方端部にはキザミ目が施されている。また、脚端部は平坦面を呈し、そこに一条の沈線がめぐっている。脚部および胴部外面は、タテ方向にヘラミガキ調整され、口縁部内面はヨコナデ、胴部内面は指ナデ、脚内面はヨコハケ目のあと軽くナデられている。胎土は、精選されたもので砂粒を含まない。色調は明褐色を呈し、焼成は堅緻である。

127は、台付小型鉢の脚部、鉢底部は、脚へさしこまれていて、脚と鉢の変換点は明瞭で

ある。短い脚柱部から脚裾部が大きく広がっている。脚裾端部は平坦面をなす。脚裾部には5つの円形透し穴が認められるが、上下2段にあけられた3対と、その間に配置された上下透しの中間位置にあけられた3つの透し計9穴が推定される。器表の調整は、タテ方向のヘラみがき、内面はていねいにナデられている。胎土は砂粒含まず、色調は淡赤褐色を呈する。焼成は堅い。

128は、壺口縁部の破片で肩部からほぼ、まっすぐに外反し、比較的広口の長頸壺になると思われる。外面には口縁上部から肩部ギリギリまで細かな波状文がうめつくされている。口縁内面はヨコハケ目ののちヨコナデされている。胎土は、砂粒を含まない比較的精選されたもので、色調は淡褐色を呈し、焼成は堅い。

129は、前述の胴部と思われ、調整は、内面にヨコナデがみられるほか、風化のため、判然としない。胎土、焼成はほぼ同じ、外面の色調は褐灰色。

130と131は同一個体と思われ、131は頸部に格子状にキザミを入れた貼り付け突帯を巡らす複合口縁壺の頸部。130は口縁端部と複合口縁との接続部と考える。胎土に1~2mm大の白っぽい砂粒を含み、焼成は良好で、全体、黄橙色を呈す。

132は、復元底径2.6cmと僅かに平底を残し、底からの立ち上がりは、ややすぼまった感じで、底近くの内外両面の指押えナデのほか、風化のため調整法不明。器壁はやや薄め。0.5~1mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好で、全体淡い橙色および、にぶい橙色を呈す。

133は、僅かに平底を残す壺の底部。内面ハケ目、外面はナデを施される。胎土に1~2mm大の砂粒を含み、焼成は良好である。淡い黄橙色を呈す。

134は、復元底径2.9cmと僅かに平底を残すが、底から大きく開いて立ち上がる胴部は球形をなすものと考えられる。風化のため調整法不明。胎土に0.5~2mm大の砂粒を多く含む。焼成は良く、色調はほぼ黄橙色。

135は、高壺の脚柱で、脚裾部との屈曲部分に透しをもつ。裾部はラッパ状のものが考えられる。壺部との接続は、軸部差し込みのあと、円盤充てんされたものと考えられる。器壁は厚く、安定した感がある。外面はタテに細かくヘラミガキが行われ、内面は裾部近くをていねいなナデ。中位はタテ方向のナデ、上位は、ヘラ工具でヨコナデ。焼成は堅く締まり、色調は、内外ともにぶい橙色を呈す。

136は、大型の高壺の壺部で、復元口径46.3cm。壺部は内湾氣味に立ち上がり、口縁部との接合部付近からわずかに立ち上がりを強くし、外反しながら口縁端に至り端部は丸く作る。内面においては、接続部分に明確な段をもつ。調整法は、風化のため判然とし得ないが、内

面にミガキの痕跡が認められ、坏部外面はナデ、口縁外面はミガキがわずかに認められる。胎土に1~2mmの砂粒を含み、透明・黒・褐色の粒子も混じる。焼成は比較的良好で、内外面とも黄橙色およびぶい橙色を帯び一部褐灰色を呈す。口縁部は約 $\frac{1}{6}$ 、全体約 $\frac{2}{3}$ の残存である。

137は、前述の脚部と考えられ、復元底径22.2cm、胎土、色調、焼成はほぼ同じ。

138は、大型高坏で、復元口径45cm。同一溝より脚部等にあたるものは出土していない。坏部は内湾しながら立ち上がり、口縁部との接合部分より外反しながら開き、端部はさらに外反し、上面はわずかに平坦部を作る。内面においては、接合部に明確な段をもつ。調整法は、口縁外面に下から上へのヘラ削りが行われ、そのあと口縁端部にはヨコナデが行われている。また、この上に三角紋状に凹線が施されており、その他内外面のていねいなナデと対象的に装飾性を高めている。胎土は、細砂粒の均一なもので、石英粒および光沢のある微粒子も含む。焼成は堅く、色は淡い黄橙色を呈す。なお残存率は口縁部約 $\frac{1}{8}$ 、坏部 $\frac{1}{5}$ である。

B-168号出土土器（139）

139は、長胴の壺で、B-168周溝墓墳丘より出土。胴部最大径は中位にある。頸部、肩部は木口で接合され、接合面外側は一条のキザミ目突帯がめぐっている。口縁部はやや外傾し長くのびる。口縁端部は平坦面を呈す。頸部内面には明瞭な稜はもたない。胴部は長胴を呈し、底部は平底。器面調整は、口縁端部がヨコナデ、口縁部が左上りのハケ目、頸部から胴部下半までタテハケ目、肩部から胴部下半にかけてタテハケ目のあとヘラミガキが施される。頸部突帯はハケ目調整の後、貼り付けられている。底部はナデ調整。内面は全体に磨耗がはげしいが、口縁部内面は左上りのハケ目調整、胴部上半はヨコナデ、胴部下半は左上りのハケ目。底部はナデ調整、色調は内外面とも淡黄褐色。底部と胴部下半に黒斑あり、胎土には1mm弱の砂粒を含む。焼成は堅い。

鉄 器

鉄器類は、合計91点出土しており〔第64～72図、(1)～(91)〕、その種類は、鉄鎌、剣、刀子、鉈、鉄斧などの武器および工具類である。以下、順を追ってそれらを簡単に説明する。なお、カッコ内の番号は、図中の番号と対応しており、また、長さ、幅、厚さなどの数値の単位はすべてcmである。各遺物の出土遺構については、土壌観察表に注記しているので参照されたい。

1. 鉄 鎌

鉄鎌は、完形、残欠合計72点〔(19)～(91)〕出土している。その形態は、定形化する以前のものだけに多様であり、明確に分類し難いものも少くないが、ここではI～IVの四つのタイプに大別し、さらにそれらをいくつかに細分して分類を試みた。

I 無茎三角形鎌

出土鉄鎌のうち、無茎鎌は次の2点のみで、他はすべて有茎鎌である。

Ia 無茎凹基式

(19) 全長5.3の長三角形。基部推定幅3.8、身の厚さ0.25、透かし孔4。植物質付着。

Ib 無茎腸抉式

(20) 現存長4.2、現存最大身幅3.6、身の厚さ0.2、小孔4。

II 木の葉鎌

出土鉄鎌の大半がこのタイプで、弥生的な形態である。鎌身最大幅が身の中位～基部より4分の3あたりにあり、側線は平行に立ち上がる部分がほとんどなく木の葉形をしているので、便宜上この名称を用いることにした。平面形や関の有無などからa～dの四つに細分できるようである。

IIa 関がなく、基部と鎌身の境界が明瞭でないものが多い。外形線は、茎部から外彎した後、そのまま内彎する。〔IIaの(39)～(55)は、所謂、椿葉式にあたり、(68)～(82)は、柳葉式の範疇に入るものと思われる。〕

(39) 現存長11.95、最大身幅3.7、身の厚さ0.35。植物質付着。

(40) 現存長10.7、鎌身長7.9、最大身幅3.15、身の厚さ0.25。

(43) 現存長5.15、最大身幅2.3、身の厚さ0.15。

- (49) 現存長 7.3、身長 4.5、最大身幅 2.45、身の厚さ 0.2。
- (50) 現存長 4.4、身長 4.4、最大身幅 1.97、身の厚さ 0.23。
- (51) 現存長 7.4、推定身長 6.0、最大身幅 3.8、身の厚さ 0.3。
- (52) 現存長 6.1、推定身長 4.75、推定最大身幅 2.35、身の厚さ 0.25、関のある可能性もあるが、銹化のため明らかにし得ない。木質残存。
- (54) 現存長 (=身長か) 6.35、最大身幅 0.25、身の厚さ 0.25。
- (55) 現存長 5.4、身長 5.0、最大身幅 2.2、身の厚さ 0.2。
- (68) 現存長 4.6、最大身幅 1.75、身の厚さ 0.23。
- (70) 全長 6.6、身長 3.8、最大身幅 1.7、身の厚さ 0.2、樹皮痕あり。
- (71) 全長 7.7、身長 3.8、最大身幅 1.5、身の厚さ 1.5。
- (72) 全長 7.45、身長 4.45、最大身幅 1.65、身の厚さ 0.2。
- (73) 現存長 4.3、現存最大身幅 1.2、身の厚さ 0.2 内外（銹のため不明）、布及び木質付着。
- (82) 現存長 4.05、推定最大身幅 2.3、身の厚さ 0.25、植物質付着。
- IIb 関をつくらず、基部からゆるやかに外彎したのち、両側線が曲線的ながら、ほぼ平行に伸びた後、ゆるやかに内彎する形。 IIa と III の柳葉式の中間的な形態ととらえられる。これに属する資料はいずれも基部や鎌身の下半部を欠損しているが、残部の形態により推定した。
- (45) 現存長 3.5、推定最大身幅 1.6、身の厚さ 0.2、纖維質付着。
- (47) 鎌身が木質と小礫にはさまれた状態にある。鎌身 現存長 5.6、推定身幅 1.6、身の厚さ 0.2。
- (56) 現存長 (=身長か) 6.2、身幅 1.8、身の厚さ 0.2、布銹着。
- (57) 現存長 6.5、身幅 2.15、身の厚さ 0.27。
- (80) 現存長 3.7、身幅 2.05、身の厚さ 0.23、鎌身下半部が不明だが、もし関があるとしたら、 IIIc に属するかもしれない。植物質付着
- (81) 現存長 4.1、身幅 0.95、身の厚さ 0.15
- IIc IIa、 IIb と同じく関はないが、基部からの鎌身の広がりや内彎はやや直線に近い。また、内彎する変換点が明らかに認められる。これは、後述する IIId や IV の圭頭式に連なるものではないかと思われる。
- (21) 現存長 6.35、最大身幅 3.15、身の厚さ 0.4、有茎鎌の中では珍らしく双孔を持つ。

布銹着。

- (28) 全長 19.4、身長 14.4、最大身幅 3.3、身の厚さ 0.2、布銹着、木質残存。
- (29) 茎部の一部欠損。現存長は 2 片合計 12.0、身長 8.3、最大身幅 3.0、身の厚さ 0.25（推定）。
- (30) 全長 10.3、身幅 2.2、身の厚さ 0.2、布銹着、柳葉形にも近い。
- (33) 現存長 5.45、身長 4.4、最大身幅 2.0、身の厚さ 0.2。
- (85) 現存長 7.1、身長 5.2、最大身幅 2.2、身の厚さ 0.25。

IId IIc に閑をもうけた形で、概して IIc より外形が直線的になっている。鎌身頭部の形は、IV の圭頭式にさらに近い。

- (32) 全長 8.1、推定身長（関部～先端）5.7、最大身幅 2.8、身の厚さ 0.15、木質残存。
- (33) 現存長 9.5、推定身長 7.8、身の厚さ 0.25、小礫および布、植物質が鎌身に銹着。
- (34) 現存長 11.0、身長 8.7、最大身幅 2.95、身の厚さ 0.3、布銹着、木質残存。
- (35) 現存長 12.3、身長 7.4、最大身幅 3.0、身の厚さ 0.3、木質残存、IV の圭頭式に非常に近い形。
- (36) 現存長 16.7、身長 8.85、最大身幅 3.15、身の厚さ 0.2、木質残存。柳葉的。
- (59) 現存長 4.9、最大身幅 3.35、身の厚さ 0.35、茎の一部も残存。布、植物質銹着。

閑の有無が不明だが、頭部が (35) に類似のためここに配した。

III 柳葉鎌

このタイプは、基本的には、茎部より外反して閑をつくり、両側線が直線的にほぼ平行に伸びたのち、急に内彎する形態のものである。これを、a～c の三つに細分した。

IIIa 柳葉銅鎌式

- (65) 鎬をもつ銅鎌的な柳葉式鉄鎌である。現存長 6.8、身長 6.45、身幅 2.0、身の厚さ（鎬部分）0.4、植物質付着、双孔をもつ。

IIIb 柳葉腸抉式

- (22) 有茎鎌では唯一腸抉（逆刺）をもつものである。全長 8.5、身長 5.05、身幅 2.0、身の厚さ 0.3。布銹着、木質残存。

IIIc これらは、古墳時代を通して定形化した後の柳葉式よりも、全体的に曲線的で、ややいびつである。

- (31) 茎の一部欠損、残欠 2 点の合計現存長 16.5、身長 7.2、身幅 2.0、身の厚さ 0.25、

木質部残存。

- (38) 全長 17.1、身長 10.85、身幅 2.05、身の厚さ 0.3。
- (41) 現存長 8.05、身長 5.6、身幅 1.8 内外（推定）、身の厚さ 0.2、布銹着、木質残存。
- (53) 全長 8.1、身長 4.4、身幅 2.0、身の厚さ 0.2、木質残存。
- (63) 茎の一部欠損。残欠 2 片合計、現存長 14.9、推定鎌全長 13.9、身長 6.9、身幅 1.95、身の厚さ 0.15。木質全体に付着、残存。
- (64) 鎌身、茎、それぞれ一部欠損。残欠 3 片の現存長は頭部より 5.6、2.5、8.35、身幅 2.2、身の厚さ 0.2、布銹着、木質残存。
- (78) 茎の一部欠損、二つに分かれる。合計現存長は 16.25、身長 4.45、身幅 1.9、身の厚さ 0.23。鎌身はやや丸味をもち、IIb と近似するが、関があるのでここに配した。木質よく残存。
- (79) 現存長 5.15、身長 4.2、身幅 2.0、身の厚さ 0.15。
- (89) 全長 7.9、身長 5.3、身幅 1.9、布銹着、木質残存。

IV 圭頭鎌

このタイプは、鎌身の側線が茎部からほぼ直線的に逆八の字を開いた後、急に内側に折れるもので、頭部ははっきりした三角形を呈する。鎌身長は一定せず、短いものは菱形に近く、長いものは圭頭鑿頭式とも呼べる。ここでは、関の有無により a・b の二つに分類した。

IVa 上に説明したもののうち、関のないもの。

- (44) 現存長 3.55、最大身幅 2.5、身の厚さ 0.2、纖維質付着。下半部を欠くので断定できないが、おそらく (91) と同類と思われる。
- (48) 全長 9.0、最大身幅 3.65、身の厚さ 0.3。礫が銹着。
- (84) 現存長 5.4、身長 4.5、最大身幅 2.8、身の厚さ 0.25、外形線はやや曲線的。
- (86) 茎一部欠損。鎌身現存長 3.1、最大身幅 2.15、身の厚さ 0.15、茎部残欠は現存長 2.65、木質残存。
- (87) 現存長 4.9、身長 4.05、最大身幅 2.5、身の厚さ 0.3。
- (91) 全長 10.0、身長 5.9、最大身幅 2.1、身の厚さ 0.27。

IVb IVa に対し、関のあるもの。

- (37) 現存長 8.3、現存最大身幅 2.3、身の厚さ 0.18。木質残存。
- (90) 全長 9.45、身長 7.4、現存最大身幅 3.2、身の厚さ 0.25。植物質付着。

以上のように、出土鉄鎌を分類したが、次の13点の残欠は、鎌身の平面形を復元できなかつたので分類を避けた。

- (46) 現存長 4.9、現存最大身幅 1.0、身の厚さ 0.2。
- (58) 現存長 5.7、身幅 2.5、身の厚さ 0.15、布銹着。
- (60) 現存長 3.3、現存最大身幅 2.3、身の厚さ 0.2。
- (61) 現存長 4.45、現存最大身幅 2.8。
- (62) 現存長 3.4、現存最大身幅 3.2。
- (66) 現存長 4.85、現存最大身幅 1.5、身の厚さ 0.23、木質残存。関をもつ。
- (67) 現存長 3.4、現存最大身幅 1.8、身の厚さ 0.3。
- (69) 現存長 2.9、現存最大身幅 1.75、身の厚さ 0.15。
- (74) 現存長 5.0、現存最大身幅 1.7、身の厚さ 0.2、木質残存。
- (75) 現存長 5.7、現存最大身幅 1.5、身の厚さ 0.3、木質不着。
- (76) 茎部残欠。現存長 5.1。茎部幅 0.9、茎部の厚さ 0.5。
- (77) 茎部残欠。現存長 3.7。茎部幅 0.6、茎部の厚さ 0.3。
- (88) 現存長 6.5。現存最大身幅 1.3、身の厚さ 0.2。

2. 剣

剣は、次の5点 [(2)、(3)、(6)～(8)] が出土した。

- (2) 六つに折れる。全長 27.7、身長 24.2、身幅 2.9、身の厚さ 0.4、鎬は不明瞭。目釘孔は関部・茎部に 3ヶ所。鉢部に竹の繊維らしきもの付着。蛇行しているか否かについては断言し難い。
- (3) 鉢部・茎の一部欠損。現存長 21.8、身幅 3.3、身の厚さ 0.65。鎬あり。剣身各所に布銹着。茎部は内側から鉄身、木質、木皮、布の順に包まれる。剣身に小礫銹着。
- (6) 茎の下部欠損。現存長 15.7、推定関部～剣先の長さ 11.4、身幅 2.2、身の厚さ 0.5。鎬は不明瞭、茎部に目釘孔 1、鉢部に木質付着。茎部を包む木質残存、コブ銹には布銹着。

(7) 現存長 17.65、身幅 2.5、身の厚さは推定 0.45。鎬はわずかに認められる。木質残存。茎部に双孔。槍先の可能性あり。

(8) 四つに折れる。全長 17.4、身幅 2.45、身の厚さ 0.3、鎬なし。槍先の可能性あり。

3. 刀子

刀子は次の 7 点 [(5)、(9)～(14)] が出土したが、刀子と断言しにくいものも含まれる。

(5) 素環頭の刀子。全長 19.9、刀身長 11.7、身幅 1.5、刀背の厚さ 0.3。各所に布銹着。

(9) 全長 19.0、刀身長 13.6、身幅 1.2、刀背の厚さ 0.2。茎部の厚さ 0.37、布銹着。

(10) 全長 13.2、身幅 1.05、刀背の厚さ 0.2、茎部の厚さ 0.25。輪状のものは止金具か。布銹着。

(11) 茎部先端欠損。現存長 10.05、刀身長 8.4、身幅 1.35、刀背の厚さ 0.2、茎部の厚さ 0.25。

(12) 残欠。復元不可能。現存長 3.3、身幅 0.8、厚さ 0.2、茎の一部か。

(13) 下部欠損。現存長 12.35、身幅 1.45、身の厚さ 0.35、槍先の可能性あり。

(14) 銹化のため先端部の形状は不明。身幅 1.65、身の厚さ 0.2、関部付近に木質残存。槍先か。

4. 鍔

鍔は 5 点 [(15)～(18)、(42)] 出土した。

(15) 刀部・身の下部欠損。現存長 1.95、身幅 0.9、身の厚さ 0.25。

(16) 刀部先端欠損。現存長 10.4、身幅 0.95、身の厚さ 0.2。

(17) 刀部先端、身の下部欠損。現存長 5.8、身幅 1.0、身の厚さ 0.15。身の各所に植物質付着。

(18) 銹化のため原形は不明。現存長 8.0、身幅 0.9、身の厚さ 0.2。

(42) 下半部欠損、現存長 4.4、刃部幅 1.8、刃部の厚さ 0.17、布銹着。

5. 鉄斧

鉄斧は 5 点 [(23)～(27)] 出土しているが、いずれも袋状鉄斧である。

- (23) くびれがある。現存長 7.55、刃部幅 3.35、厚さ 0.3 内外。各所に布銹着。
- (24) ややくびれる。現存長 7.85、刃部幅 4.4、厚さ 0.35 内外。
- (25) 銹化著しく原形復元困難。現存長 5.1、刃部幅推定 3.0、厚さ 0.4 内外、表裏各所に木質または纖維質付着。
- (26) 片刃とみられる。現存長 6.1、刃部幅 3.0、袋部での厚さ 0.3、銹化のため下部での厚さは不明。
- (27) 全長 6.1、刃部幅推定 2.6、袋部での厚さ 0.25 内外、中心部での厚さ 0.4。

付篇 新富町川床遺跡出土赤色顔料の分析結果について

戸 高 真知子*

川床遺跡では、合計10基の土壙墓および周溝墓より赤色顔料が検出されている。それらのうち、比較的残存量の多いものについて下記の分析を行なったので、その結果を報告する。

1. 分析の目的と方法

当時の赤色顔料として考えられるのは、水銀朱（硫化水銀：HgS）またはベンガラ（酸化第二鉄： Fe_2O_3 主成分）である。これらは入手経路を異にしていると考えられ、出土した顔料が何であるかを知ることは、被葬者の性格や赤色顔料の意味を考える上で不可欠である。今回の分析は、「顔料の同定」を第一の目的とし、蛍光X線分析法と光学顕微鏡による観察を行なった。

2. 蛍光X線分析

試料は、B区とC区から出土した赤色顔料で、合計8点である。いずれも採取時に土砂等が混入しているので、それらを極力取り除き、分析に供した。

分析は、東京芸術大学保存科学研究室において、理学電機社製波長分散型蛍光X線分析装置SG-7を用いて行なった。測定条件を次に示す。

X線管球の電圧・電流：30KV—16mA、分光結晶：フッ化リチウム、検出器：シンチレーション・カウンター、時定数：1、フルスケールは適宜設定

分析試料および分析結果の詳細については、表1にまとめた。

顔料を同定する際に問題となるのが、HgとともにFeを検出した試料についてである。Feの由来については、試料中の不純物を完全に除去することが不可能であり、分析した顔料の量を一定にすることができなかったため、不純物の土砂中の鉄分が検出されたのか、本来水銀朱にベンガラが混入（意図的に、あるいは偶然に）していたのか否かは明らかにし得ない。しかし、試料のFeの反応ピークと試料中の土砂の量、その土砂と同質（同じ土層）の土のFe反応ピークを比較した結果と、後述する顕微鏡観察の結果から、若干の疑問は残るもの、現段階ではFeは不純物に由来するものと理解して、HgとFeを検出した試料については水銀朱であるとした。

* 東京芸術大学大学院

表1 川床遺跡出土赤色顔料の蛍光X線分析用試料と分析結果

試料No	出土地点		検出元素	顔料の種類
	遺構および遺物No	備考		
1	B-49	円形周溝墓 被葬者の頭部より出土	Hg, Fe	水銀朱
2	B-71	土壤内出土 周溝のある可能性が大	Hg, Fe	水銀朱
3	B-137	土壤内出土 周溝のある可能性が大	Hg, Fe	水銀朱
4	B-161	方形周溝墓, 主体部内出土	Hg, Fe	水銀朱
5	B-168	円形周溝墓, 主体部内出土	Hg, Fe	水銀朱
6	B-167	方形周溝墓, 主体部内出土	Hg, Fe	水銀朱
7	C-18A	供献土器, C-18号土壤墓 主体部西側に供献されていた 内部の土に赤色顔料混在	Fe	ベンガラ
8	C-No 42	C-11号円形周溝墓の周溝 部分より出土の土器 内部の土に赤色顔料混在	Fe	ベンガラ

3. 顕微鏡による観察

水銀朱とベンガラとを判別しようとする場合、顕微鏡による顔料粒子の観察が、ある程度の成果を与えてくれる。今回の観察は、反射光および透過光を用い、20倍から200倍までの倍率で行なった。この際、観察する顔料が当初の材質をとどめていなければ無意味な作業に終わる恐れがあるので、試料中のケシ粒程度の顔料塊を観察用試料とした。

水銀朱は、当時、主として天然の硫化水銀鉱物である「辰砂」を粉碎・精製したものであったが、製造水銀朱の存在も否めない。現在のところ、両者を明確に区別する方法はないが、天然水銀朱、つまり辰砂の純度や加工水準についての情報は、顕微鏡観察により導き出すことができる。辰砂は、石灰岩やチャートに貫入した状態で産出することが多く、加工してもそれらの粒子が不純物として残存するので、顕微鏡下では、赤いガラスを粉碎したような辰砂の粒子と白色あるいは透明な粒子が観察される。

図版3は、一部の試料の顕微鏡写真で、参考試料は、現在「辰砂」として市販されている製造水銀朱と、川床遺跡とほぼ同時期あるいは後出する川南町東平下円形周溝墓出土の水銀朱（辰砂）である。観察の結果、川床遺跡出土の水銀朱はいずれも辰砂と思われるが、試料No.1はかなり純度の高い辰砂を原料として精製したものらしく、製造水銀朱のような感もある。試料No.2、No.5も、不純物はみられるが粒子が細かく均一で、精製度の高い水銀朱である。

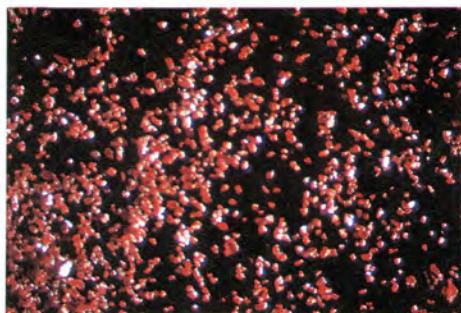
図版3一試料No.8はベンガラの顕微鏡写真で、水銀朱とは全く違った状態に観察される。当時のベンガラの製造方法については判然としないが、一般に微粒子で凝集しやすく、顔料粒子個々を観察することは困難である。

4. ま と め

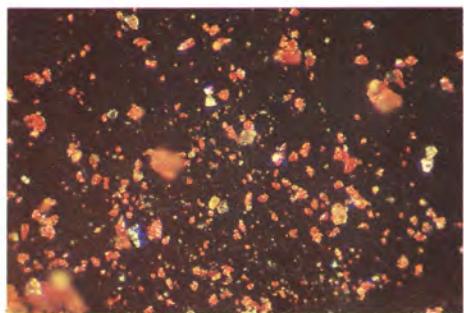
以上のように、川床遺跡出土の赤色顔料には水銀朱とベンガラが確認されたが、顔料の種類と出土状況の間には、注目すべき点がいくつある。

まず、B区から出土した試料はすべて水銀朱であったのに対し、C区からの試料はベンガラであった。これは、墓域による差、時期差とも理解できるが、同時に、埋葬主体部（遺骸）に用いる場合と土器に入れる場合との使い分けであるとも理解できる。また、水銀朱出土の遺構は周溝墓がほとんどで、周溝のない土壙墓との差異として考えられる。さらに、未分析の試料もB区に集中している。

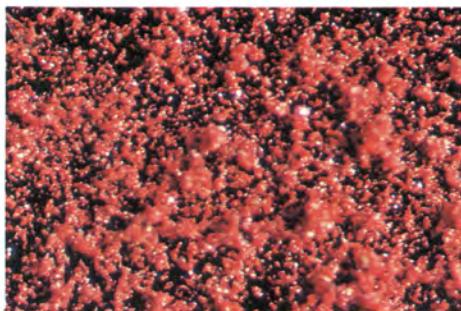
これらの点は、弥生時代から古墳時代への移行期にあると考えられる川床遺跡の意義を考える上で、十分検討に値する問題であろう。加えて、水銀朱の精製度の高さは、かなりの労力を動員した産物であることを示しており、その入手経路についての問題は、被葬者の性格を明らかにするために重要なポイントとなるだろう。こうした問題は、今後の課題として研究を重ねたい。



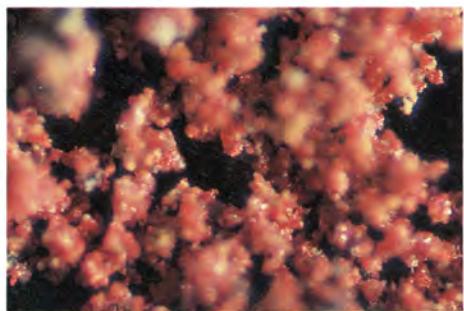
参考試料 現在市販されている
日本画顔料「辰砂No. 7」
×20



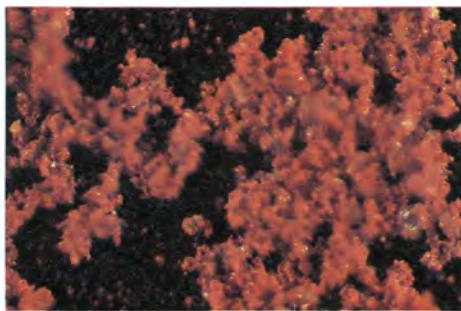
参考試料 川南町東平下円形周溝墓出土
水銀朱
×100



試料No. 1 B-49 (水銀朱)
×40



試料No. 2 B-71 (水銀朱)
×100

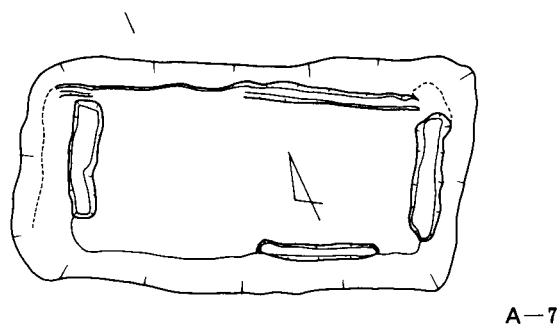
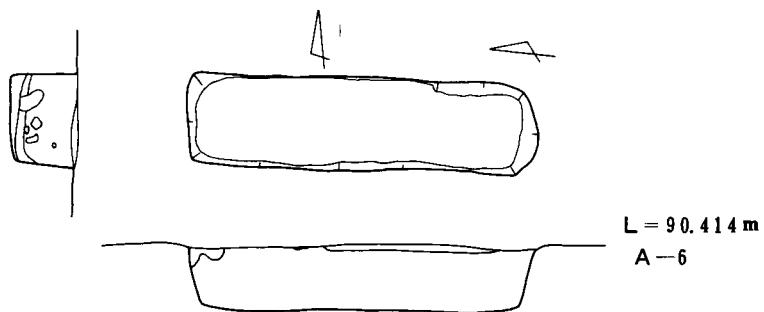
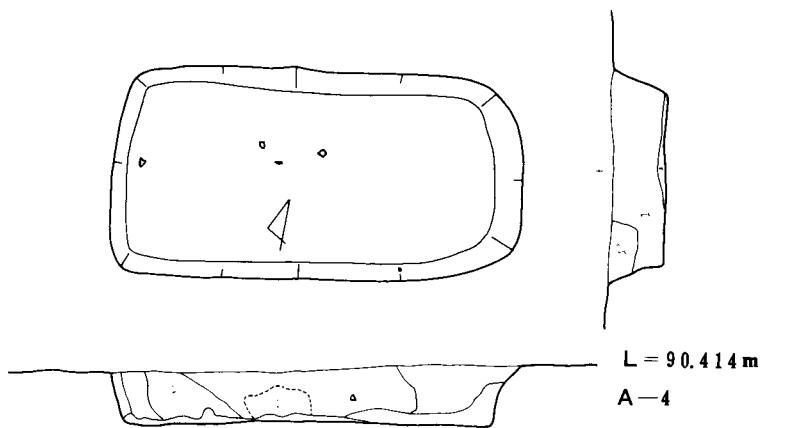


試料No. 5 B-168 (水銀朱)
×100

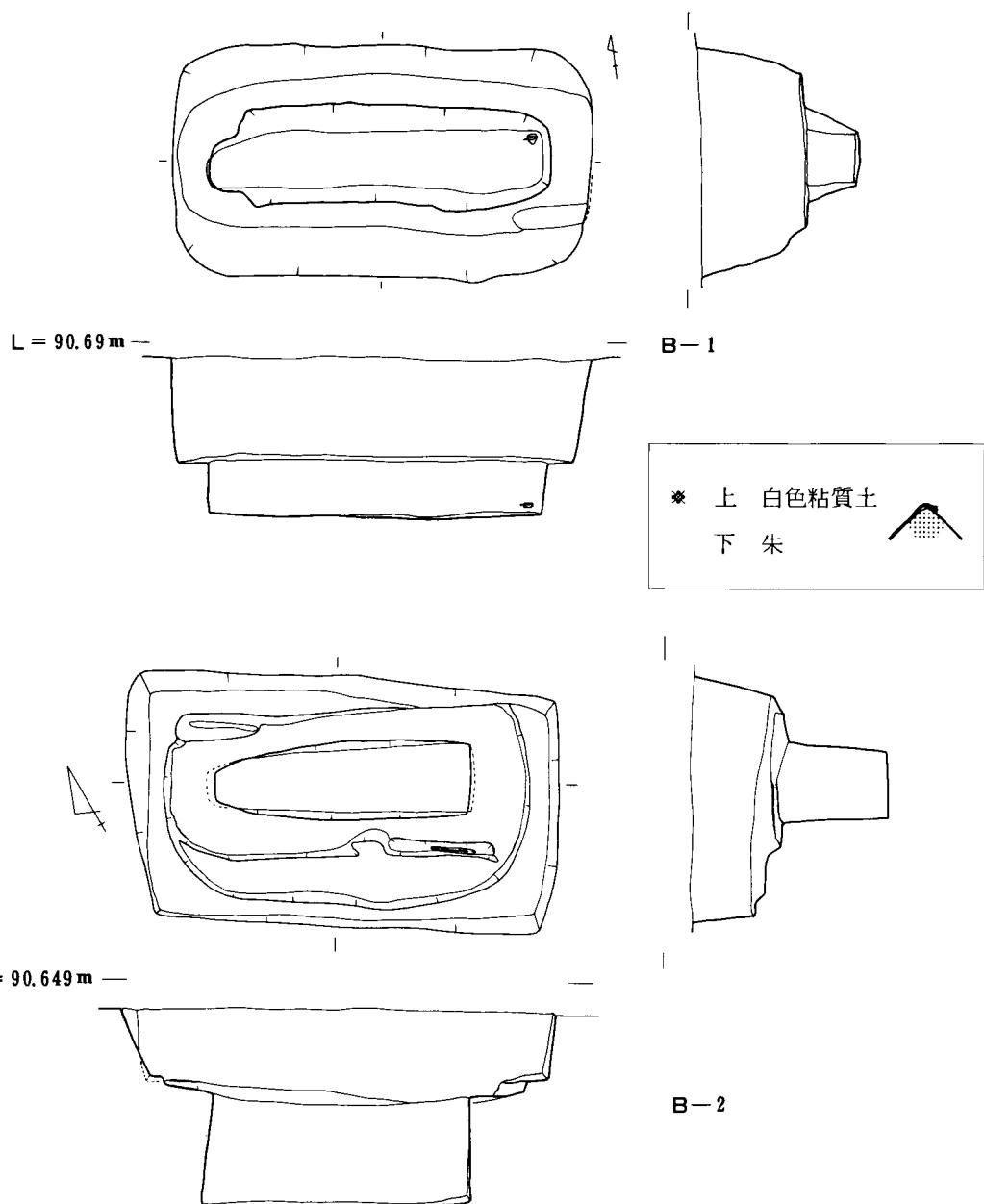


試料No. 8 C-No.42
(土器内のベンガラ)
×40

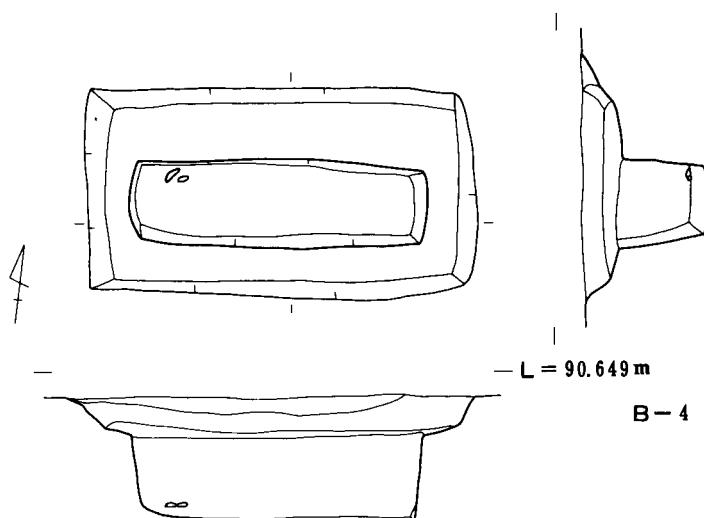
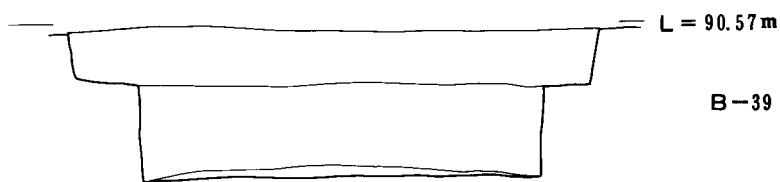
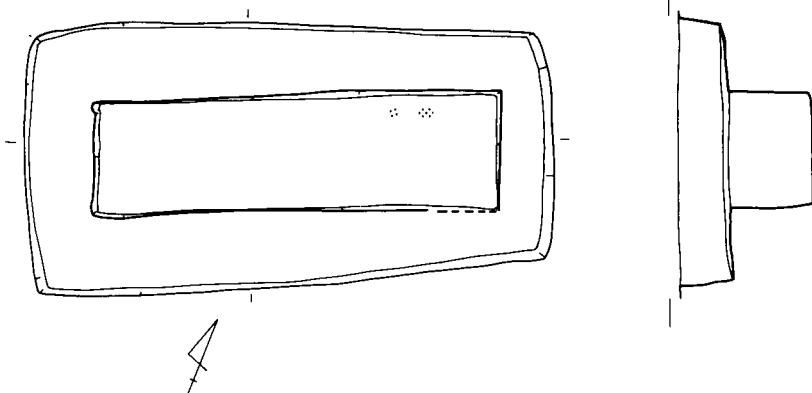
図版3 川床遺跡出土赤色顔料の顕微鏡写真



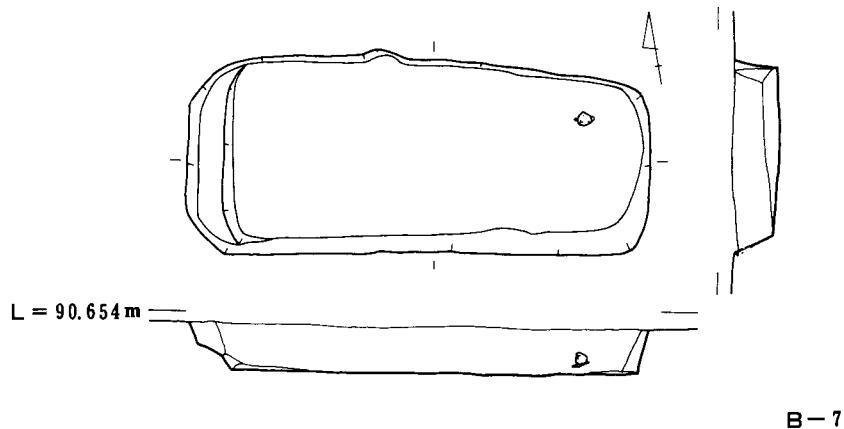
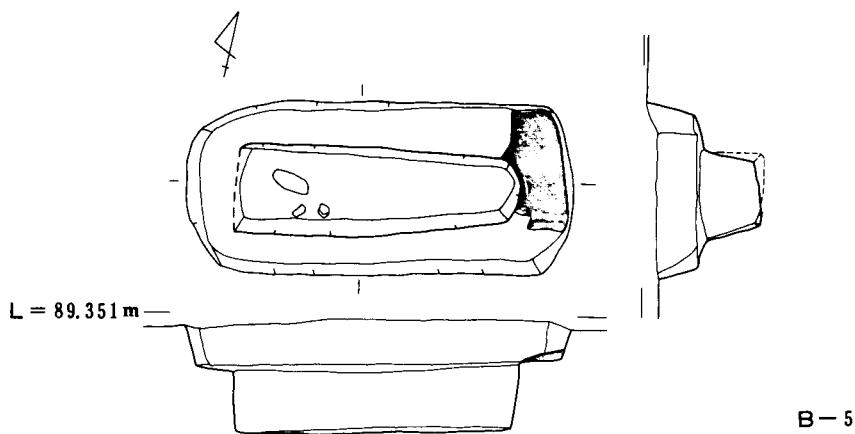
第3図 A-4, A-6, A-7 土壙墓実測図



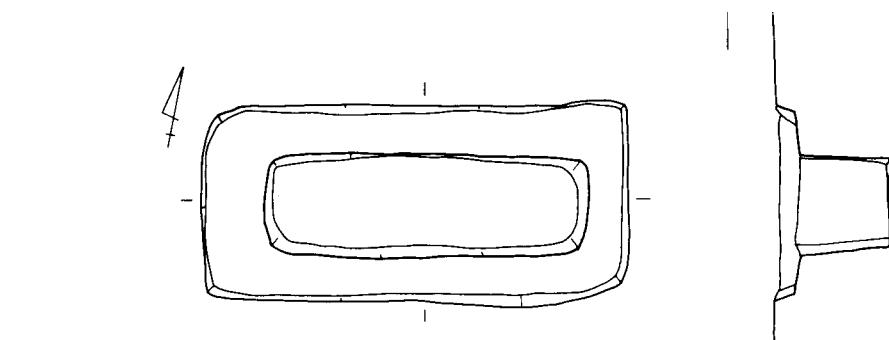
第4図 B-1, B-2 土壙墓実測図



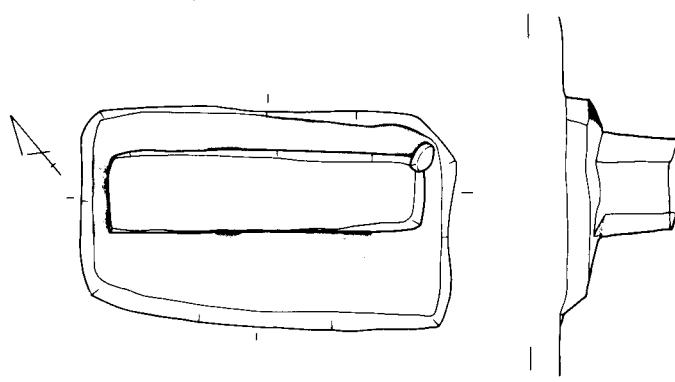
第5図 B-39, B-4 土壌実測図



第6図 B-5, B-7 土壌実測図

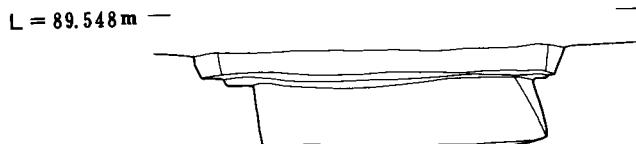
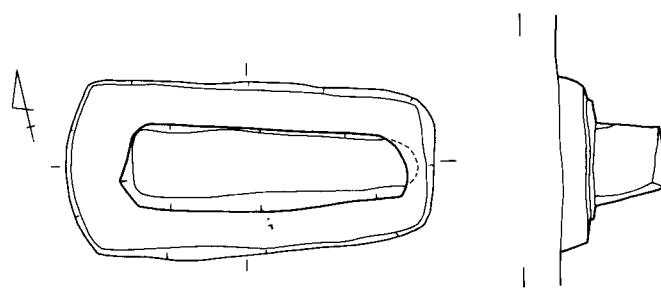
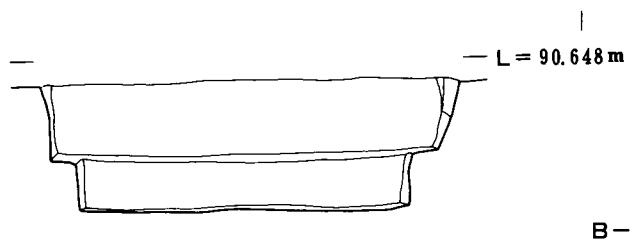
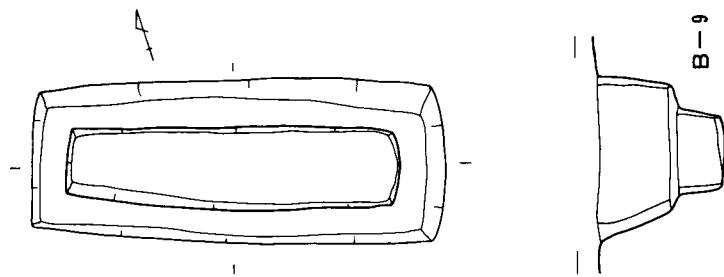


B - 6



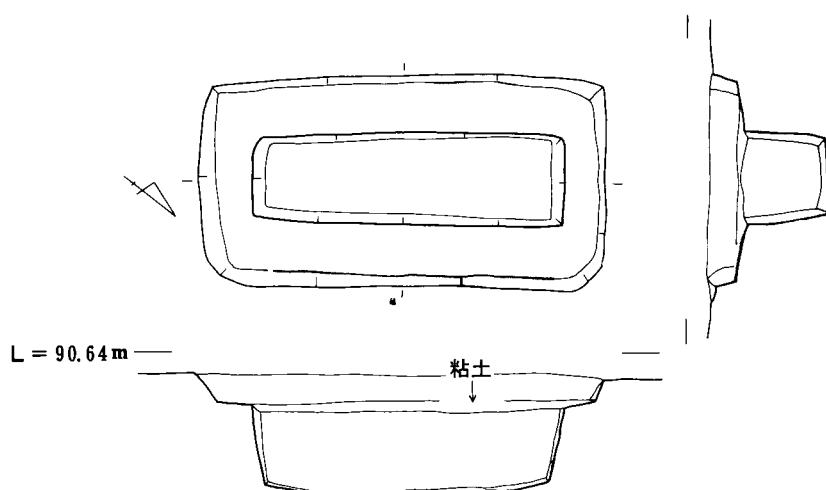
B - 8

第7図 B-6, B-8 土壌実測図

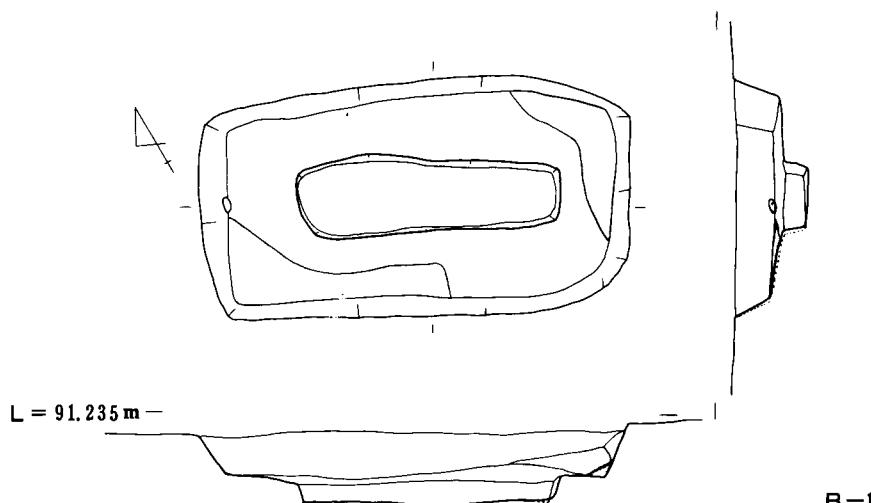


B-10

第8図 B-9, B-10 土壌実測図

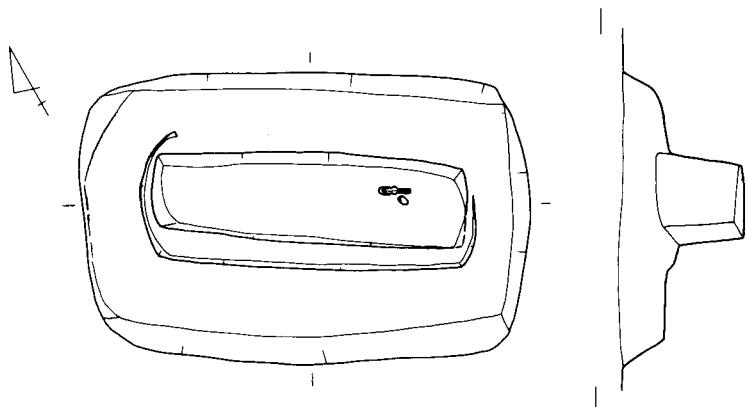


B-11

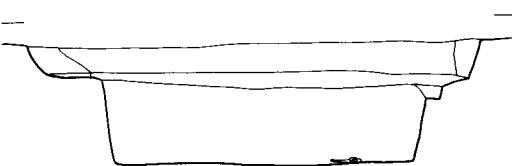


B-12

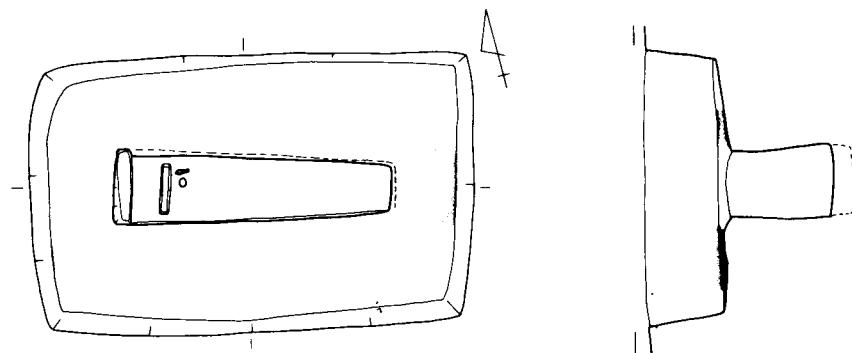
第9図 B-11, B-12 土壌実測図



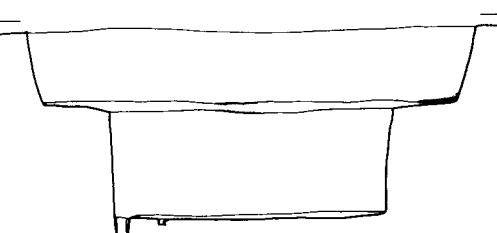
L = 90.648m



B-13

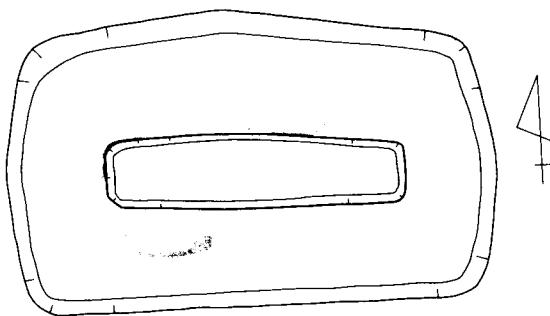


L = 90.68m

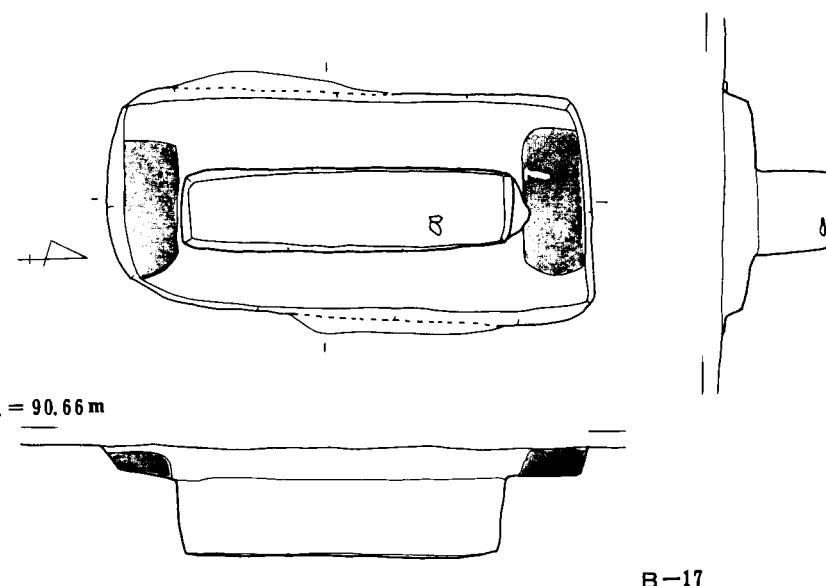


B-14

第10図 B-13, B-14 土壌実測図

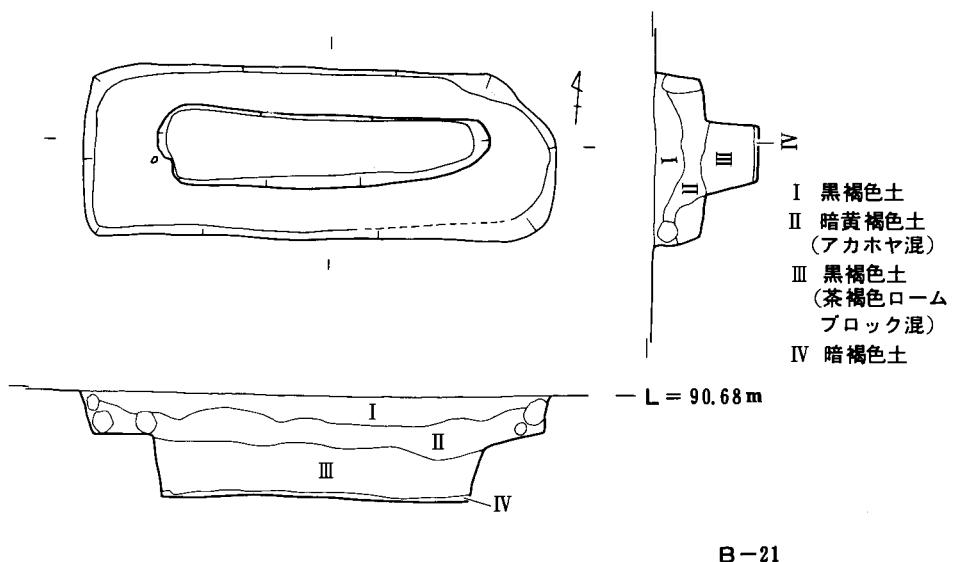


B-16

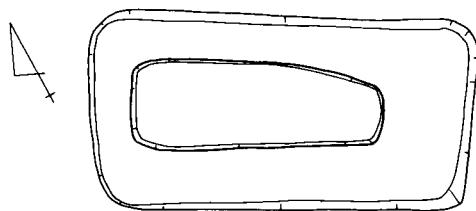


B-17

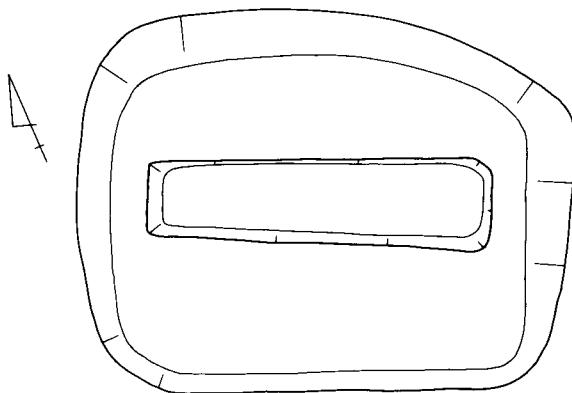
第11図 B-16, B-17 土壌実測図



B-21

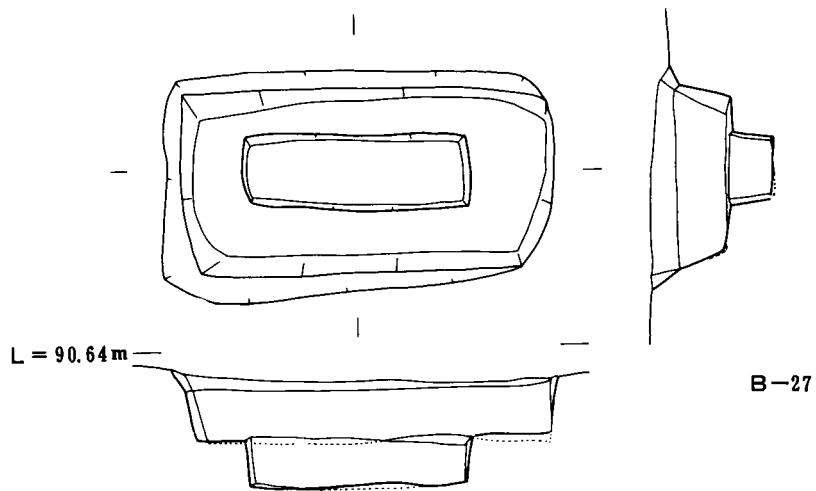
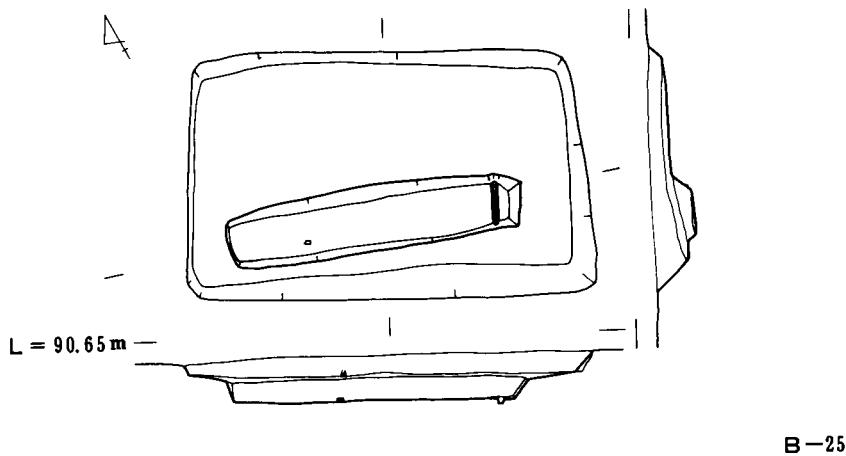


B-22

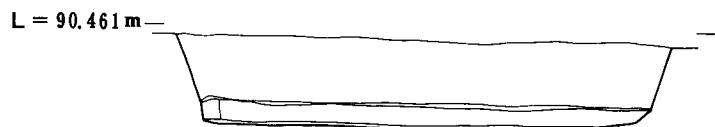
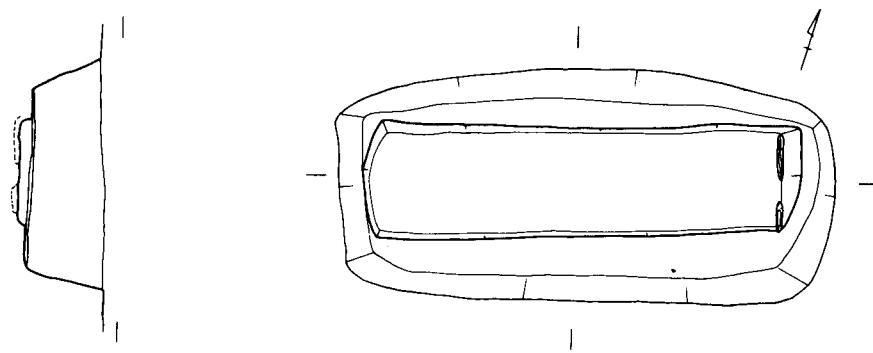
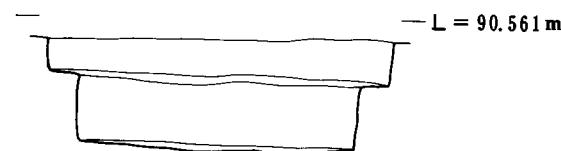
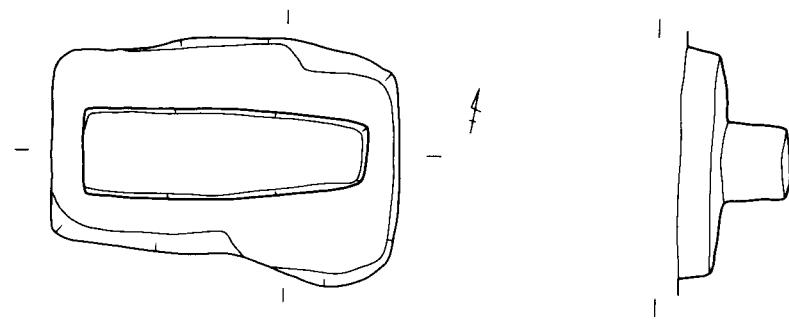


B-24

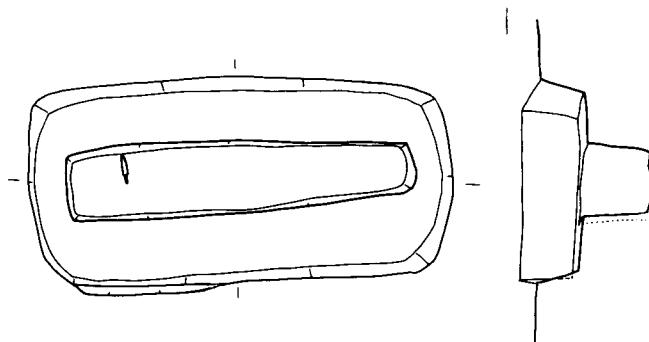
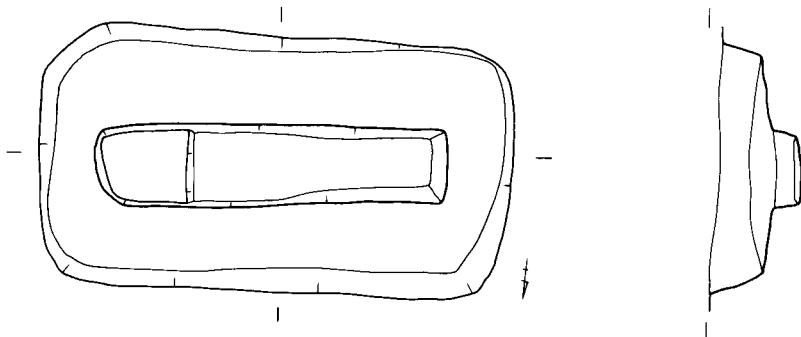
第12図 B-21, B-22, B-24 土壌墓実測図



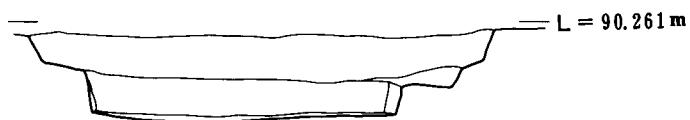
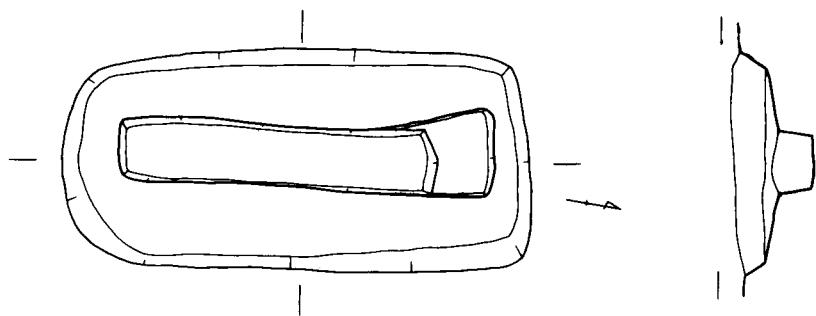
第13図 B-25, B-27 土壌実測図



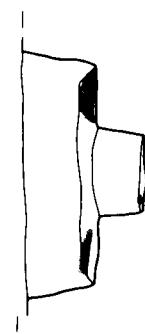
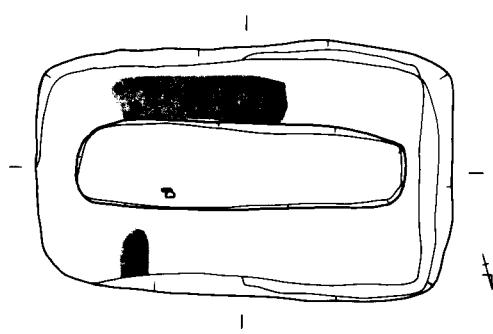
第14図 B-28, B-29 土壌実測図



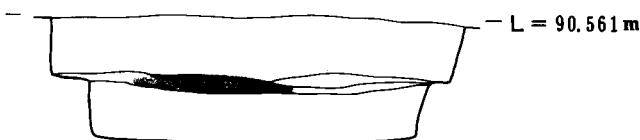
第15図 B-30, B-32 土壌実測図



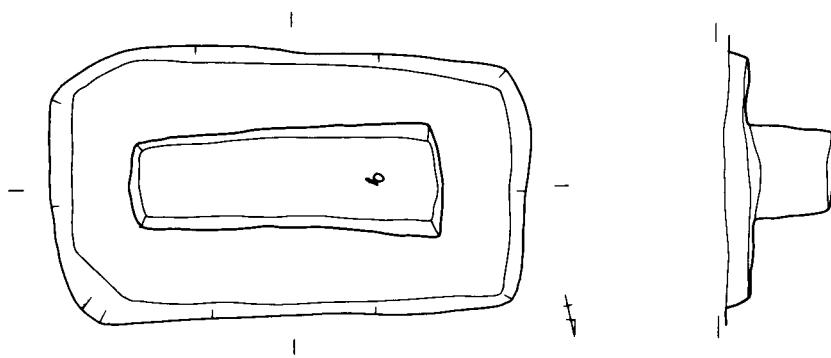
B-33



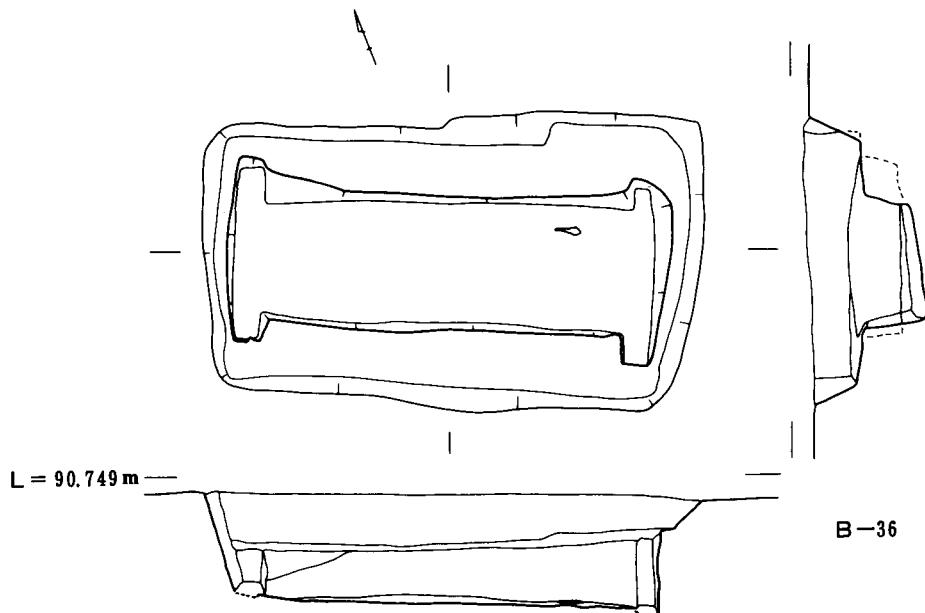
B-34



第16図 B-33, B-34 土壌実測図

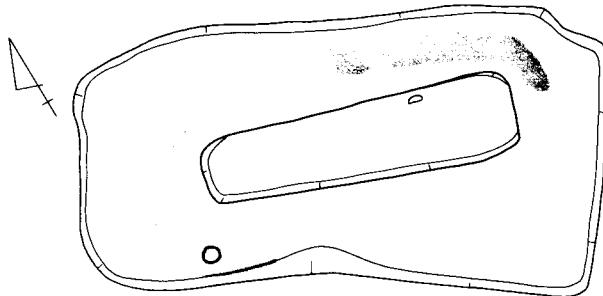


B-35

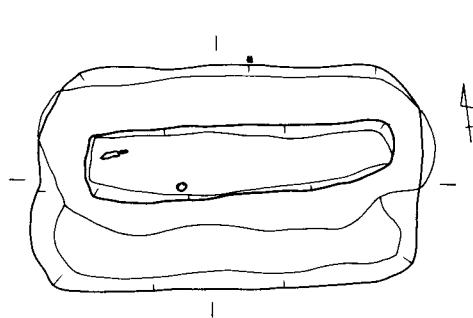


B-36

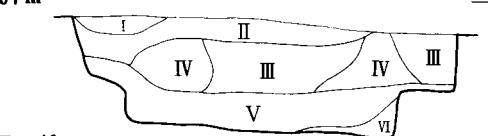
第17図 B-35, B-36 土壌実測図



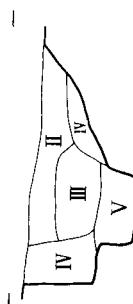
B-37



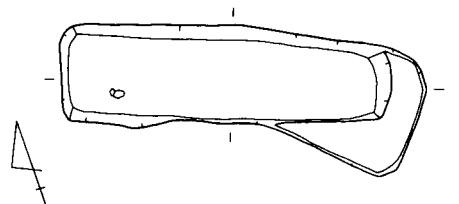
$L = 90.857\text{m}$



B-40



- I 黒褐色土（やや硬）
- II 茶褐色土（アカホヤ混）
- III 暗茶褐色土（アカホヤ混、やや軟）
- IV 黒色土（やや硬）
- V 暗灰黑色土（軟）
- VI 暗灰褐色土（粘質）

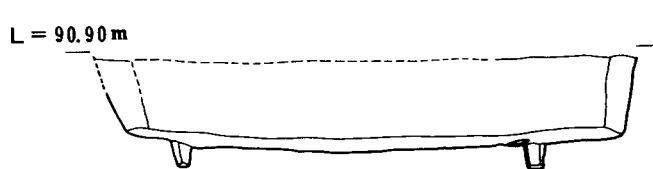
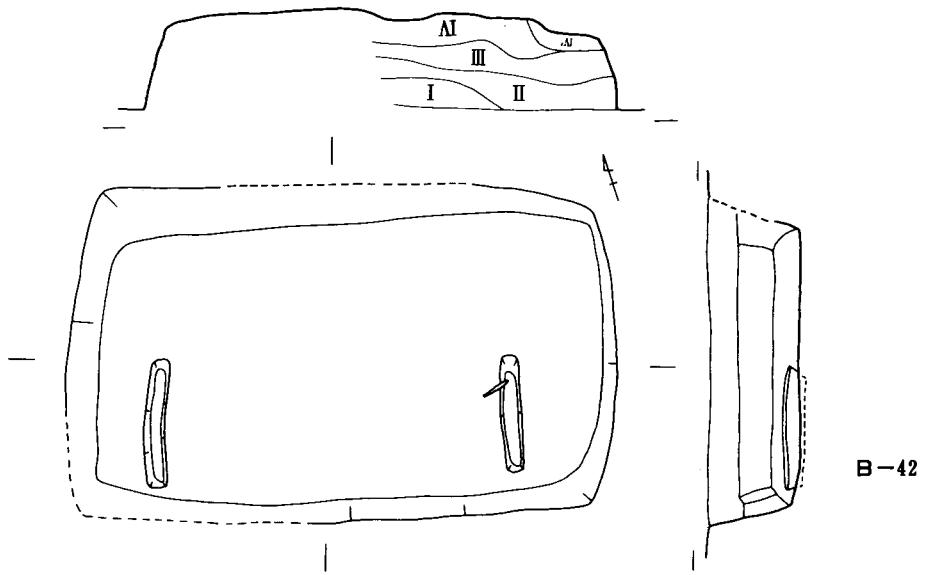


$-L = 90.385\text{m}$

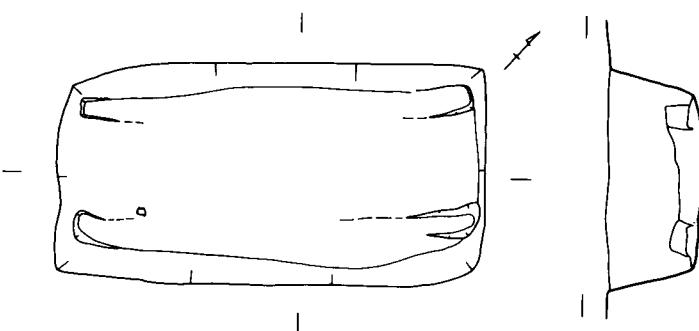


B-41

第18図 B-37, B-40, B-41 土壌実測図

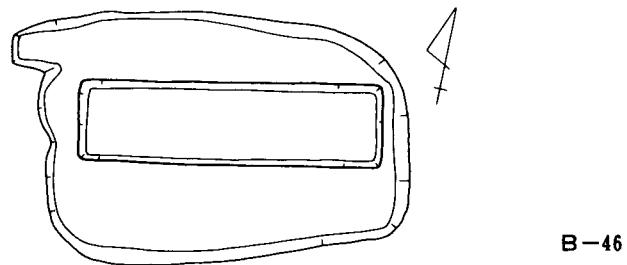
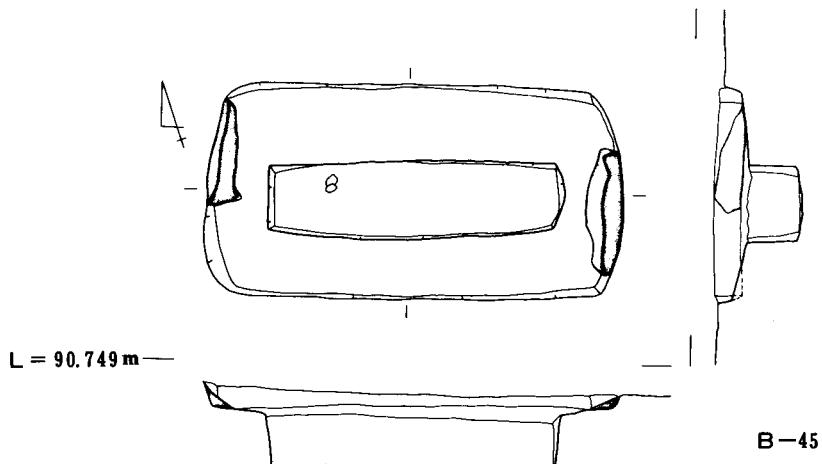


I 棕色土（アカホヤ混，硬）
 II 暗褐色土（アカホヤ全体
 に混，軟，やや粘質）
 III 黒色土（やや粘質）
 IV II とほぼ同質，やや軟
 IV' III と同質

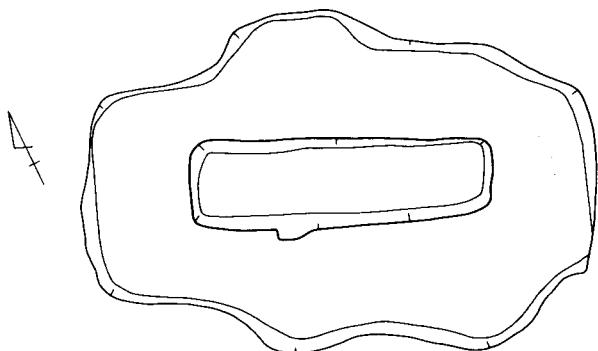


B-43

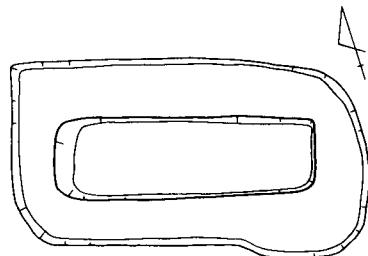
第19図 B-42, B-43 土壌実測図



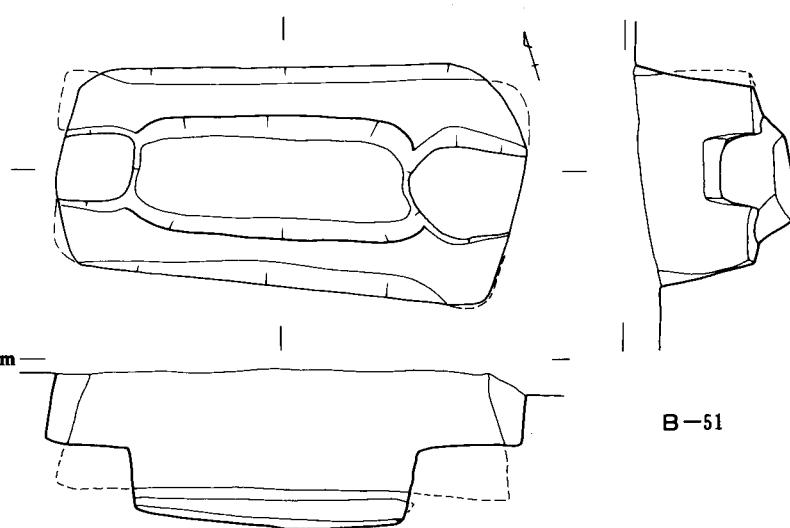
第20図 B-45, B-46 土壌実測図



B-48



B-50

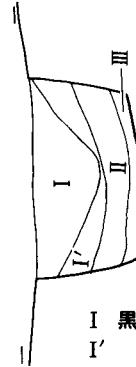
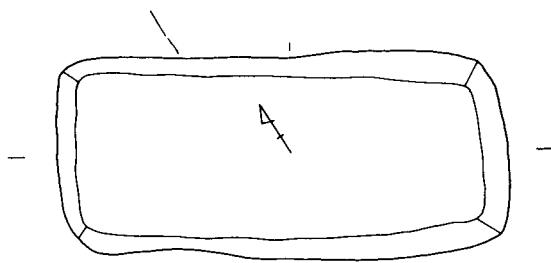
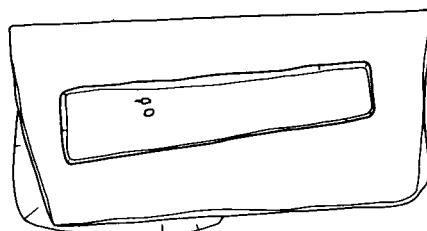
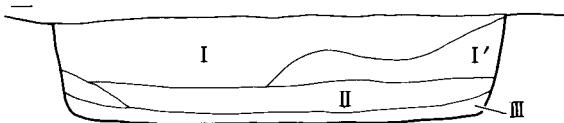


B-51

第21図 B-48, B-50, B-51 土壌実測図

4

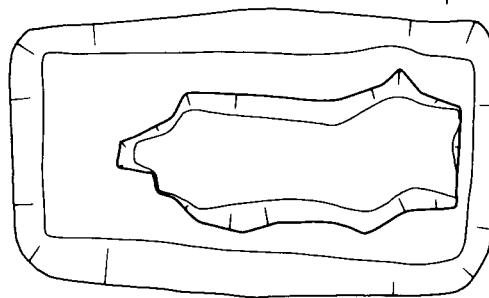
B-52

 $L = 92.226\text{m}$ 

B-53

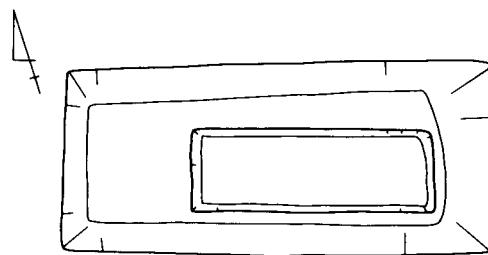
- I 黒褐色土（アカホヤ混，硬）
 I' " (アカホヤブロック混，硬)
 II " (アカホヤブロック多
 く含む，軟)
 III 茶褐色土（硬）

4

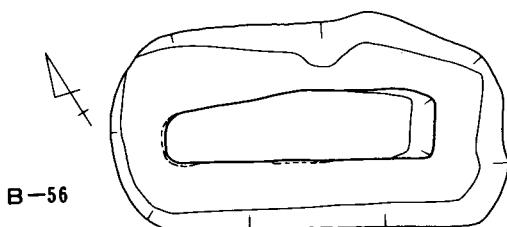


B-54

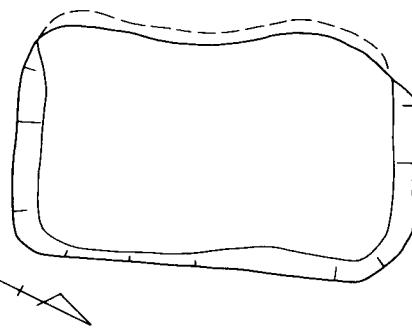
第22図 B-52, B-53, B-54 土壌実測図



B-55

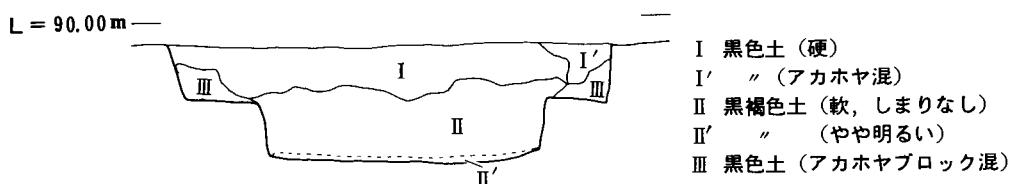
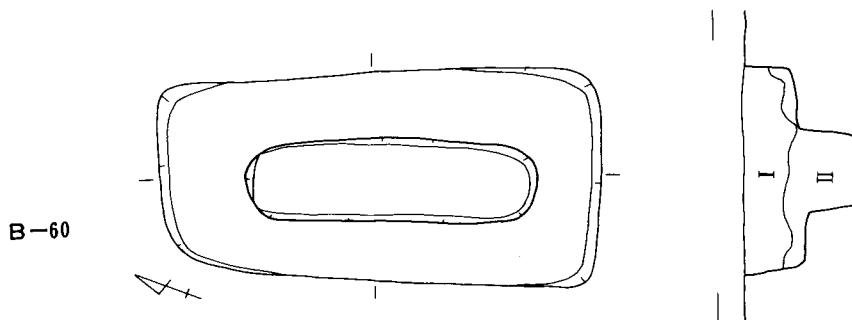
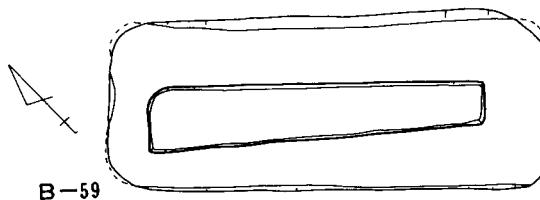
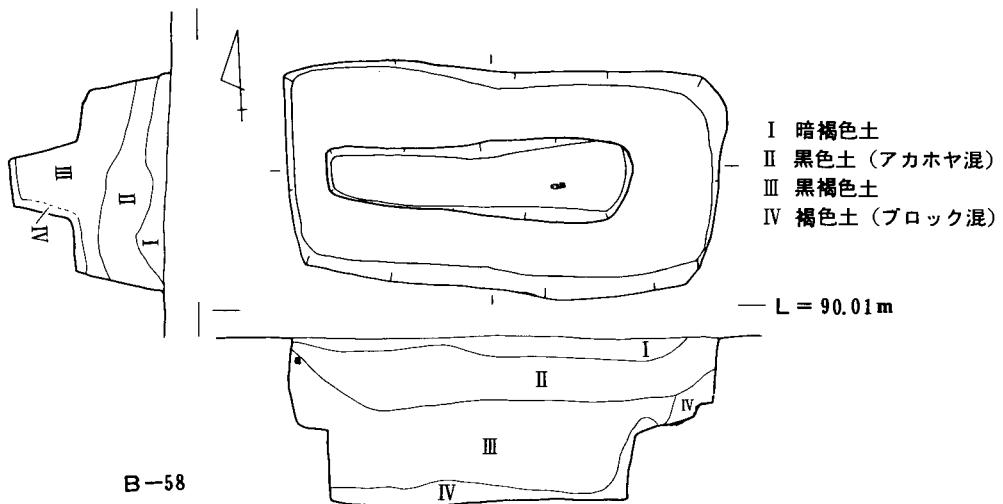


B-56

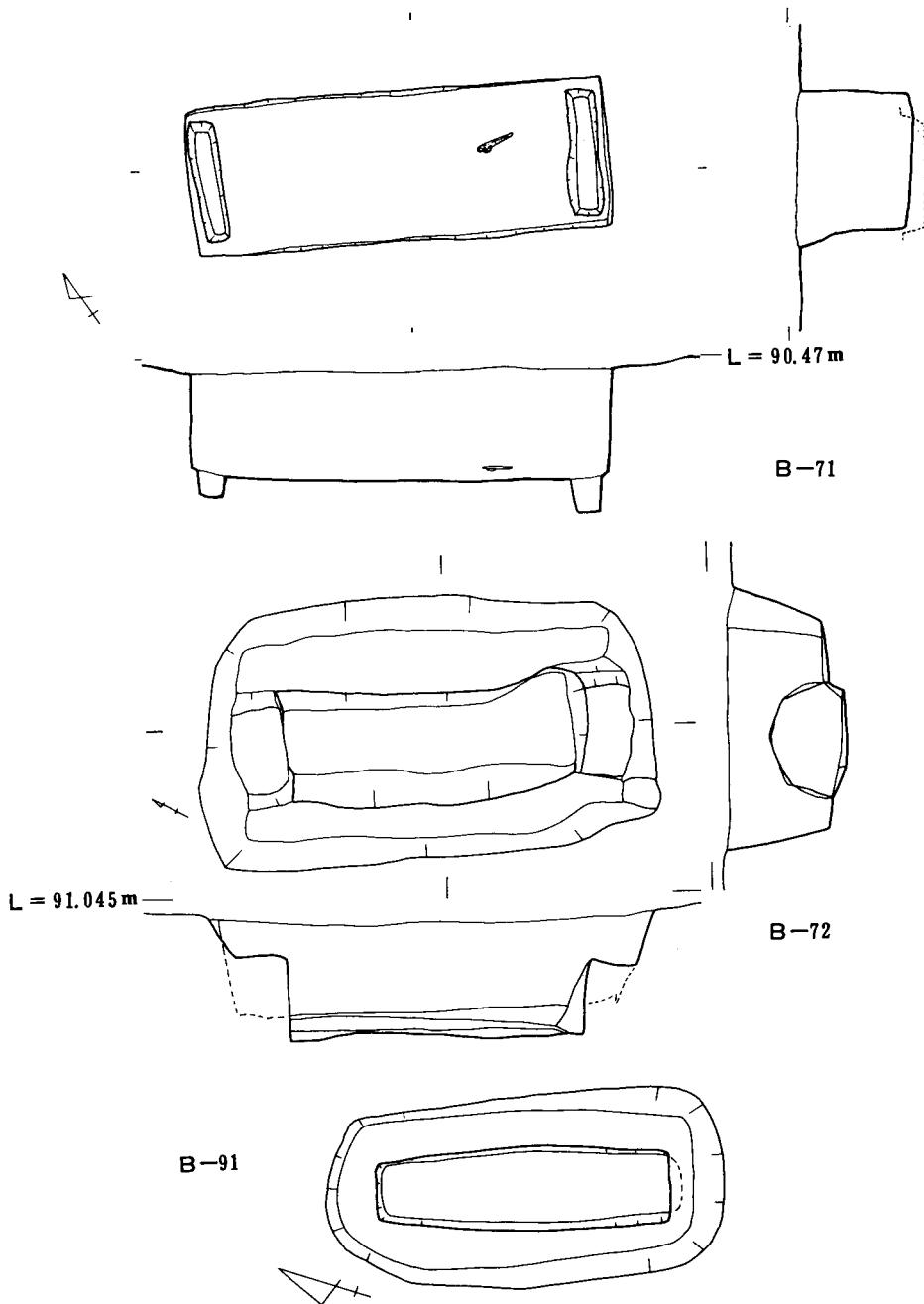


B-57

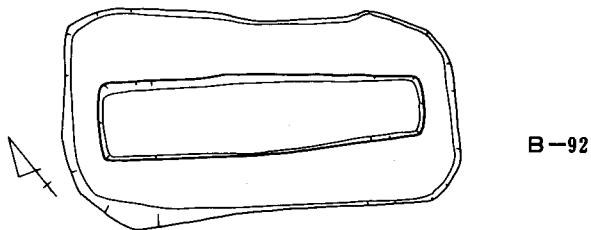
第23図 B-55, B-56, B-57 土壌実測図



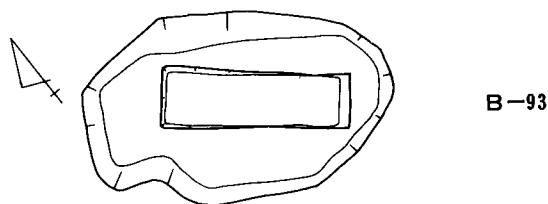
第24図 B-58, B-59, B-60 土壌実測図



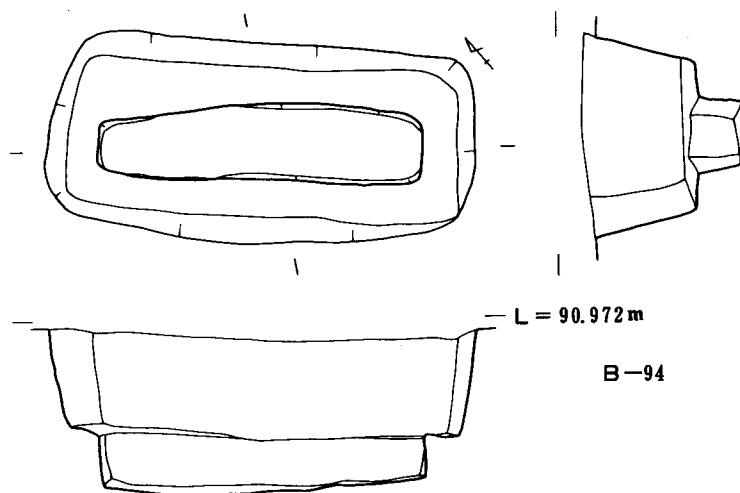
第25図 B-71, B-72, B-91 土壌実測図



B-92



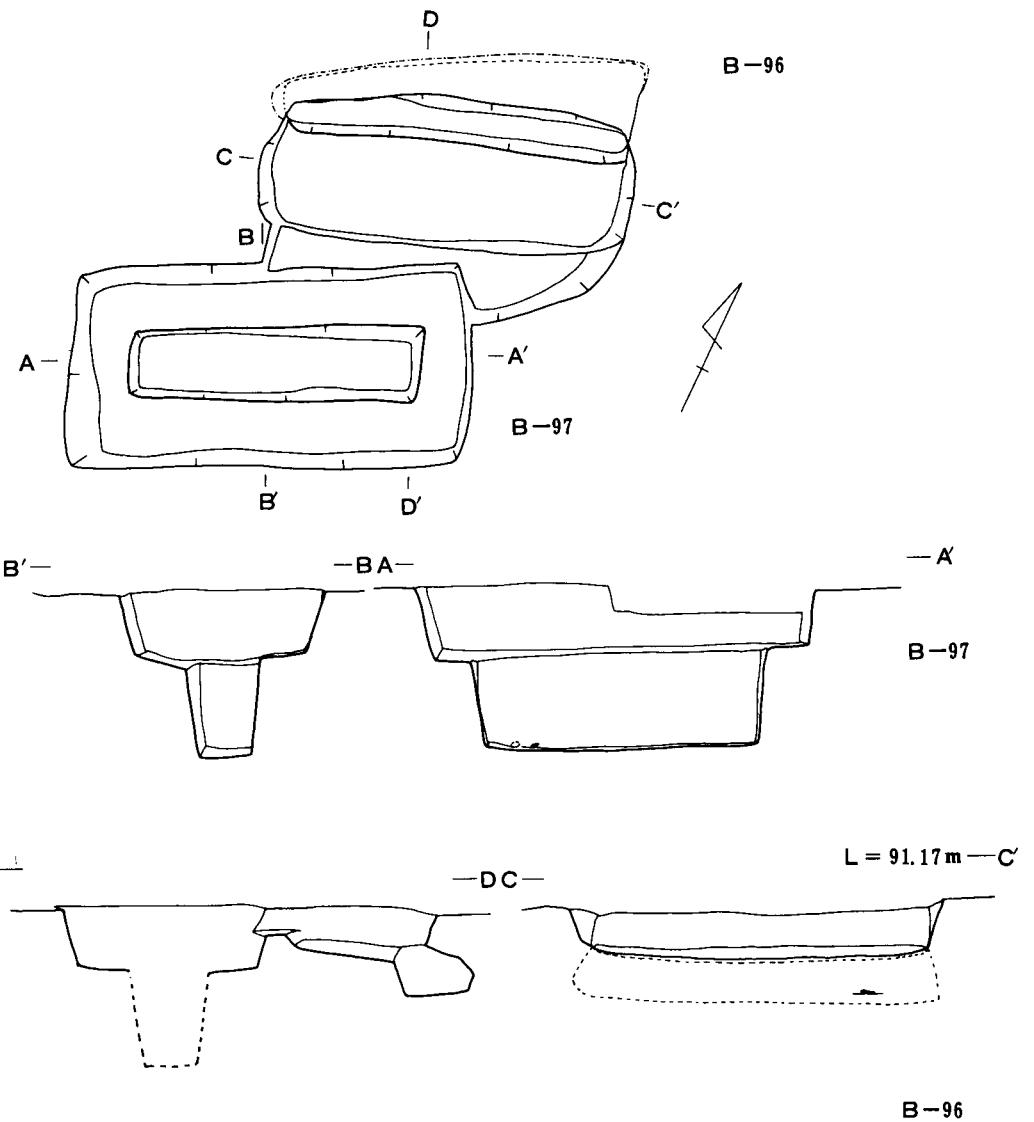
B-93



$L = 90.972\text{ m}$

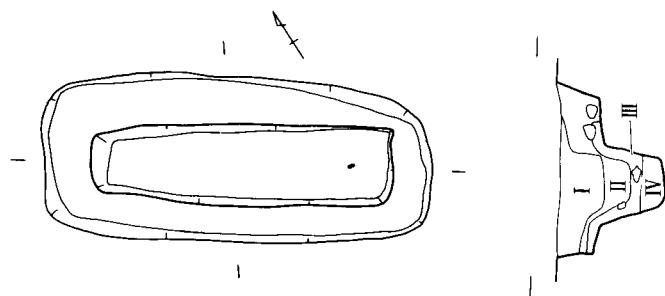
B-94

第26図 B-92, B-93, B-94 土壌実測図

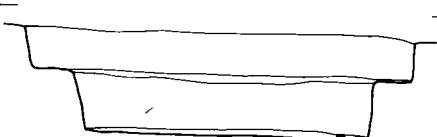


第27図 B-96, B-97 土壌実測図

B-95



L = 90.972 m —

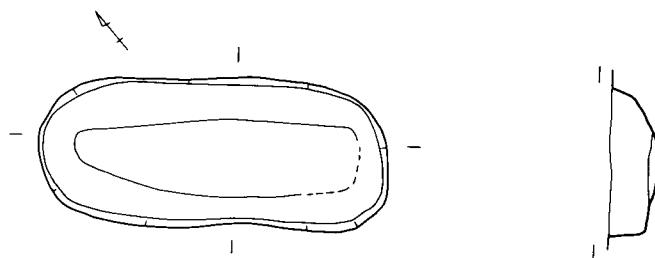


I 黒色土（アカホヤ混、硬）

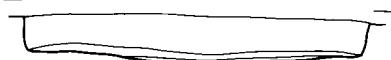
II 暗茶褐色土（やや軟）

III " (粘土・アカホヤ多量混)

IV 灰褐色土

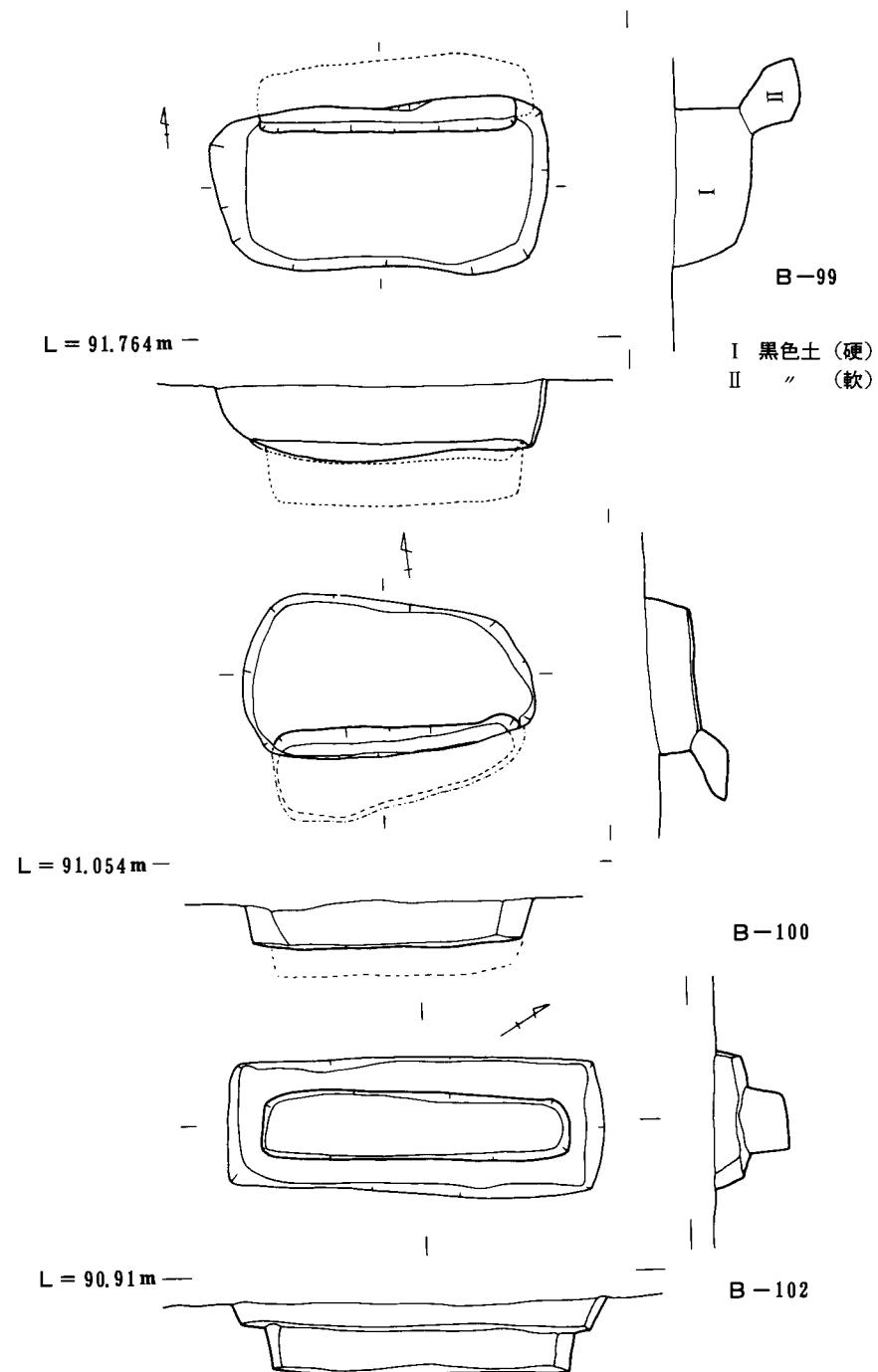


L = 91.10 m —

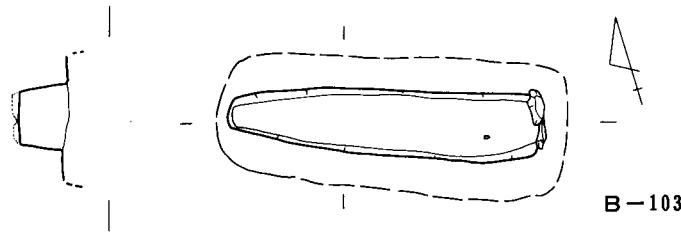


B-98

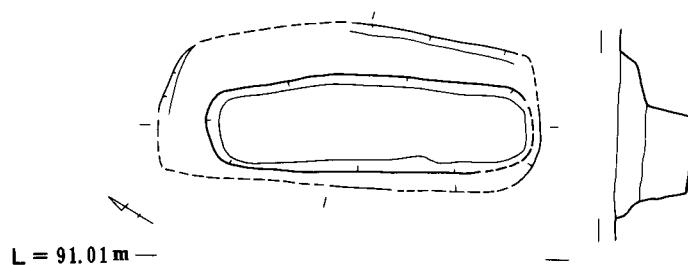
第28図 B-95, B-98 土壌実測図



第29図 B-99, B-100, B-102 土壌実測図

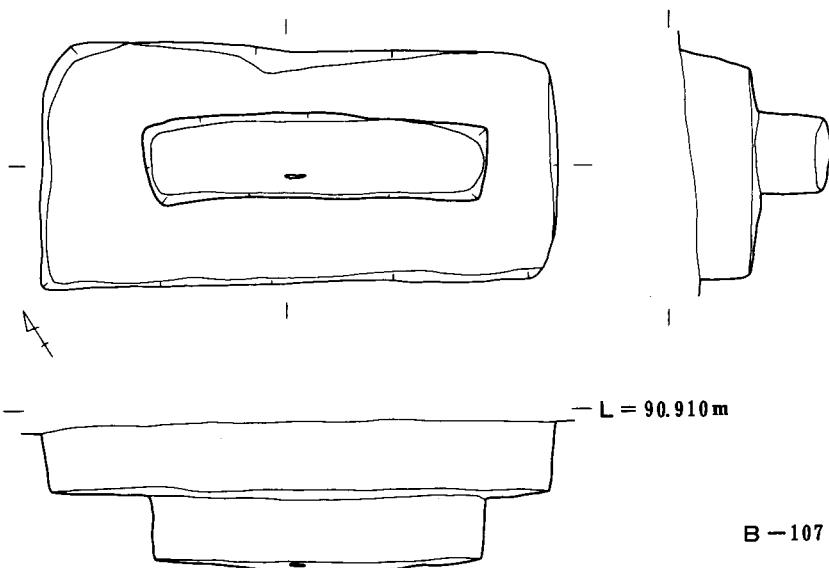


$L = 91.0 \text{ m}$



$L = 91.01 \text{ m}$

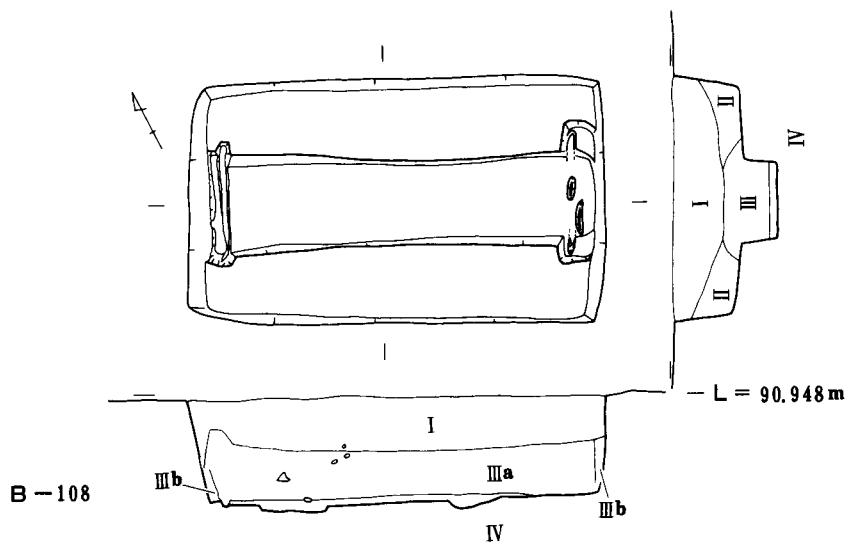
B-104



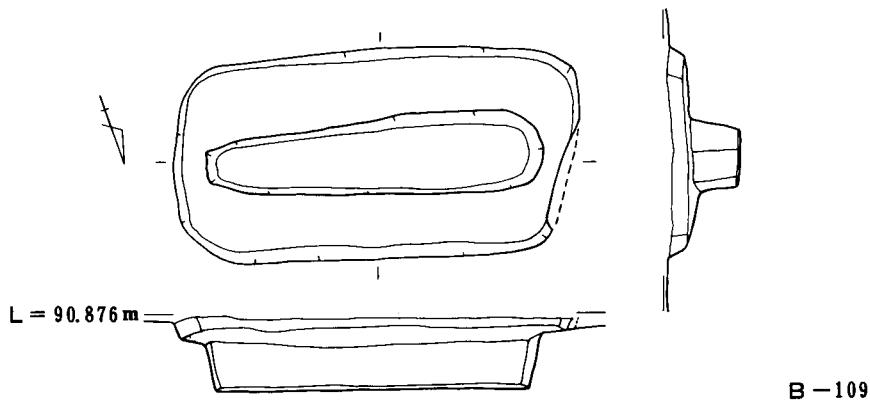
$- L = 90.910 \text{ m}$

B-107

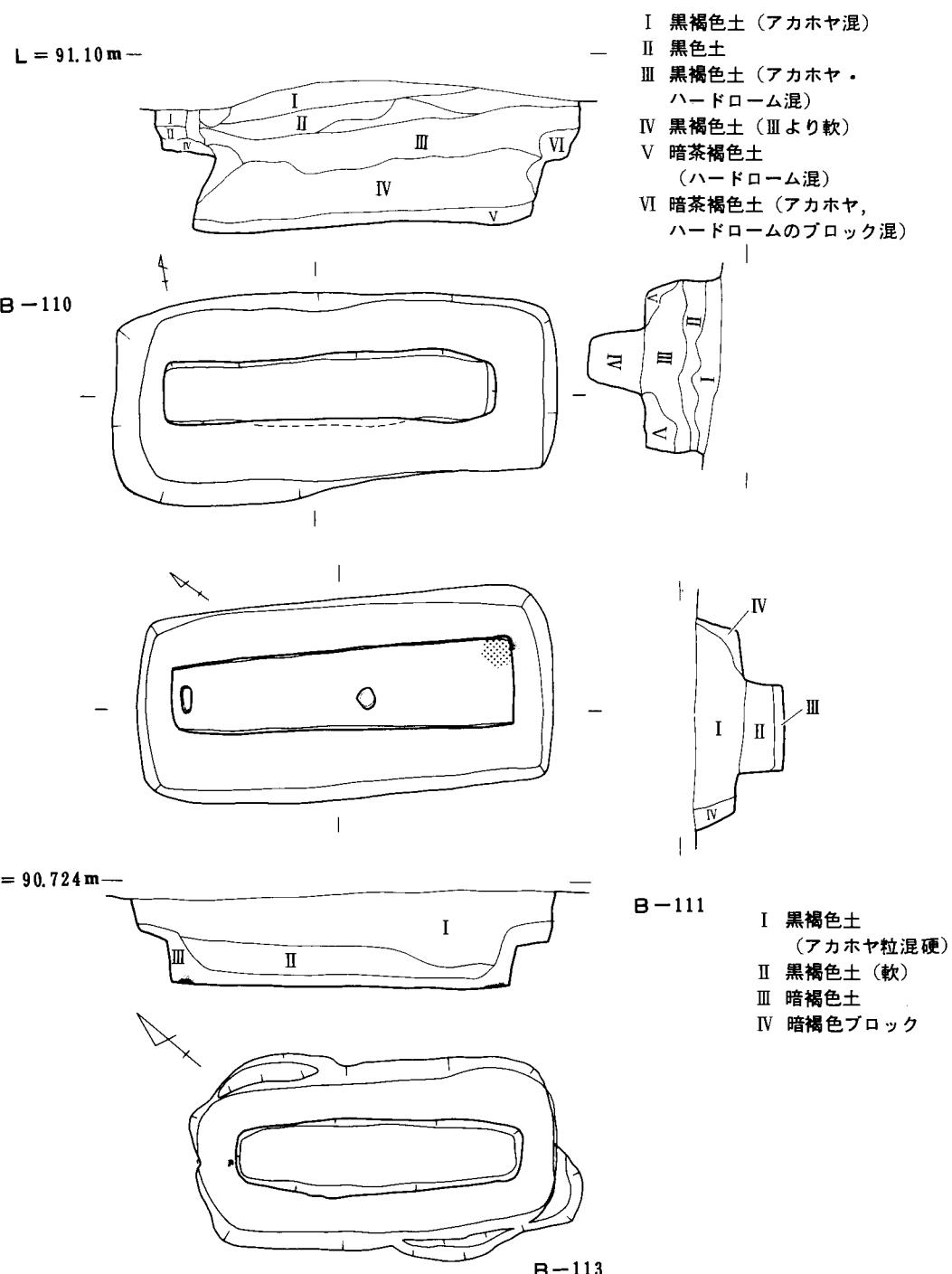
第30図 B-103, B-104, B-107 土壌実測図



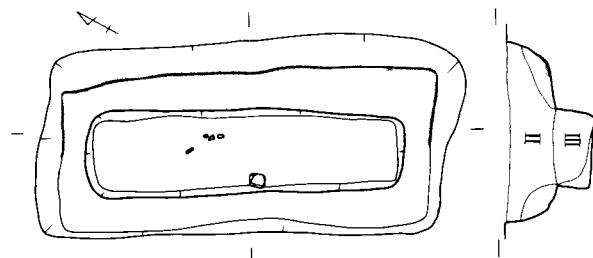
I 黒褐色土（アカホヤ混, 硬）
 II 黒色土（アカホヤ混, 硬）
 IIIa 黒褐色土（アカホヤ混, 軟, しまりなし）
 IIIb “ (IIIaより軟, しまりなし)
 IV 暗茶褐色土（軟）



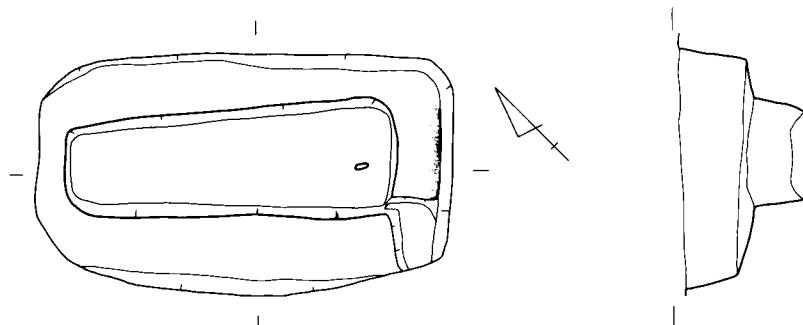
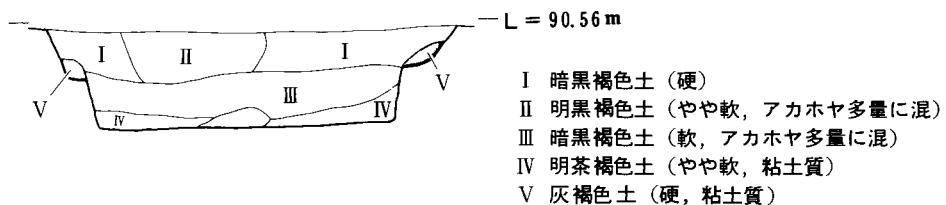
第31図 B-108, B-109 土壌実測図



第32図 B-110, B-111, B-113 土壌実測図



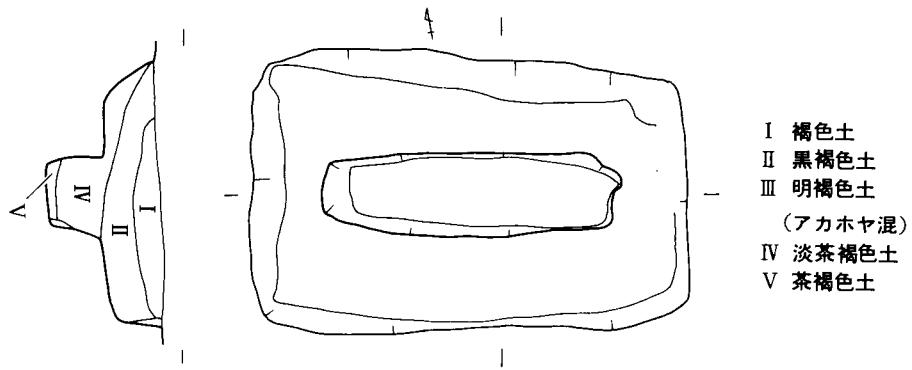
B-114



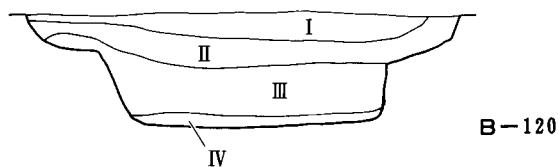
B-118



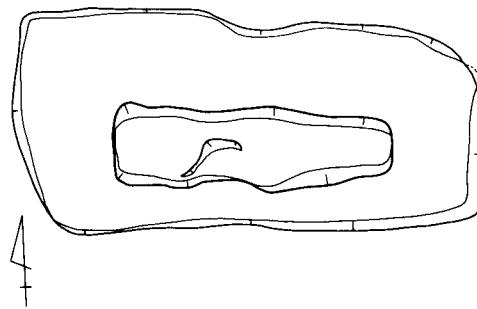
第33図 B-114, B-118 土壌実測図



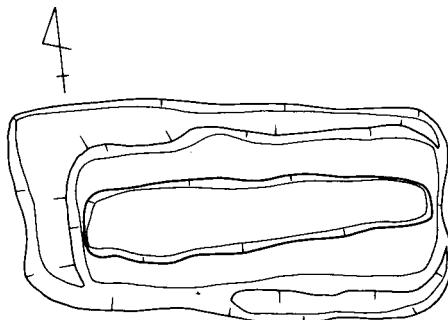
L = 90.909 m



B - 120

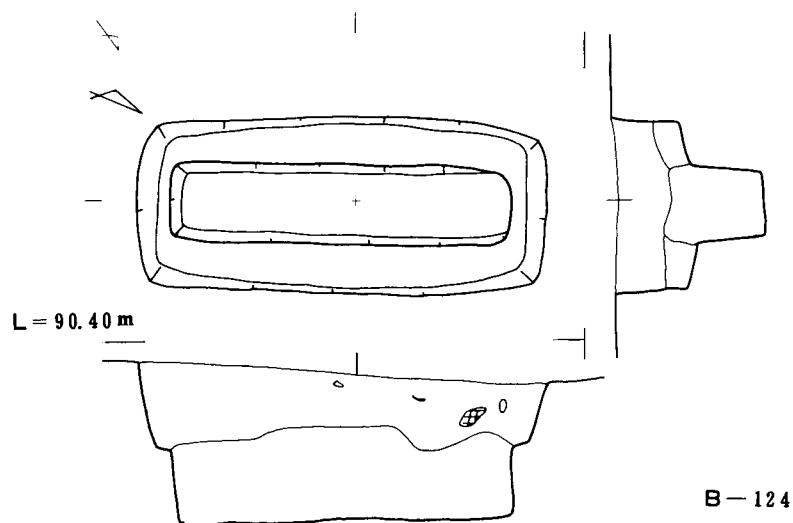


B - 121

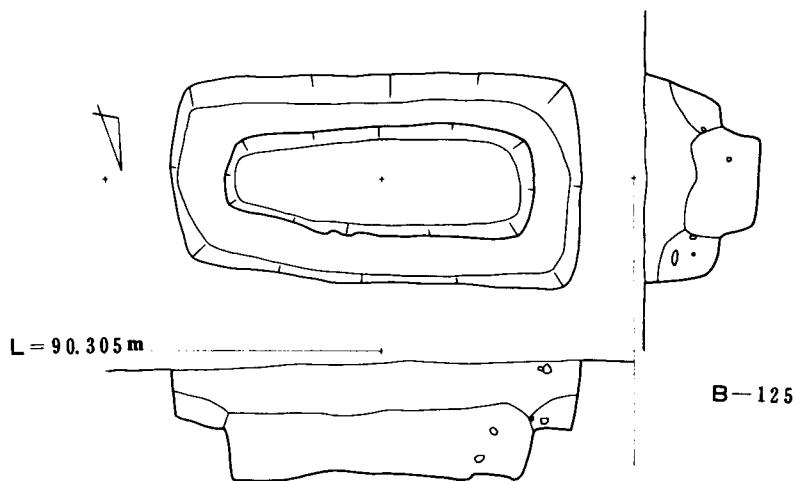


B - 122

第34図 B - 120, B - 121, B - 122 土壌実測図

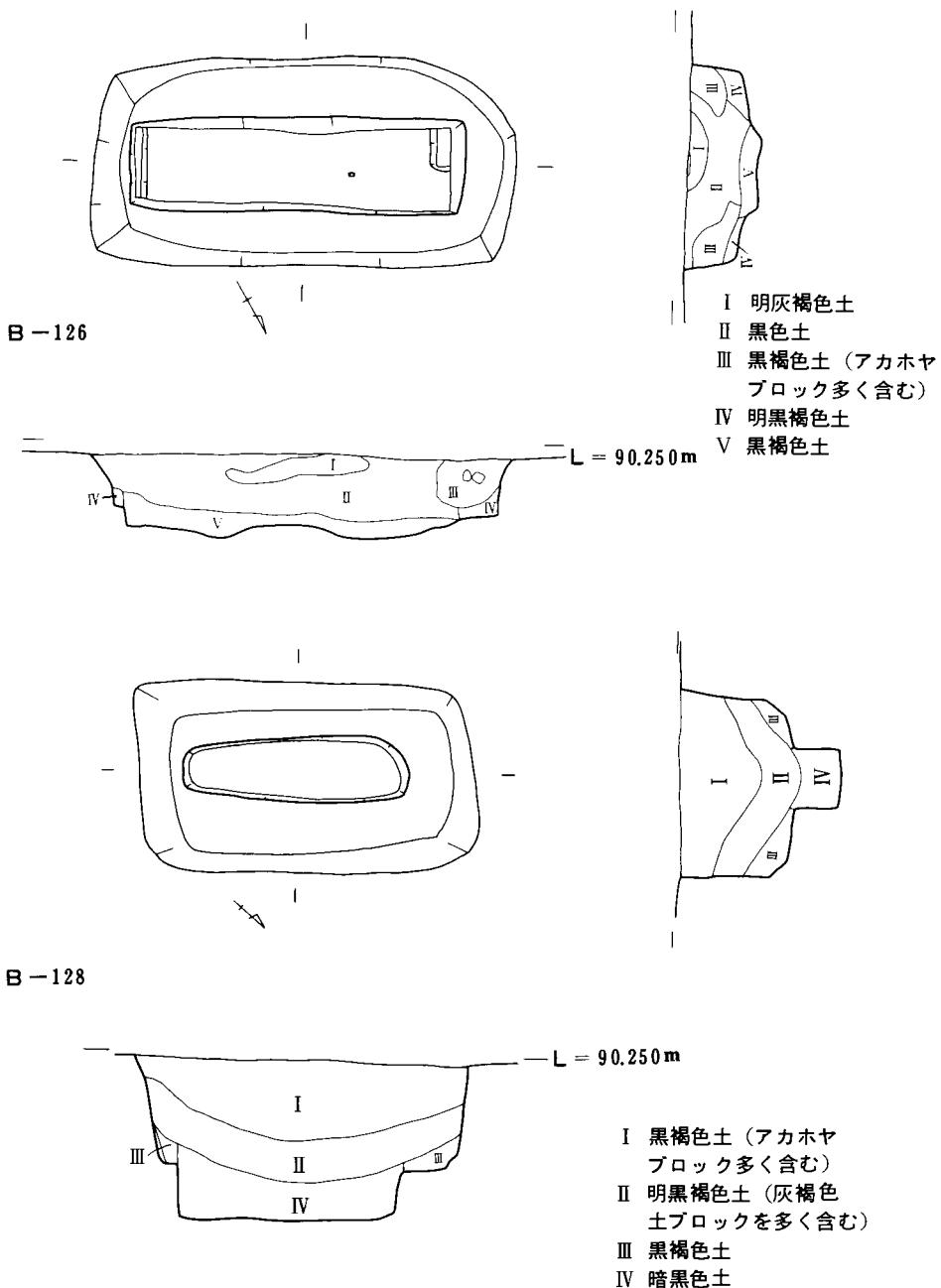


B-124

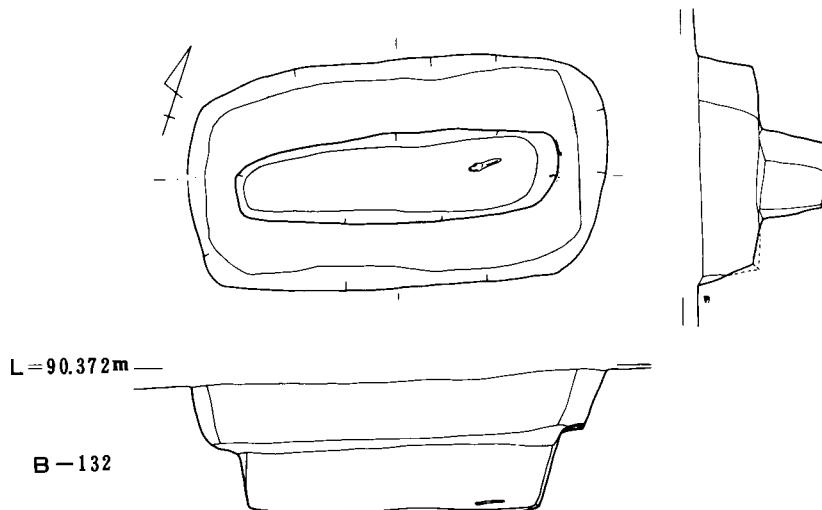
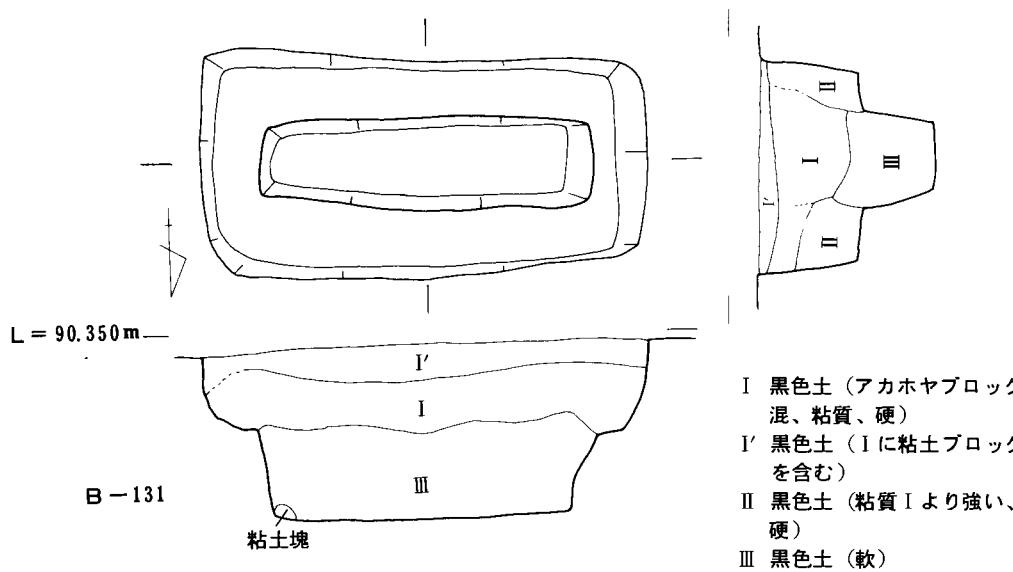


B-125

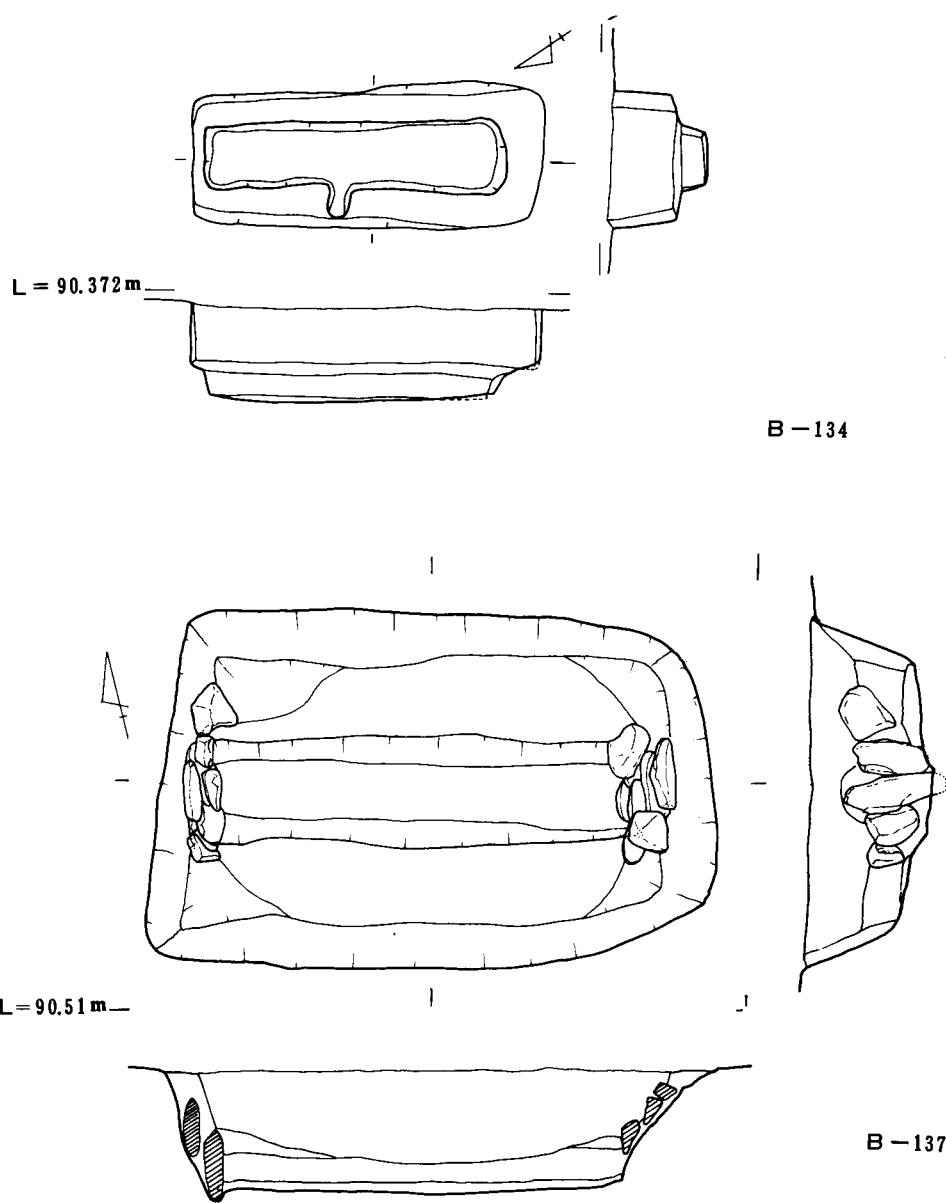
第35図 B-124, B-125 土壌実測図



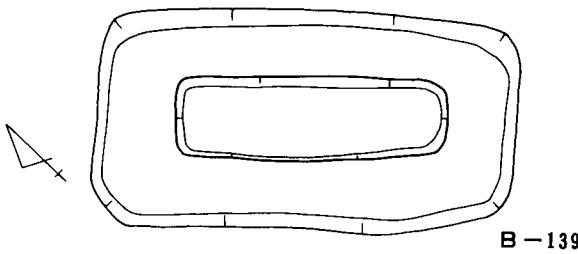
第36図 B-126, B-128 土壌実測図



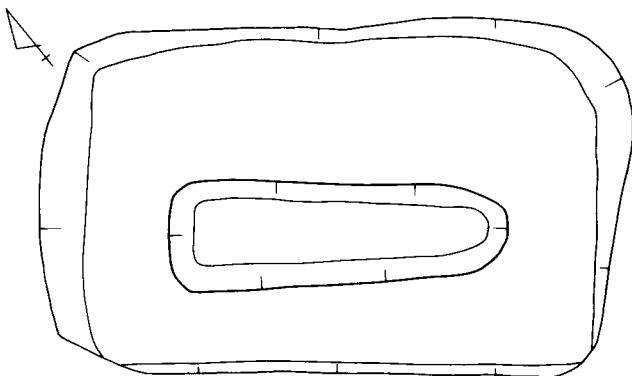
第37図 B-131, B-132 土壌実測図



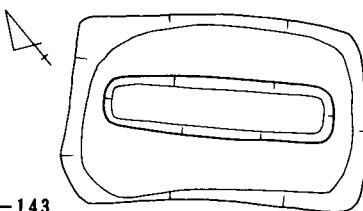
第38図 B-134, B-137 土壌実測図



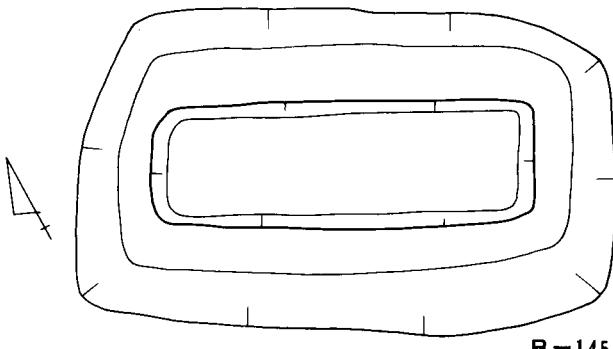
B - 139



B - 142

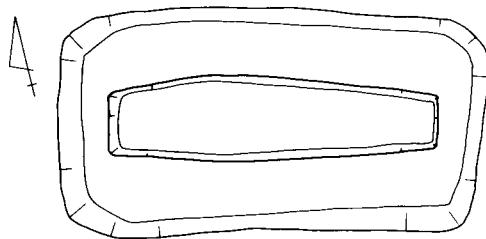


B - 143

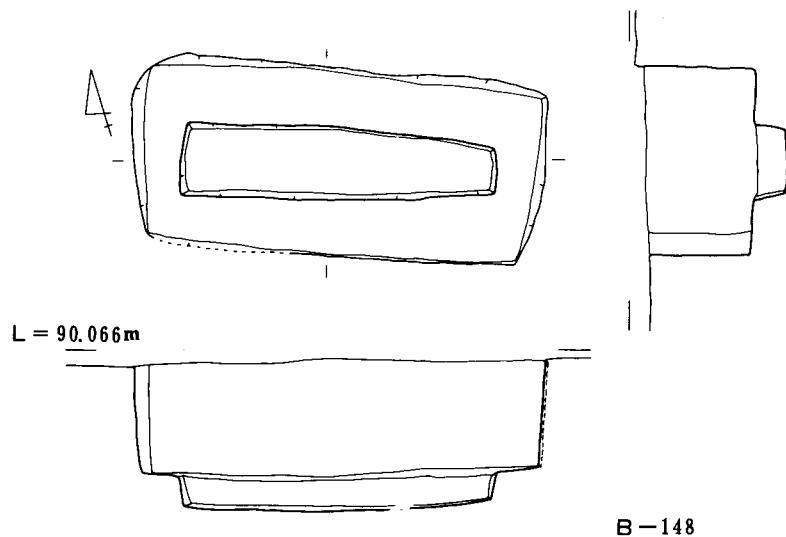


B - 145

第39図 B - 139, B - 142, B - 143, B - 145 土壌実測図

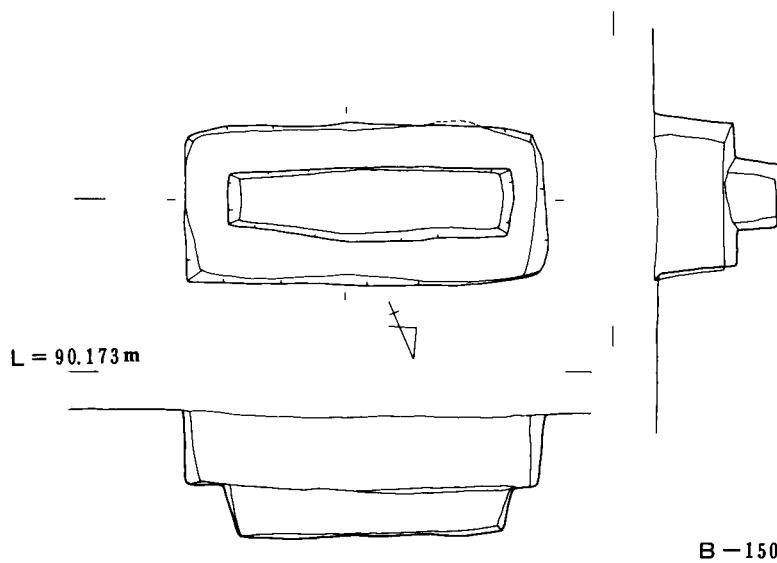
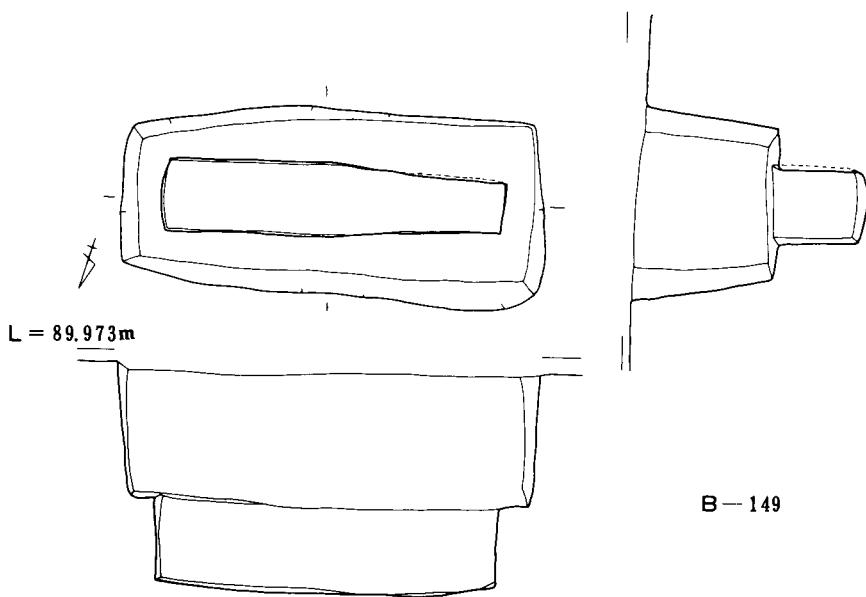


B-146

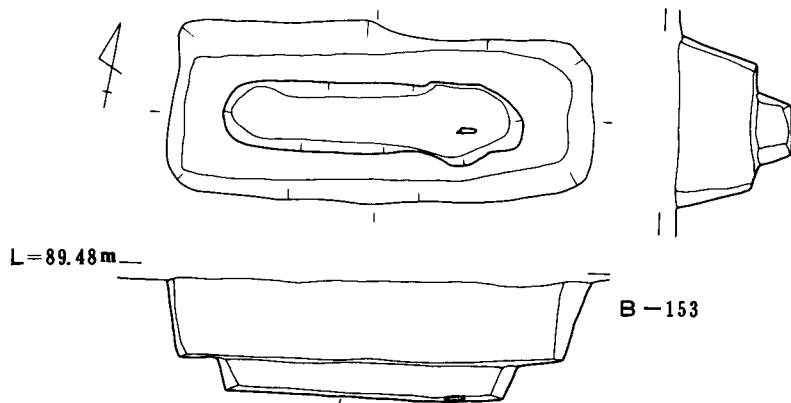
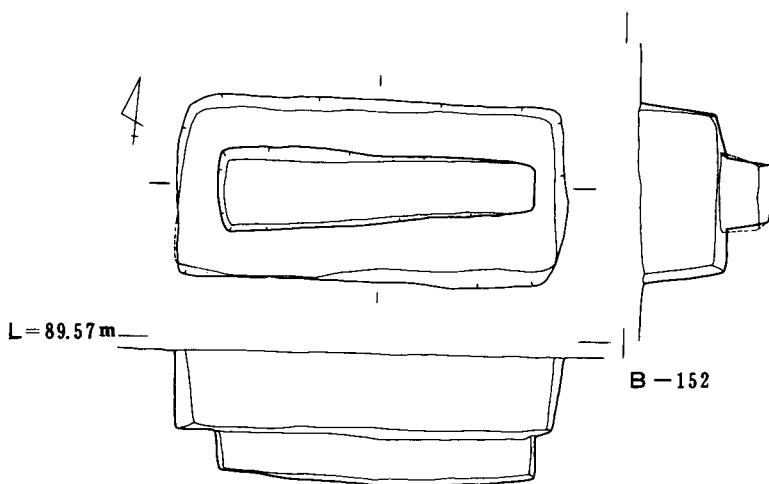
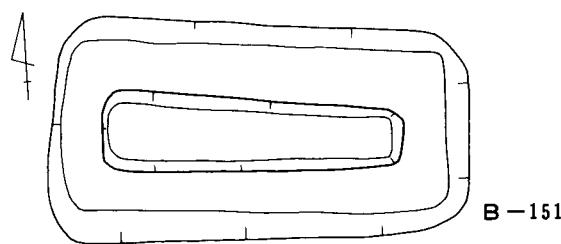


B-148

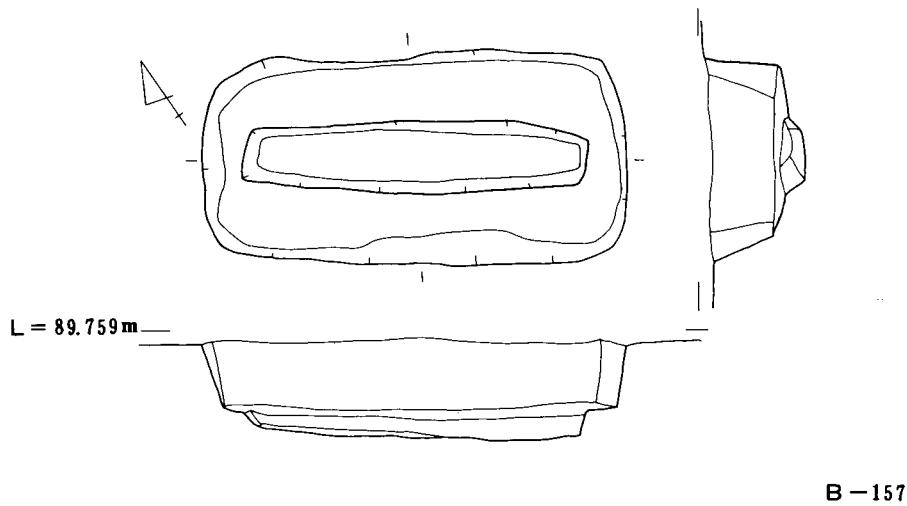
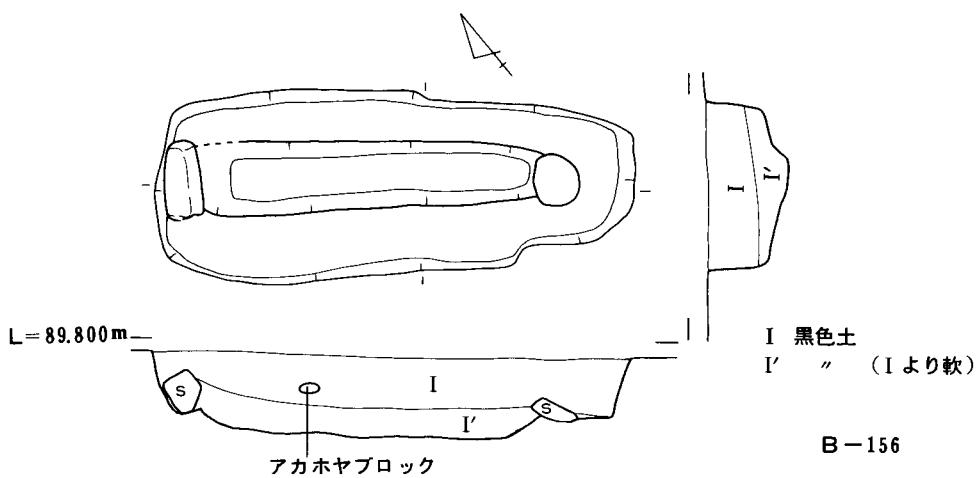
第40図 B-146、B-148 土壌実測図



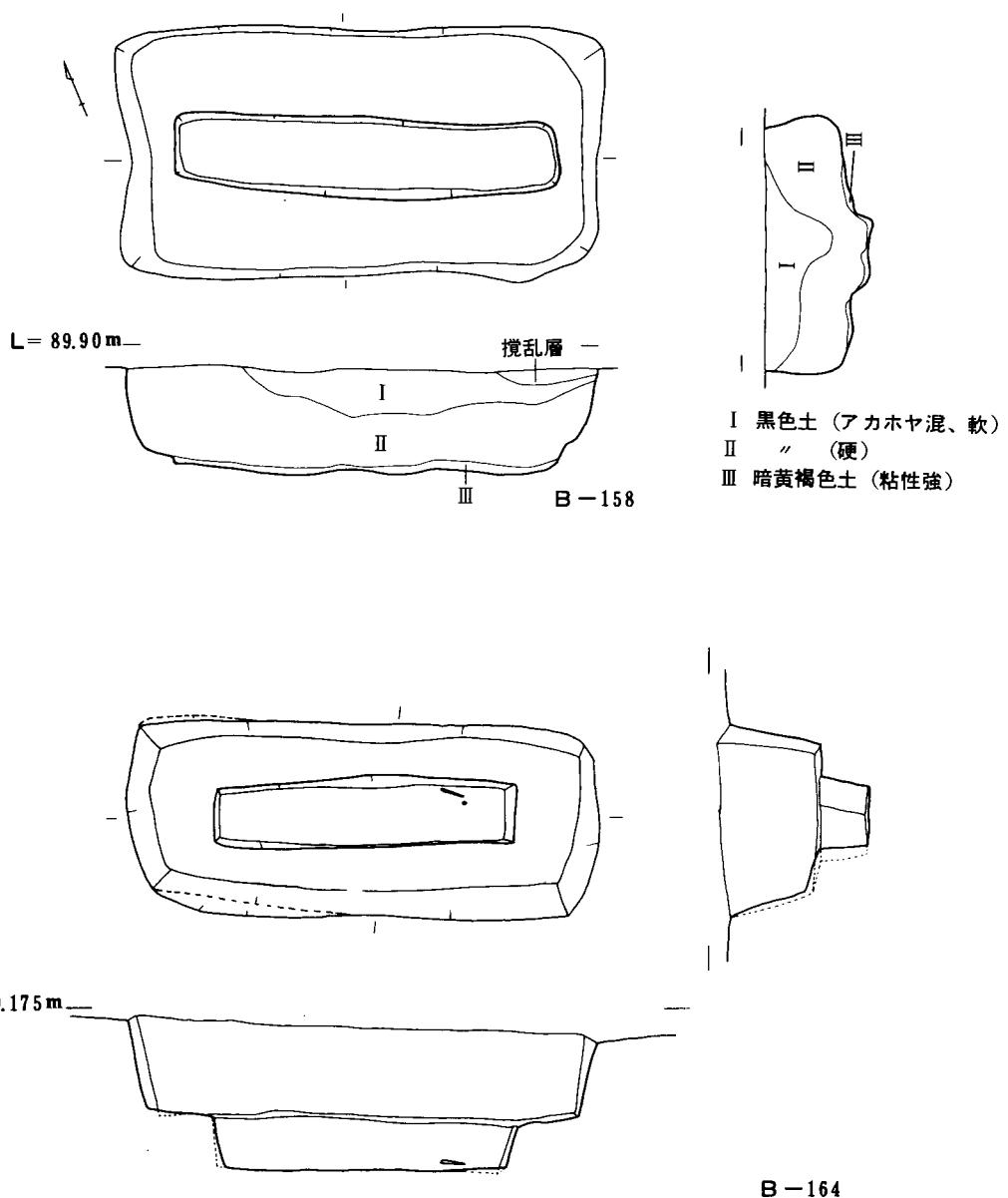
第41図 B-149, B-150 土壌実測図



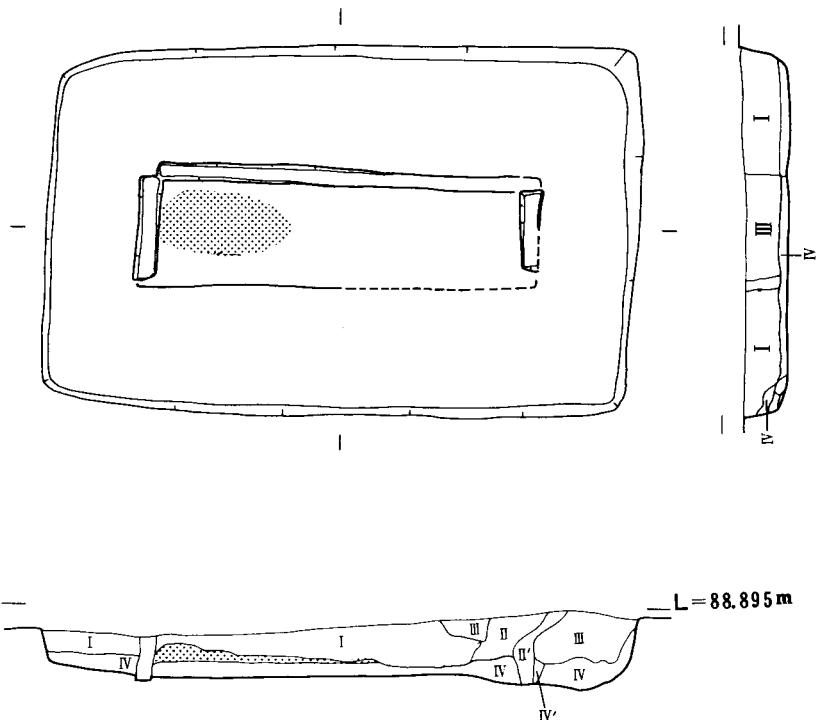
第42図 B-151, B-152, B-153 土壌実測図



第43図 B-156, B-157 土壌実測図



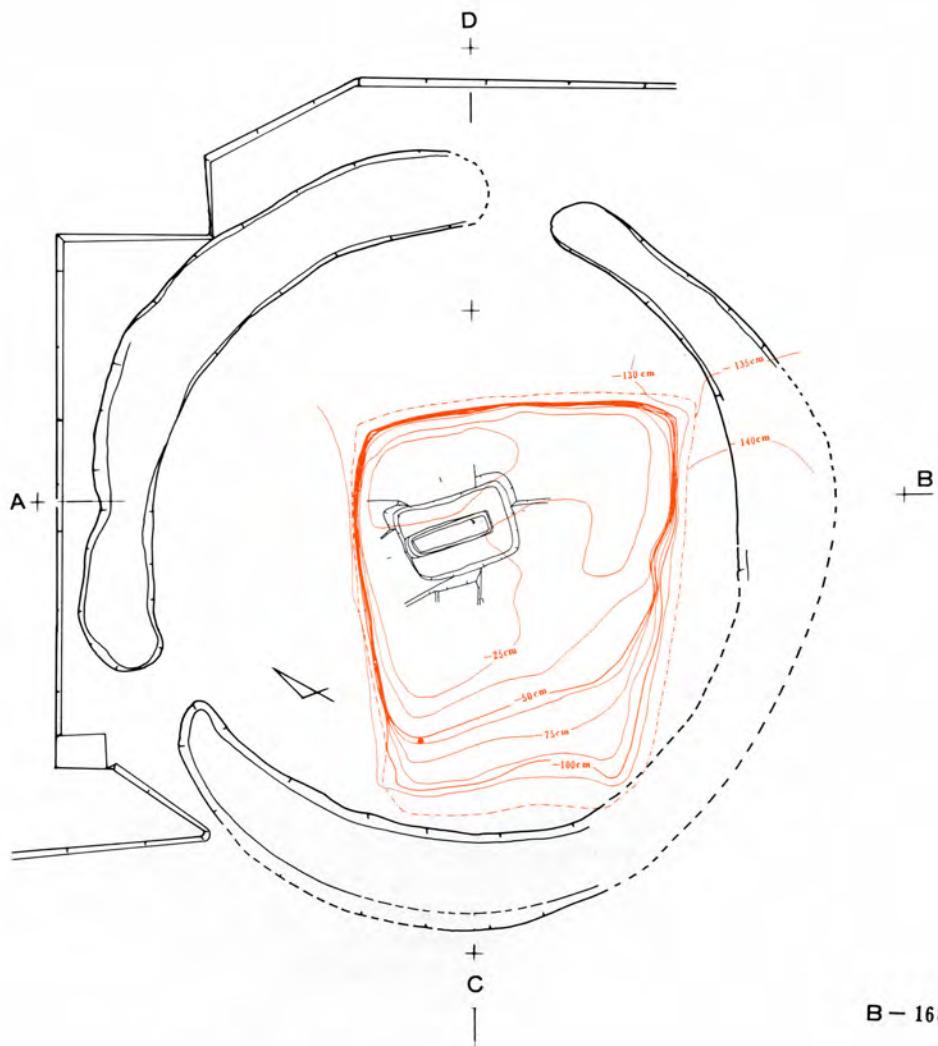
第44図 B-158, B-164 土壌実測図



B-167

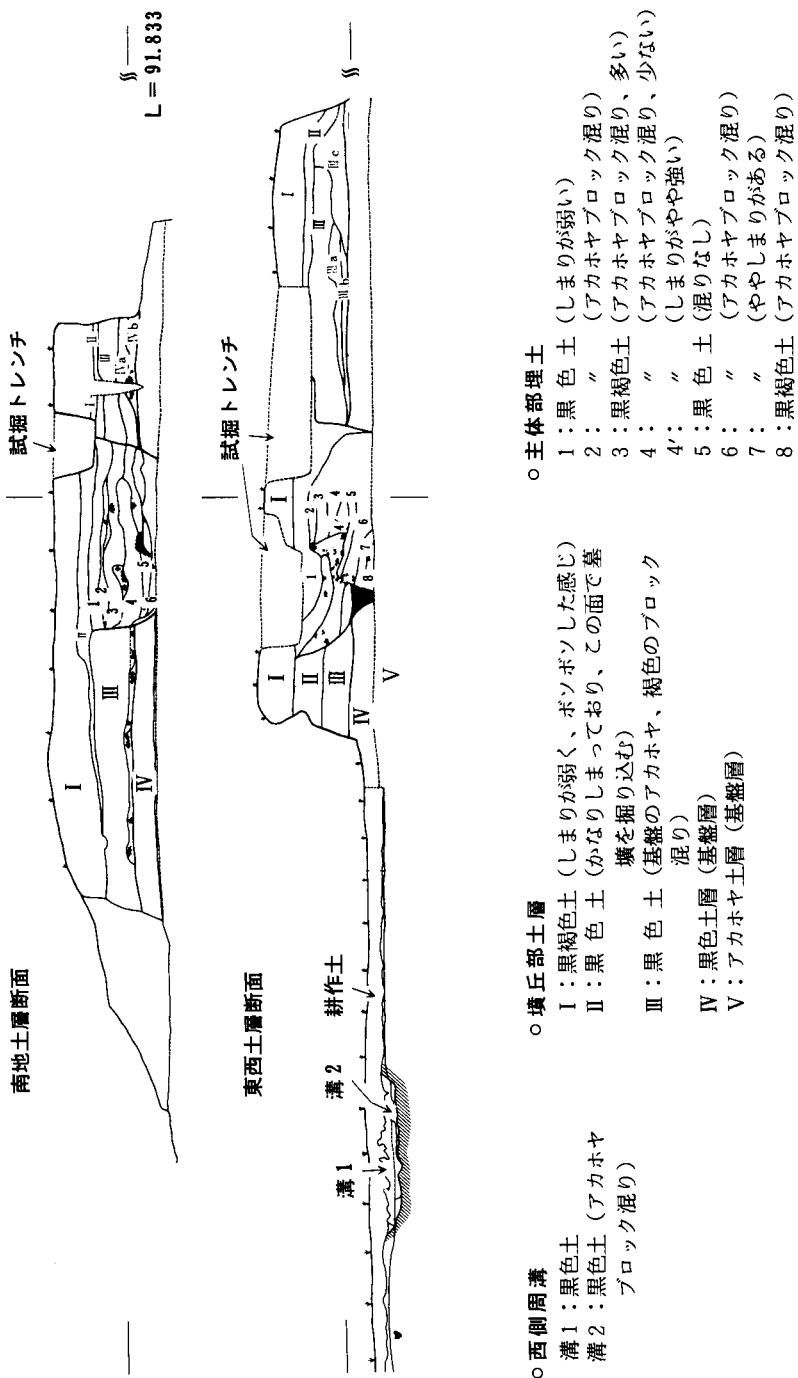
- I 暗黒褐色土
- II " (アカホヤブロック混)
- II' " (IIに白色粒子混)
- III " (アカホヤ粒混)
- IV " (ハードロームしみ込み,
IIIと類似)
- VI' IVより軟

第45図 B-167 土壌実測図

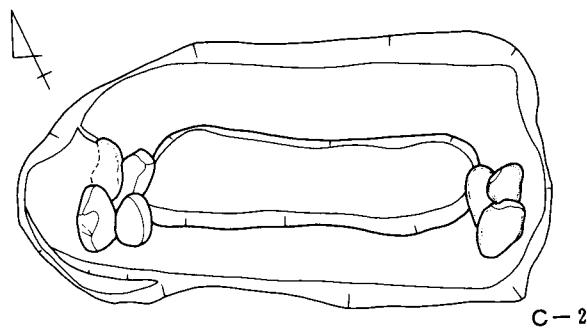


B-168号

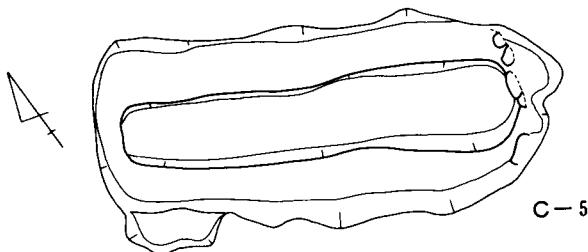
第46図 B-168 土壌実測図



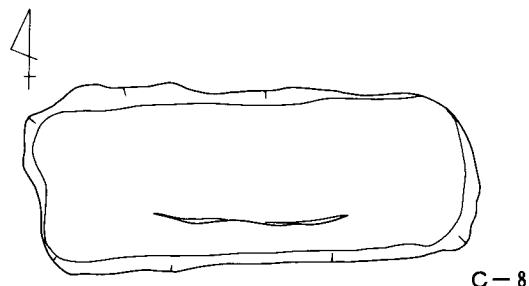
第47図 B-168号壇丘土層断面図



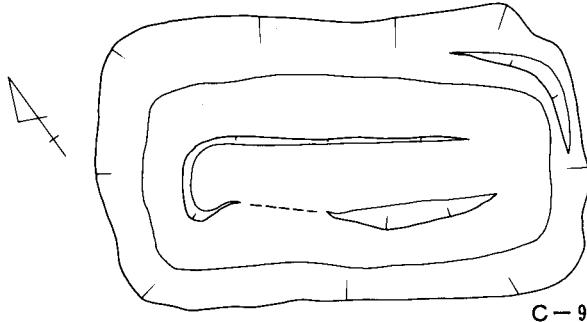
C - 2



C - 5

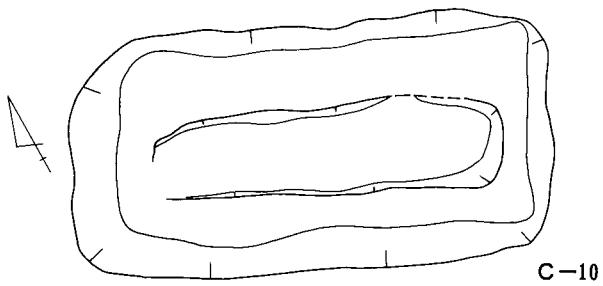


C - 8

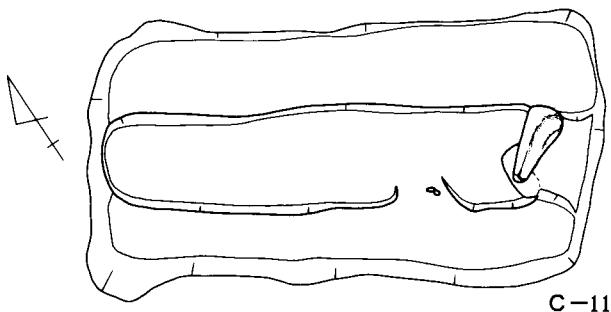


C - 9

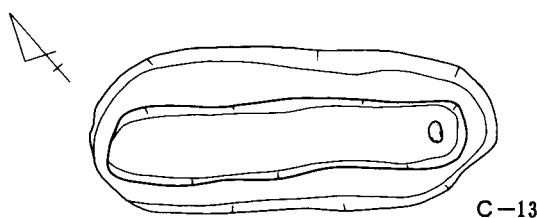
第48図 C - 2, C - 5, C - 8, C - 9 土壌実測図



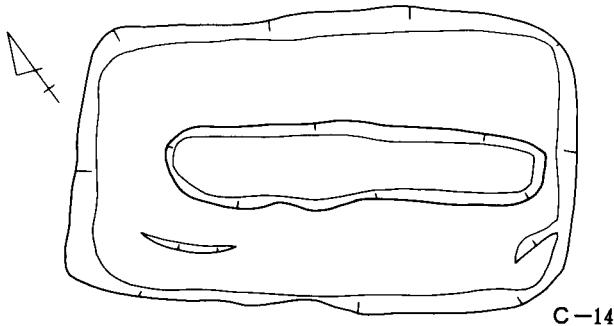
C-10



C-11

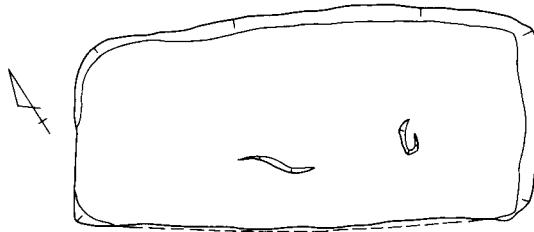


C-13

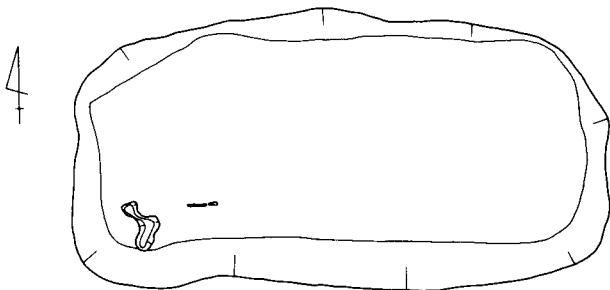


C-14

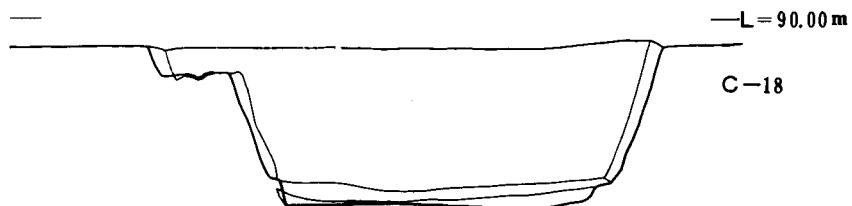
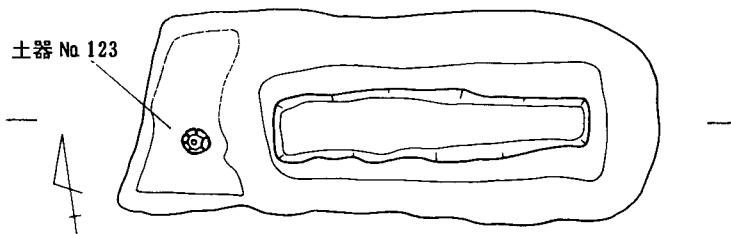
第49図 C-10, C-11, C-13, C-14 土壌実測図



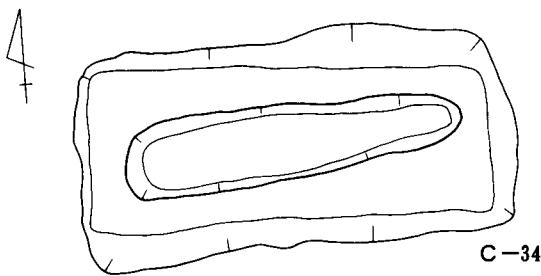
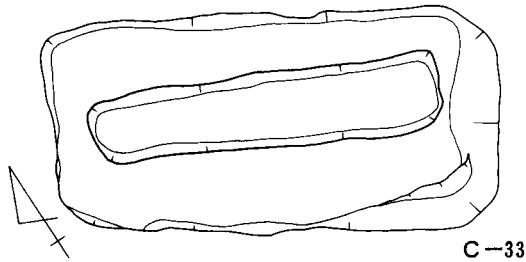
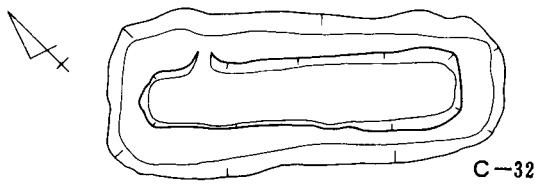
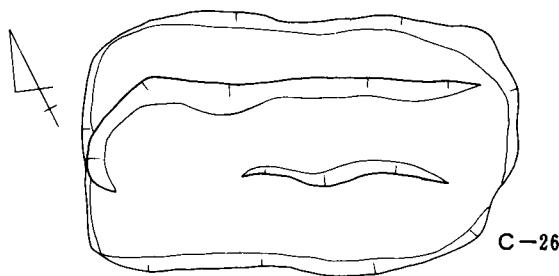
C-15



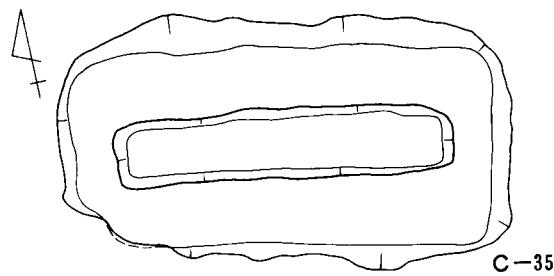
C-17



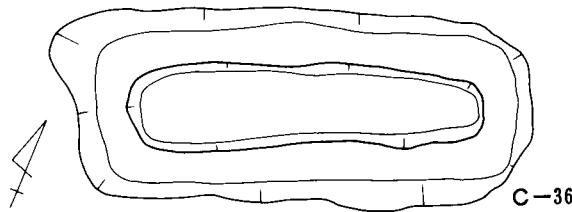
第50図 C-15, C-17, C-18 土壌実測図



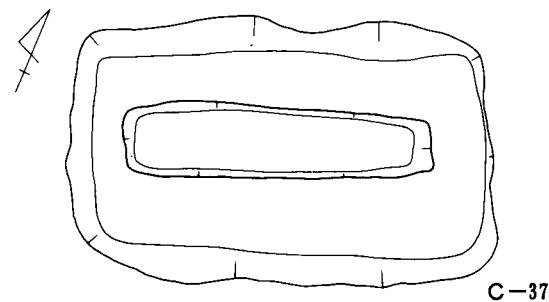
第51図 C-26, C-32, C-33, C-34 土壌実測図



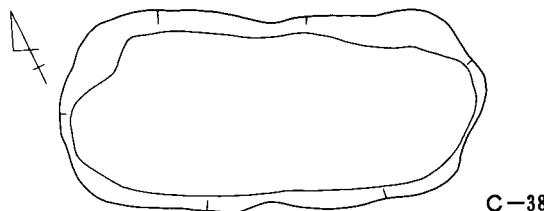
C-35



C-36



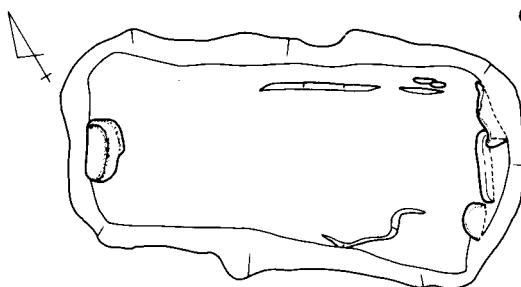
C-37



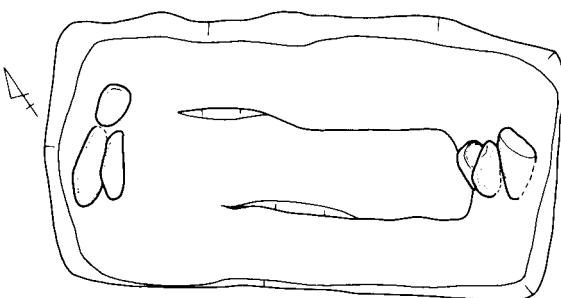
C-38

第52図 C-35, C-36, C-37, C-38 土壌実測図

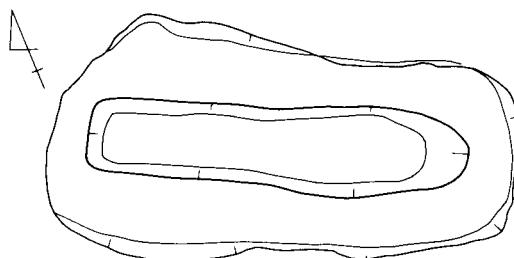
C-39



C-102

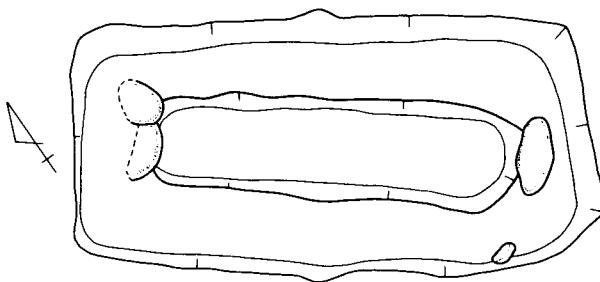


C-103

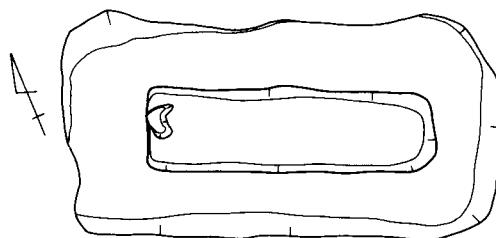


C-104

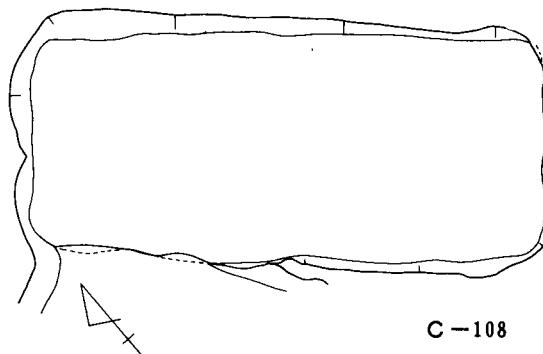
第53図 C-39, C-102, C-103, C-104 土壌実測図



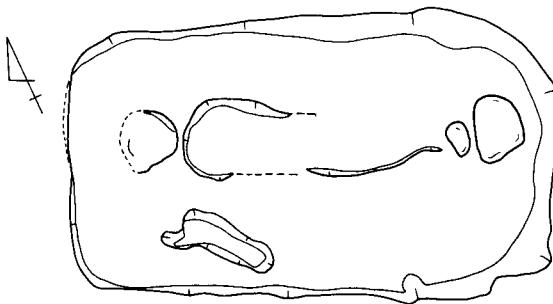
C - 106



C - 107

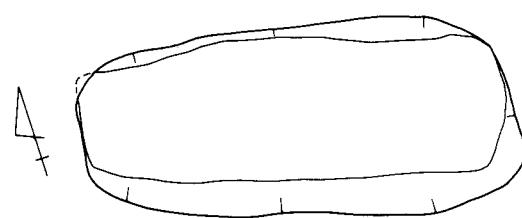


C - 108

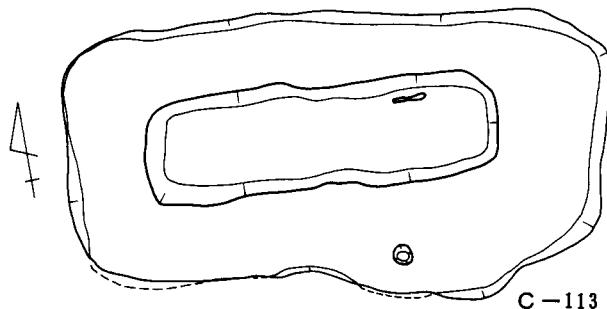


C - 109

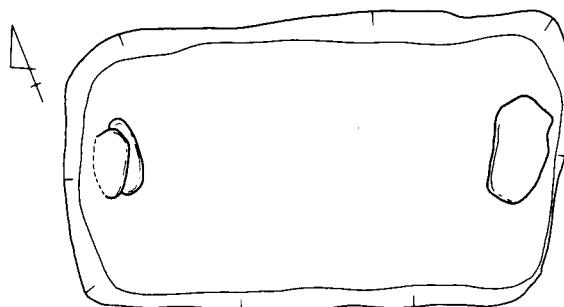
第54図 C-106, C-107, C-108, C-109 土壌実測図



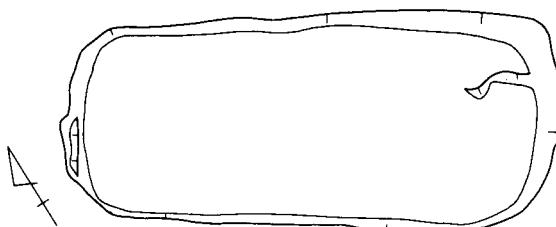
C - 111



C - 113

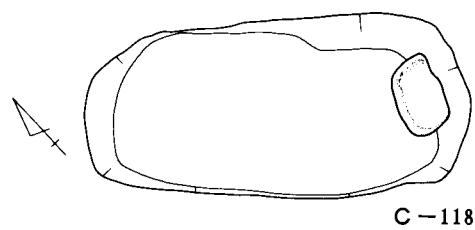


C - 116

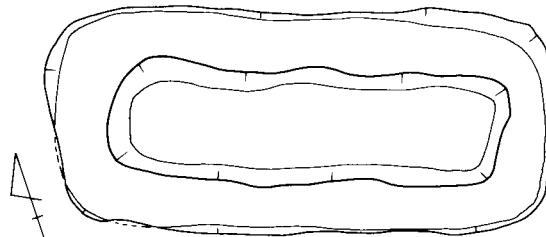


C - 117

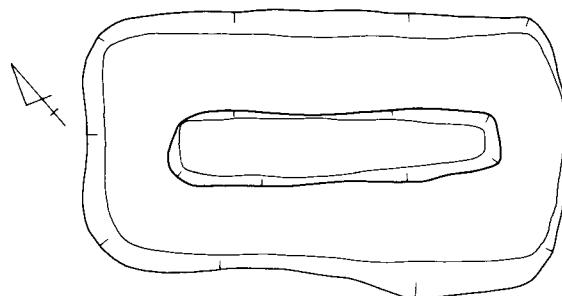
第55図 C-111, C-113, C-116, C-117 土壌実測図



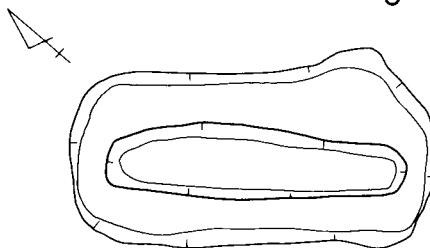
C-118



C-122

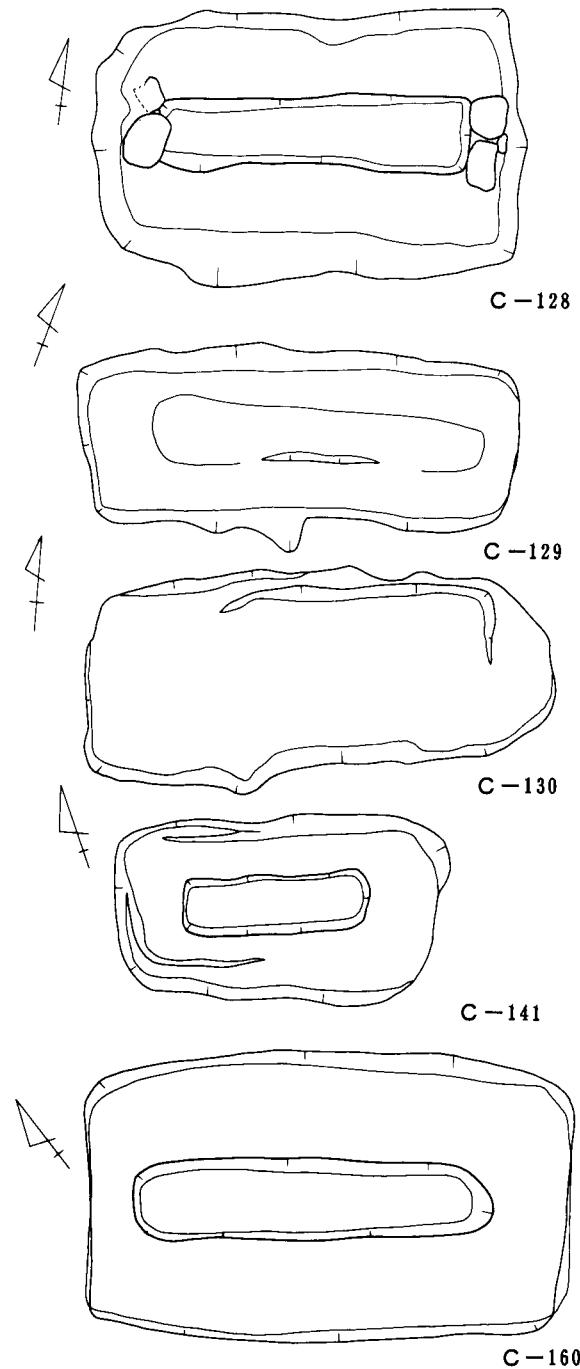


C-123

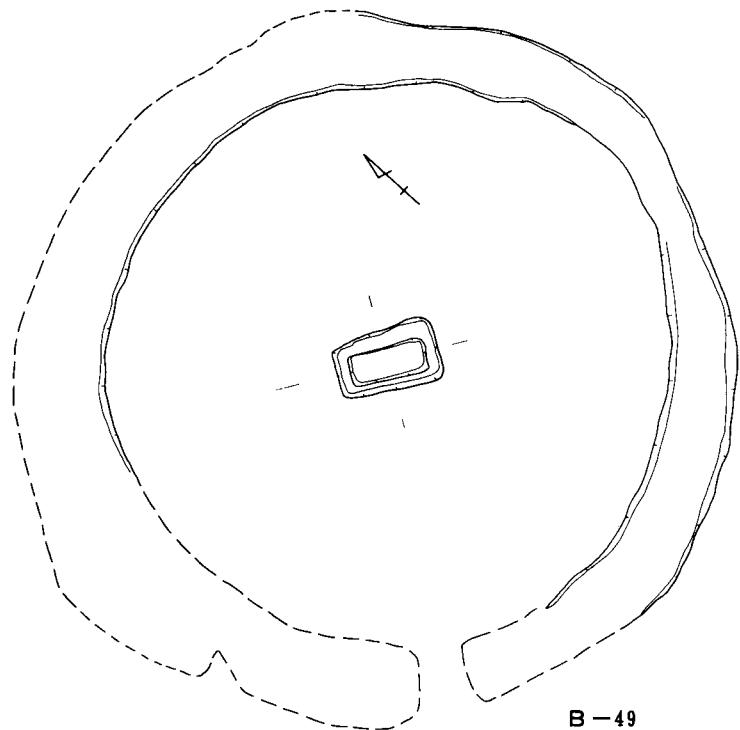


C-125

第56図 C-118, C-122, C-123, C-125 土壌実測図

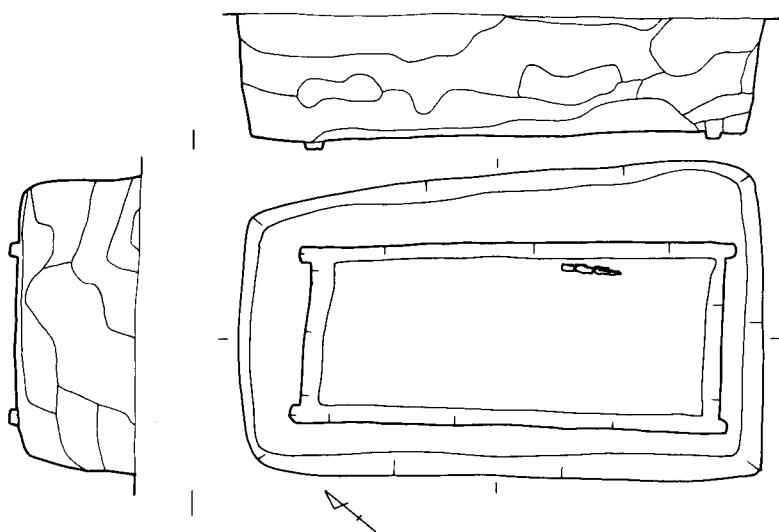


第57図 C-128, C-129, C-130, C-141, C-160 土壌実測図

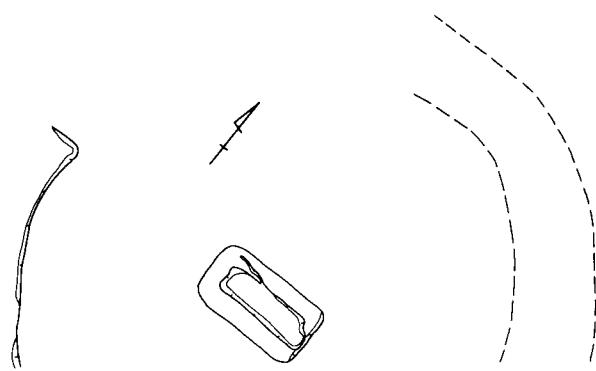


B-49

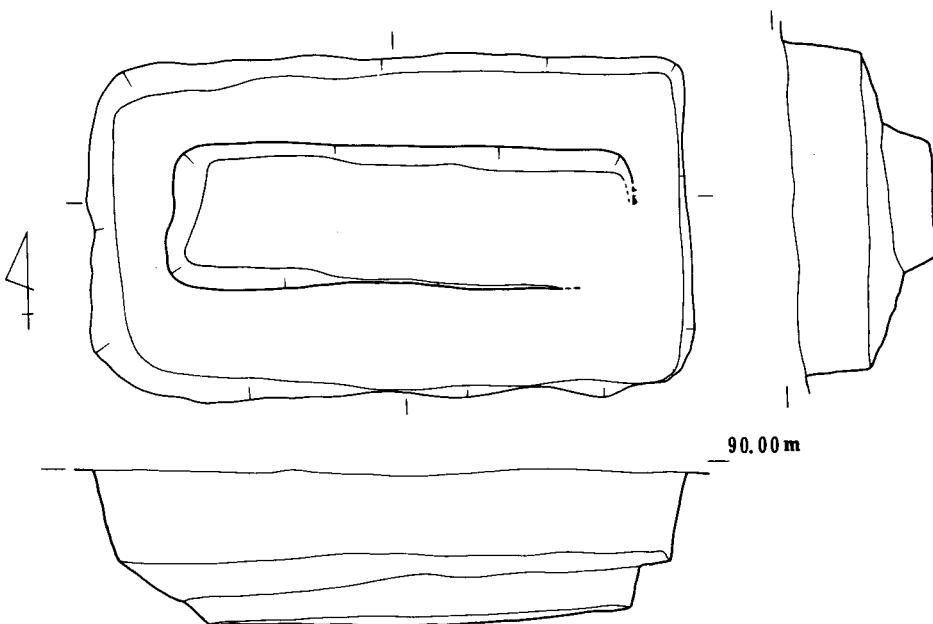
L = 91.005 m —



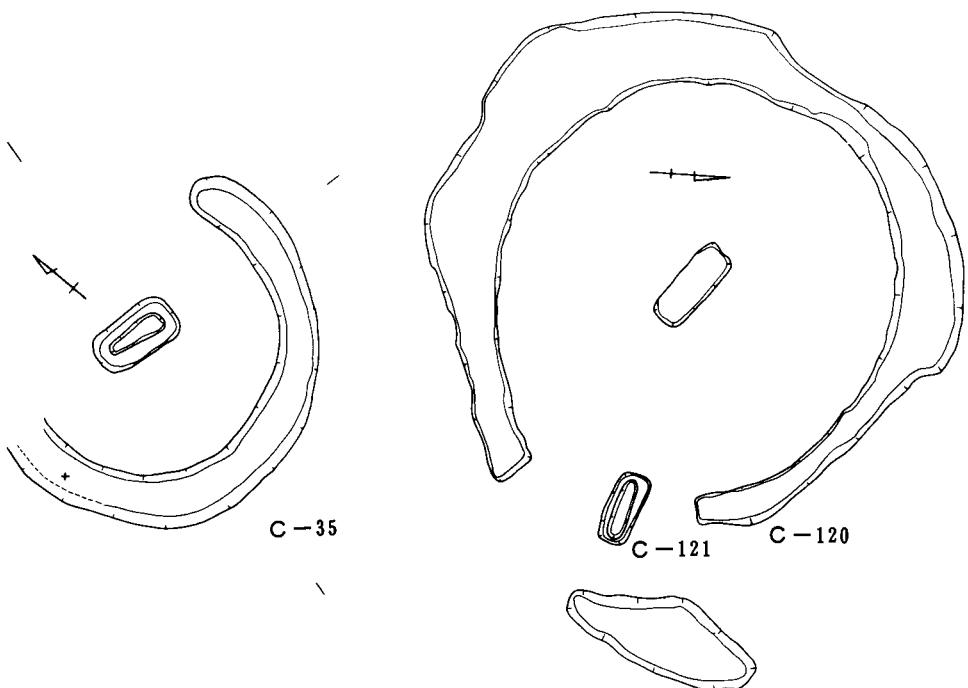
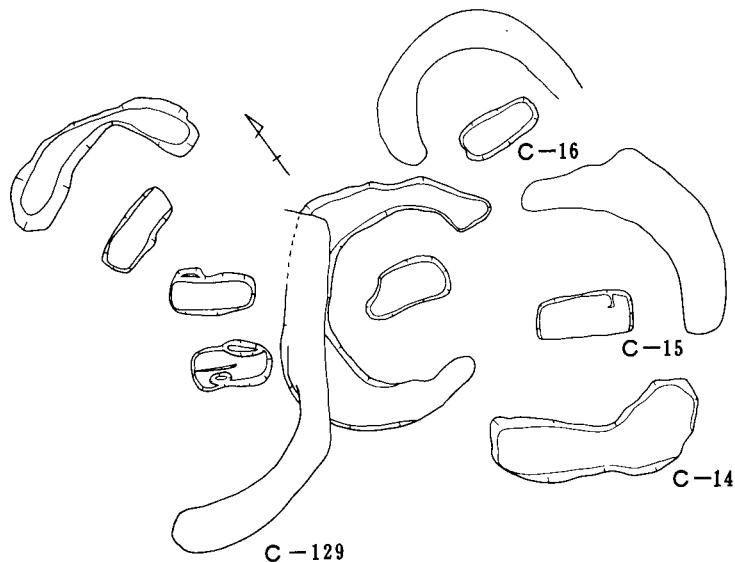
第58図 周溝墓遺構実測図



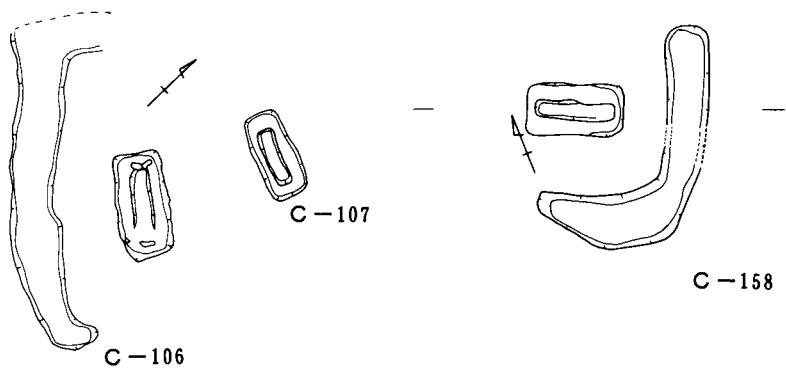
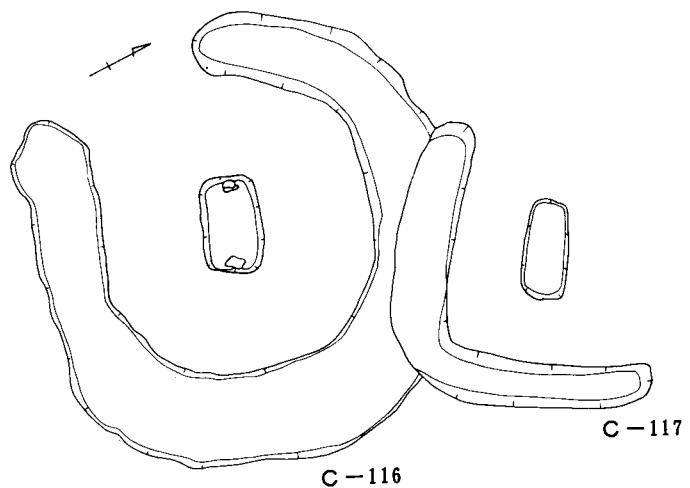
B-136



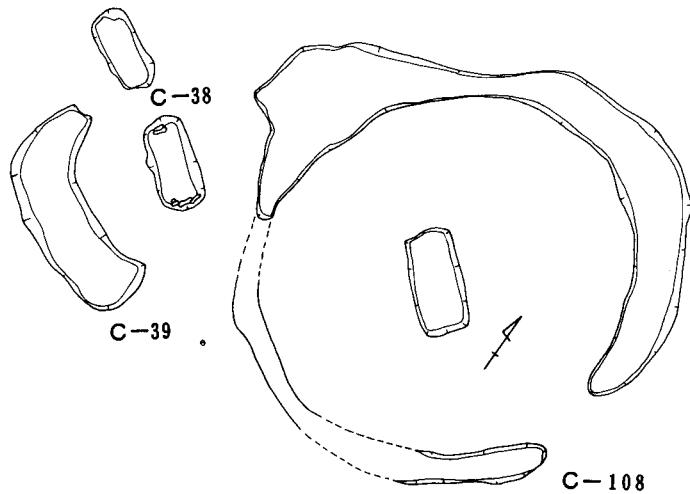
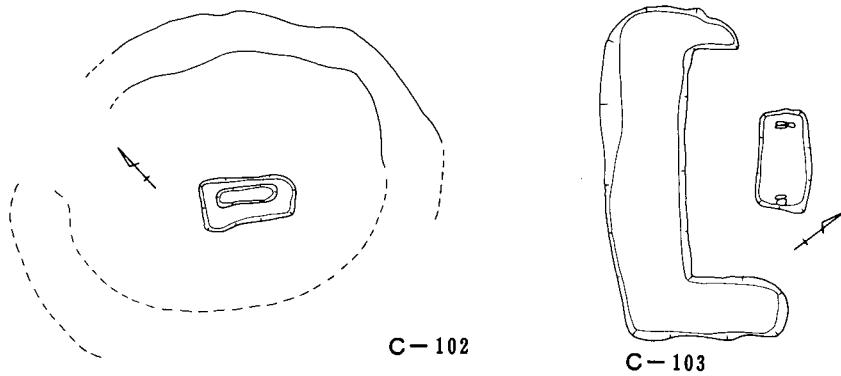
第59図 周溝墓遺構実測図



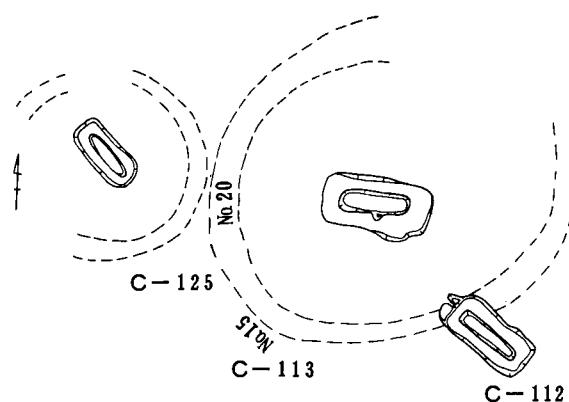
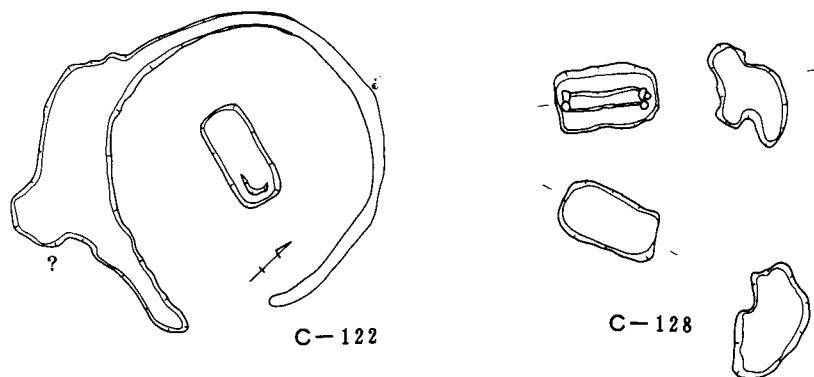
第60図 周溝墓遺構実測図



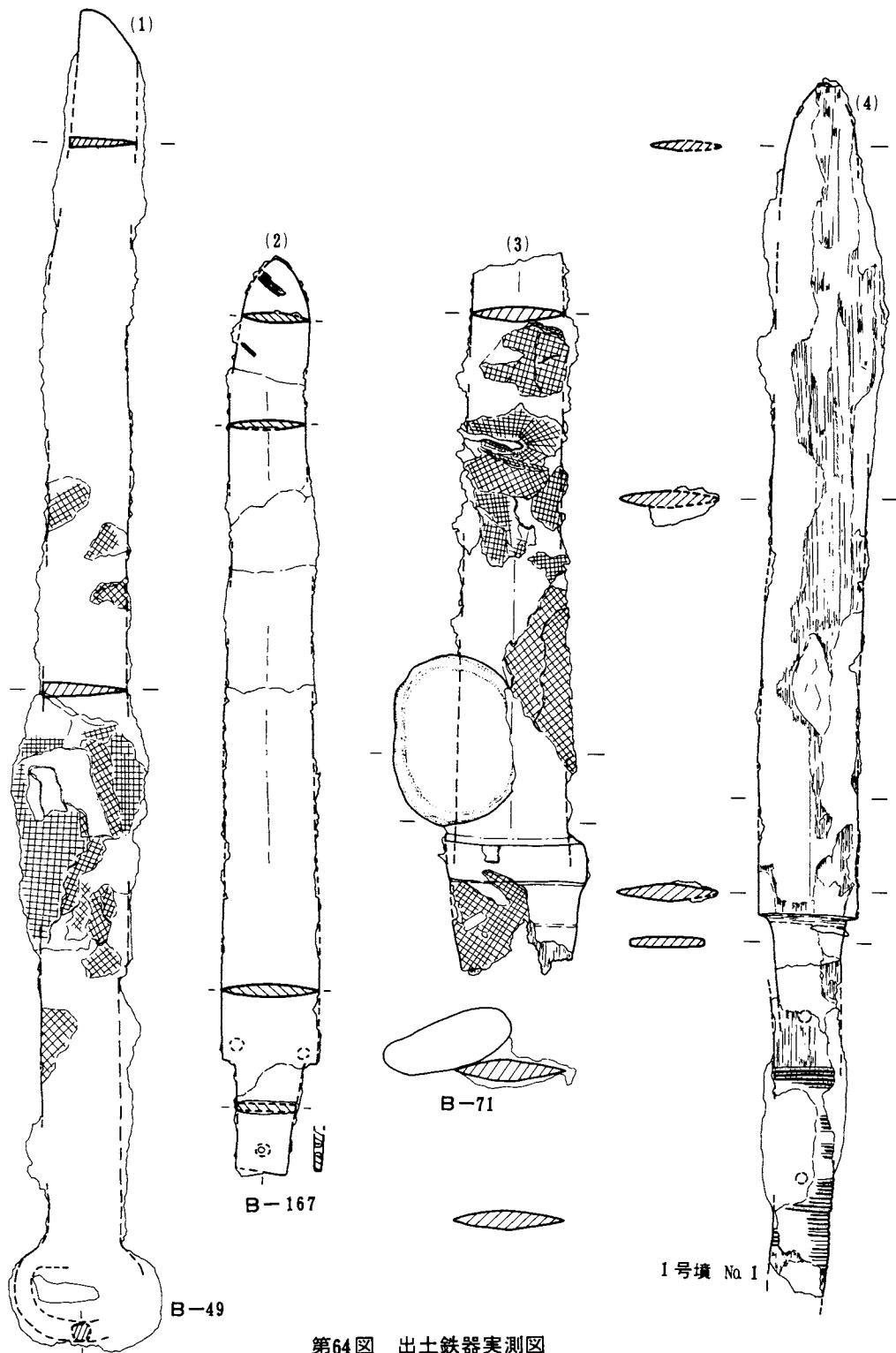
第61図 周溝墓遺構実測図



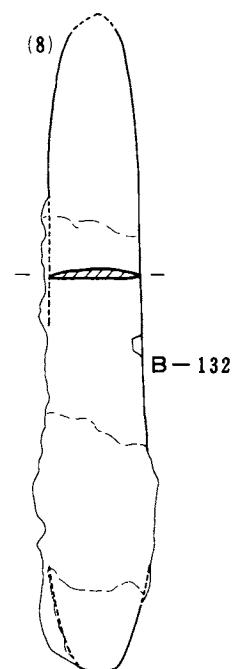
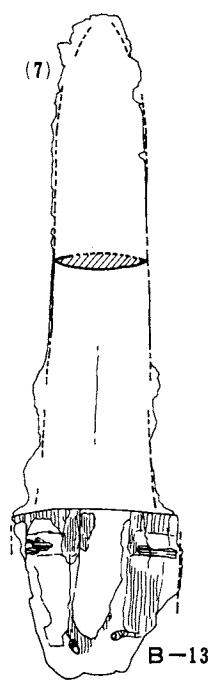
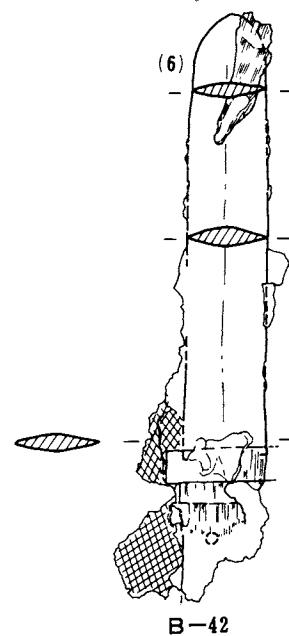
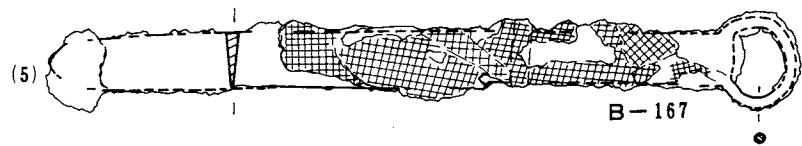
第62図 周溝墓遺構実測図



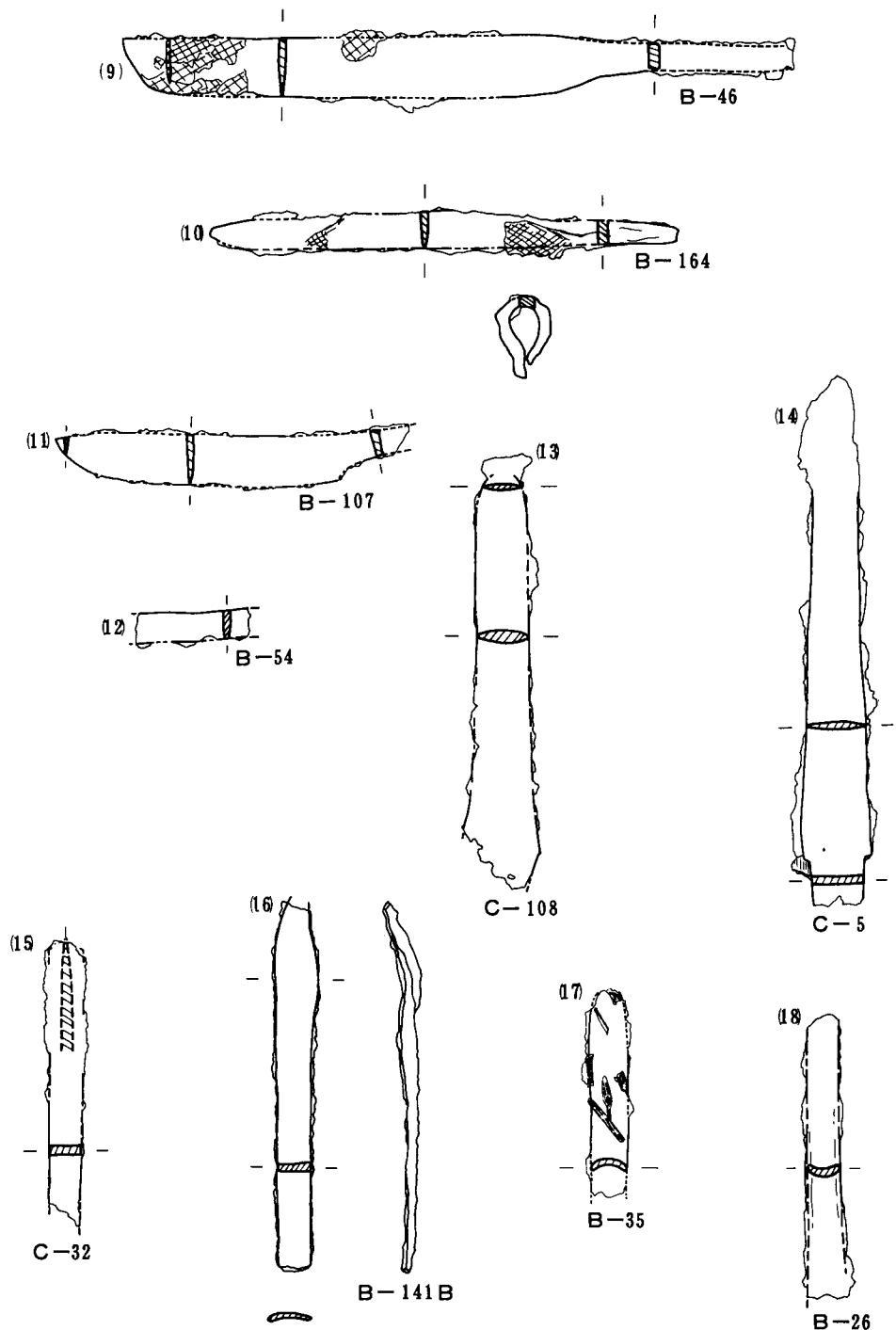
第63図 周溝墓遺構実測図



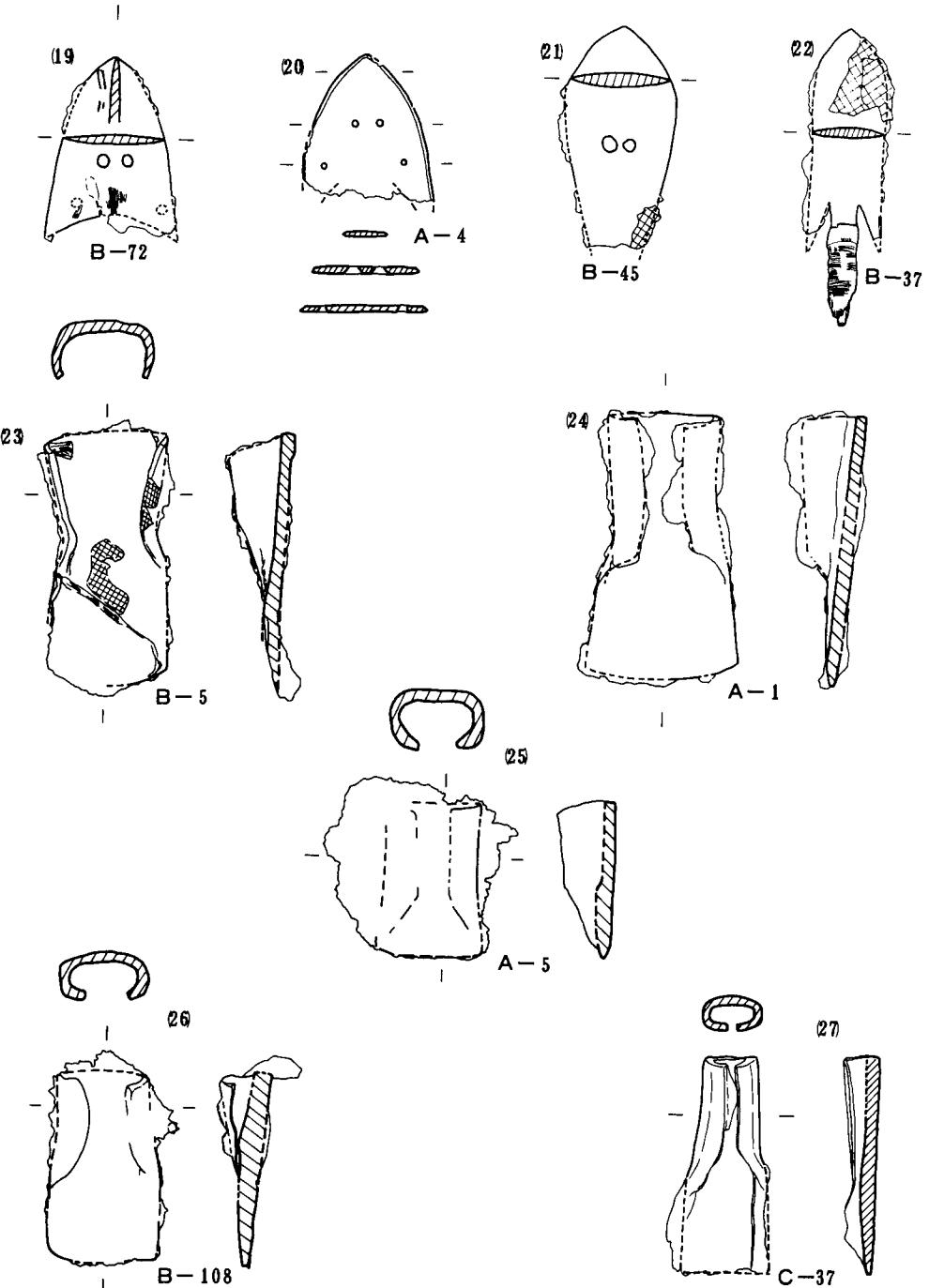
第64図 出土鉄器実測図



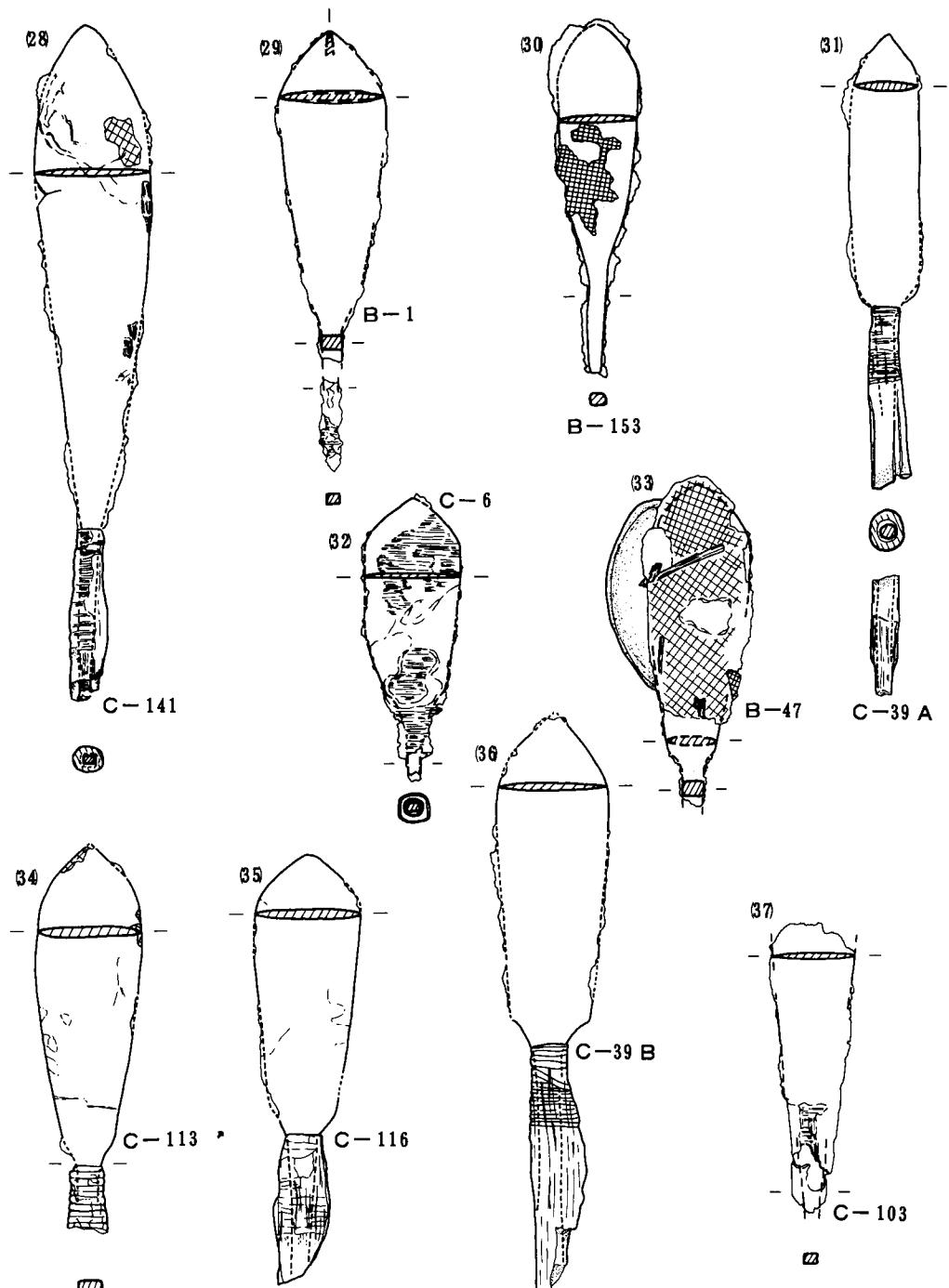
第65図 出土鉄器実測図



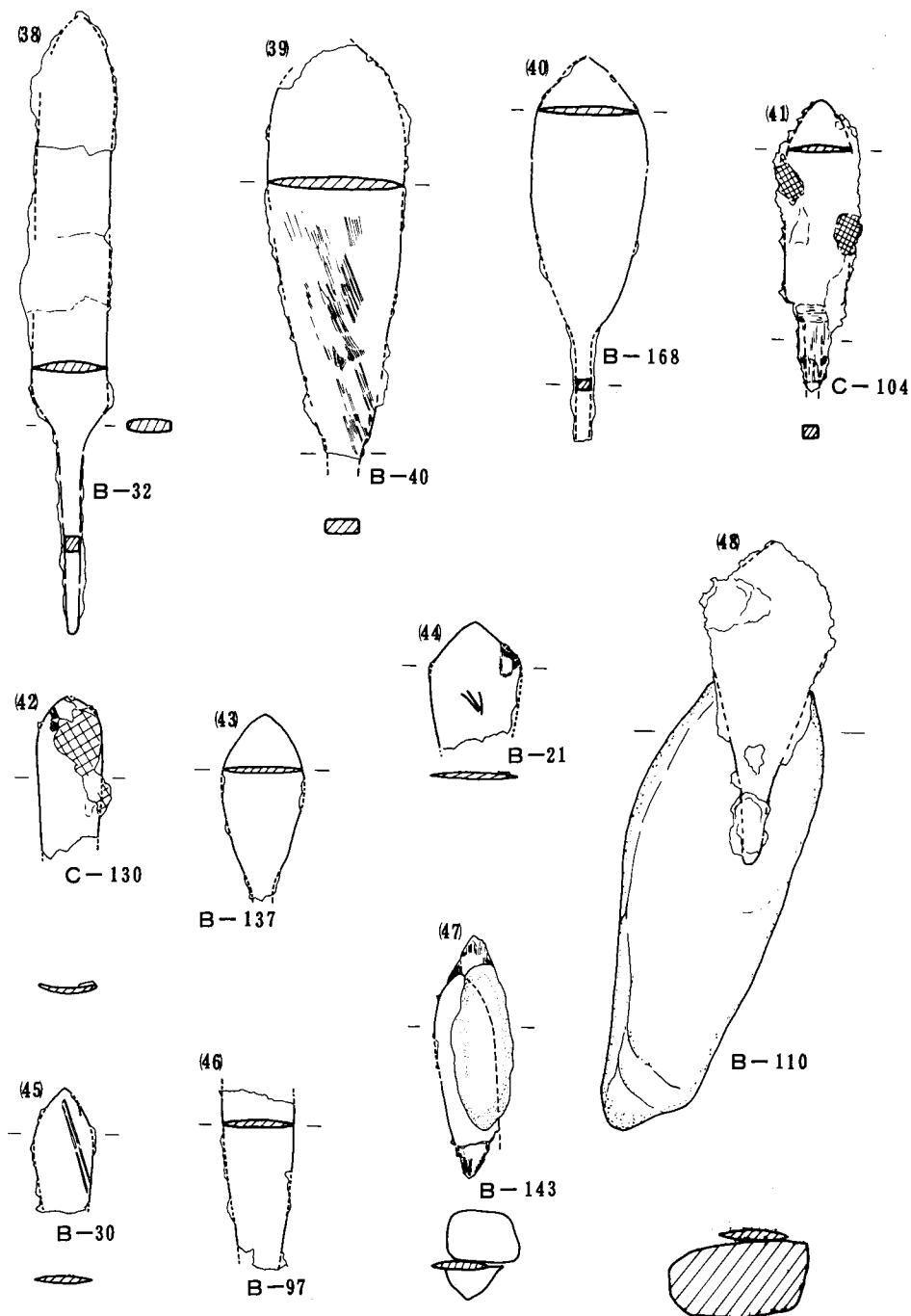
第66図 出土鉄器実測図



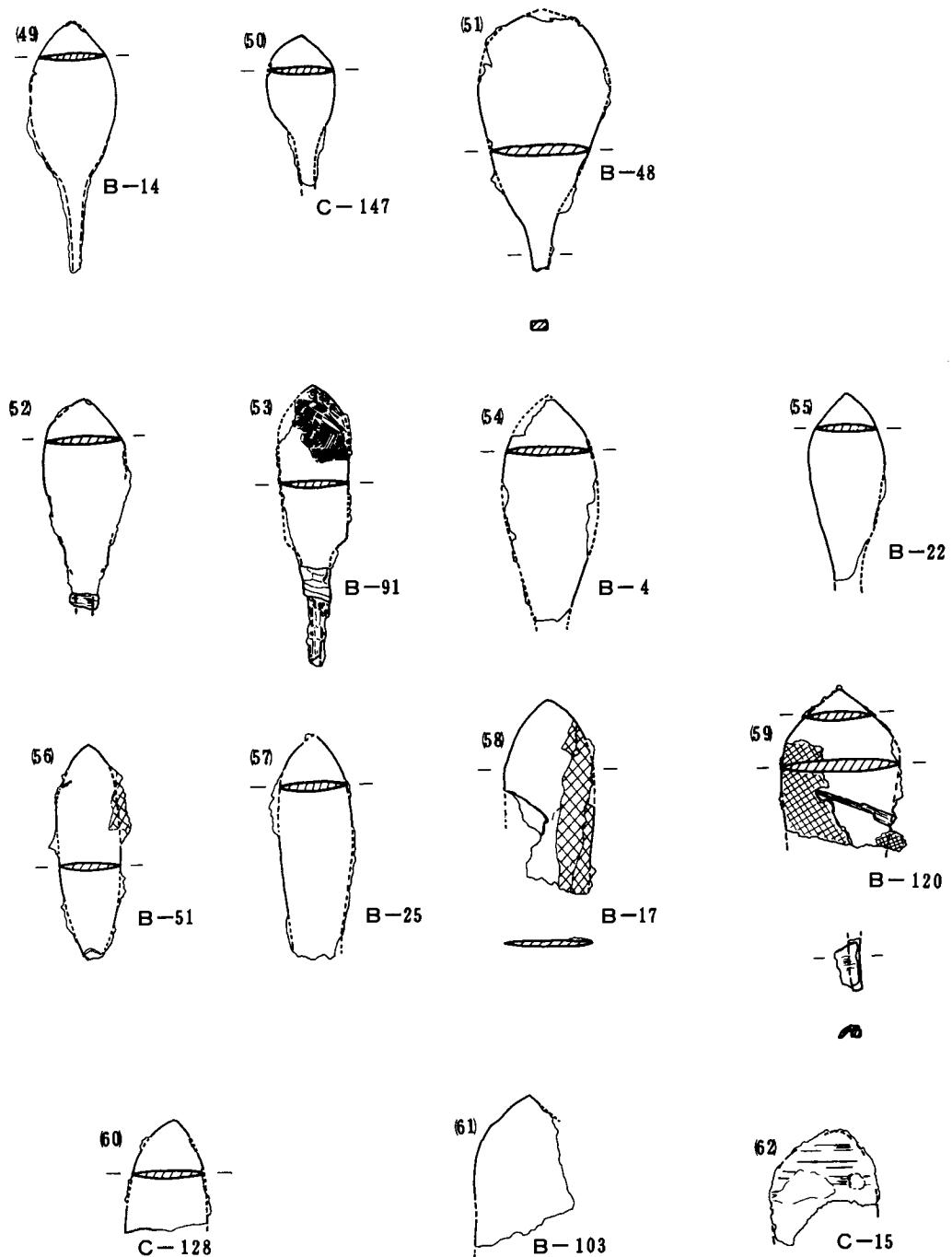
第67図 出土鉄器実測図



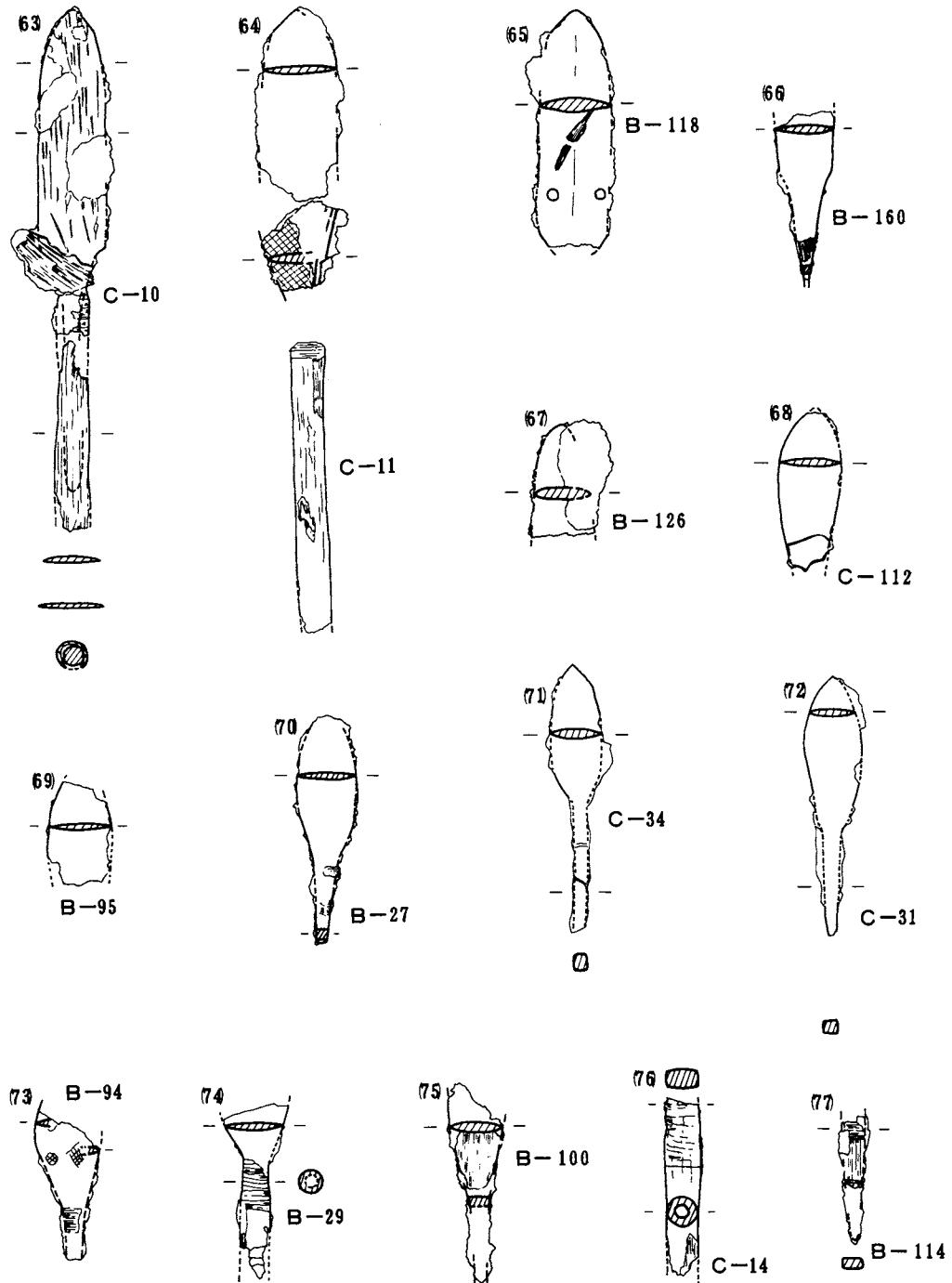
第68図 出土鉄器実測図



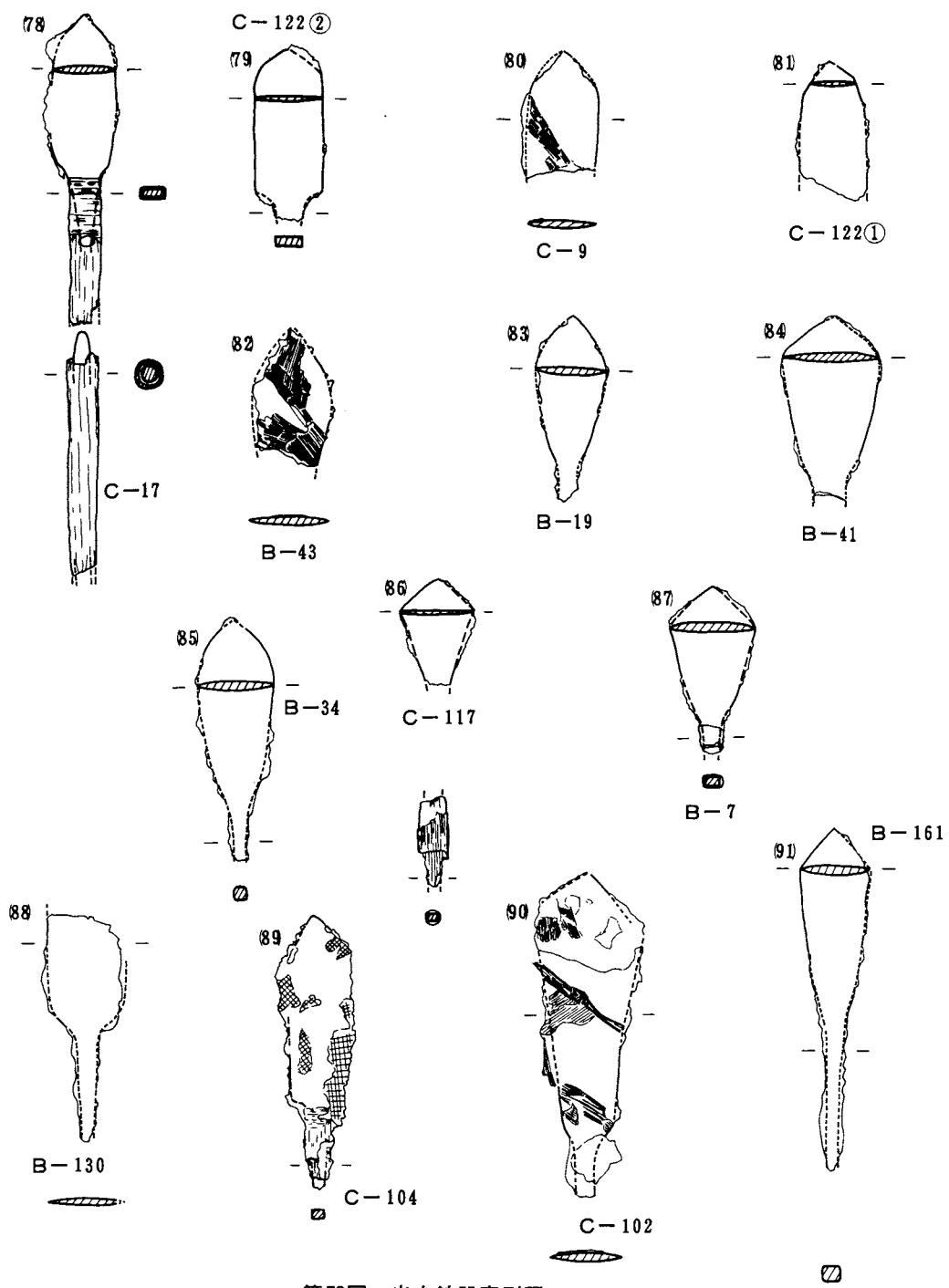
第69図 出土鉄器実測図



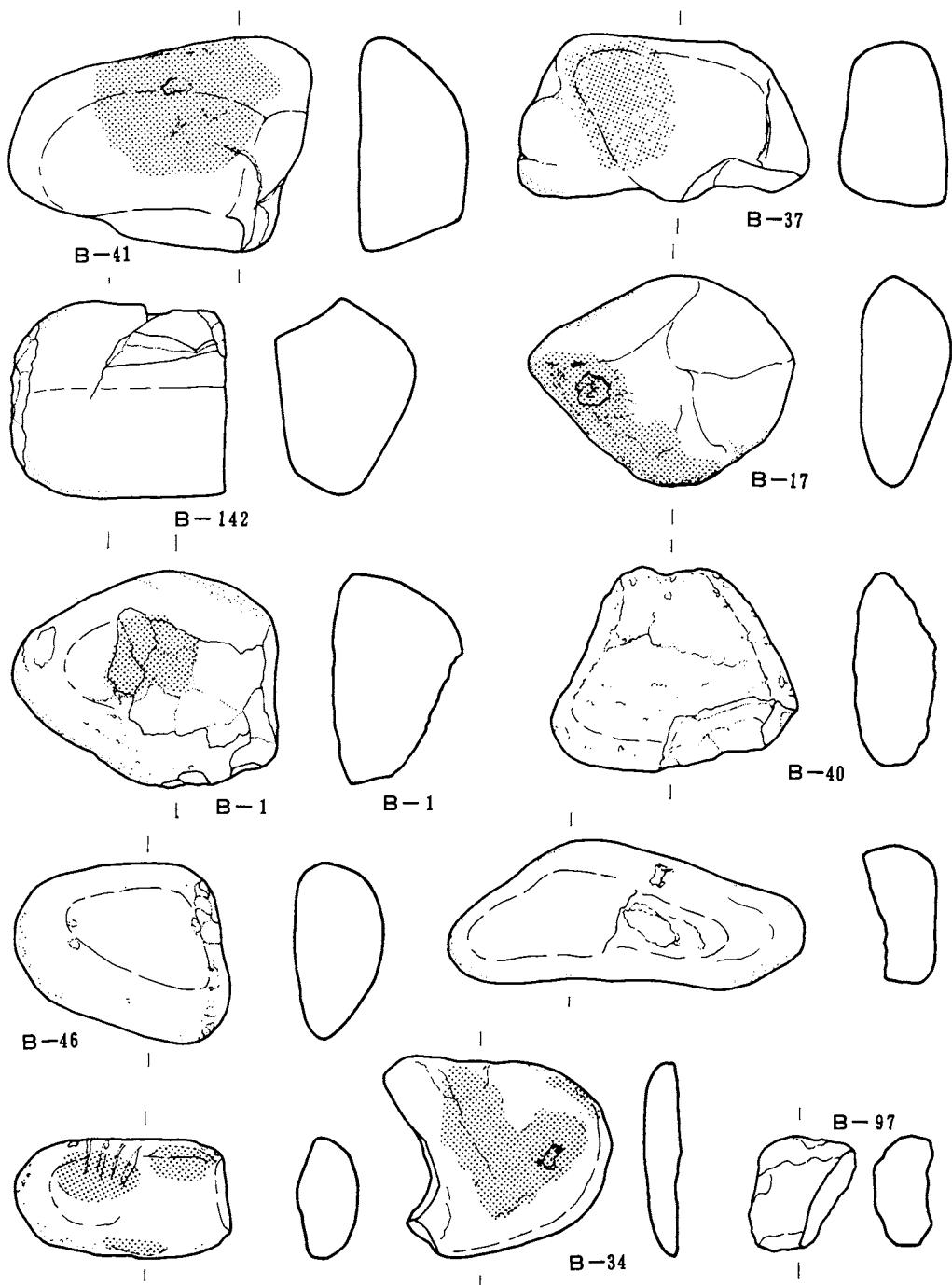
第70図 出土鉄器実測図



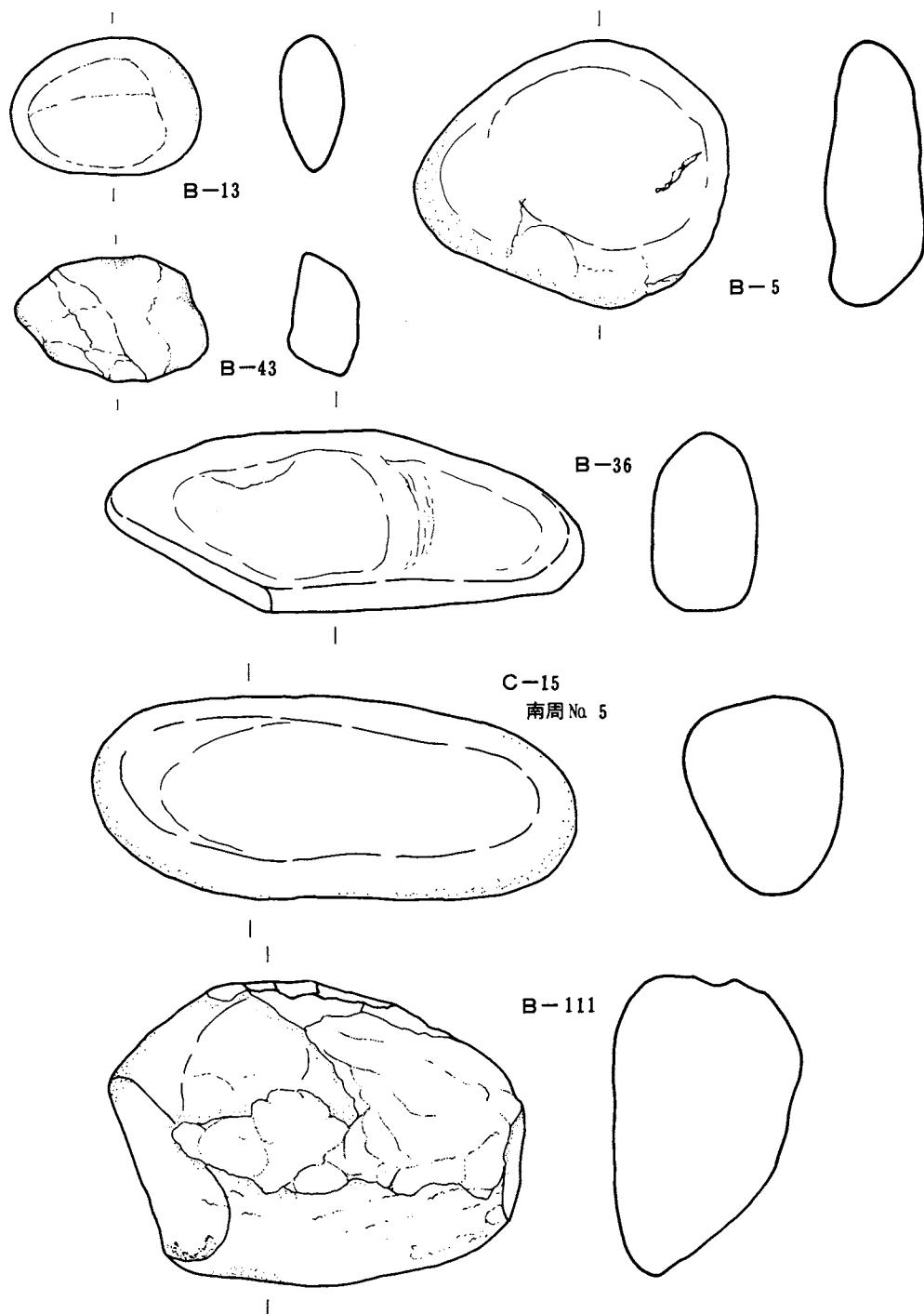
第71図 出土鉄器実測図



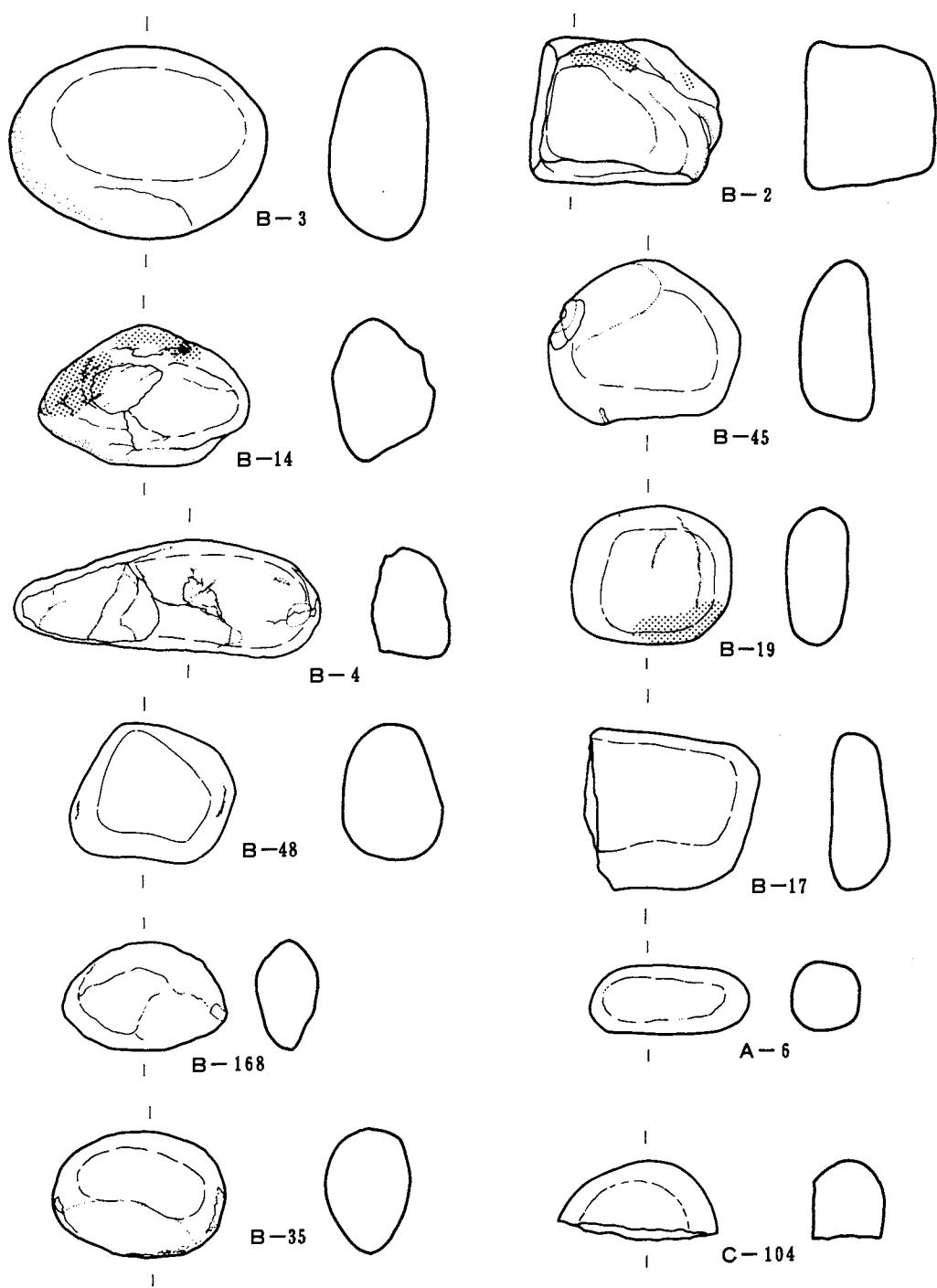
第72図 出土鉄器実測図



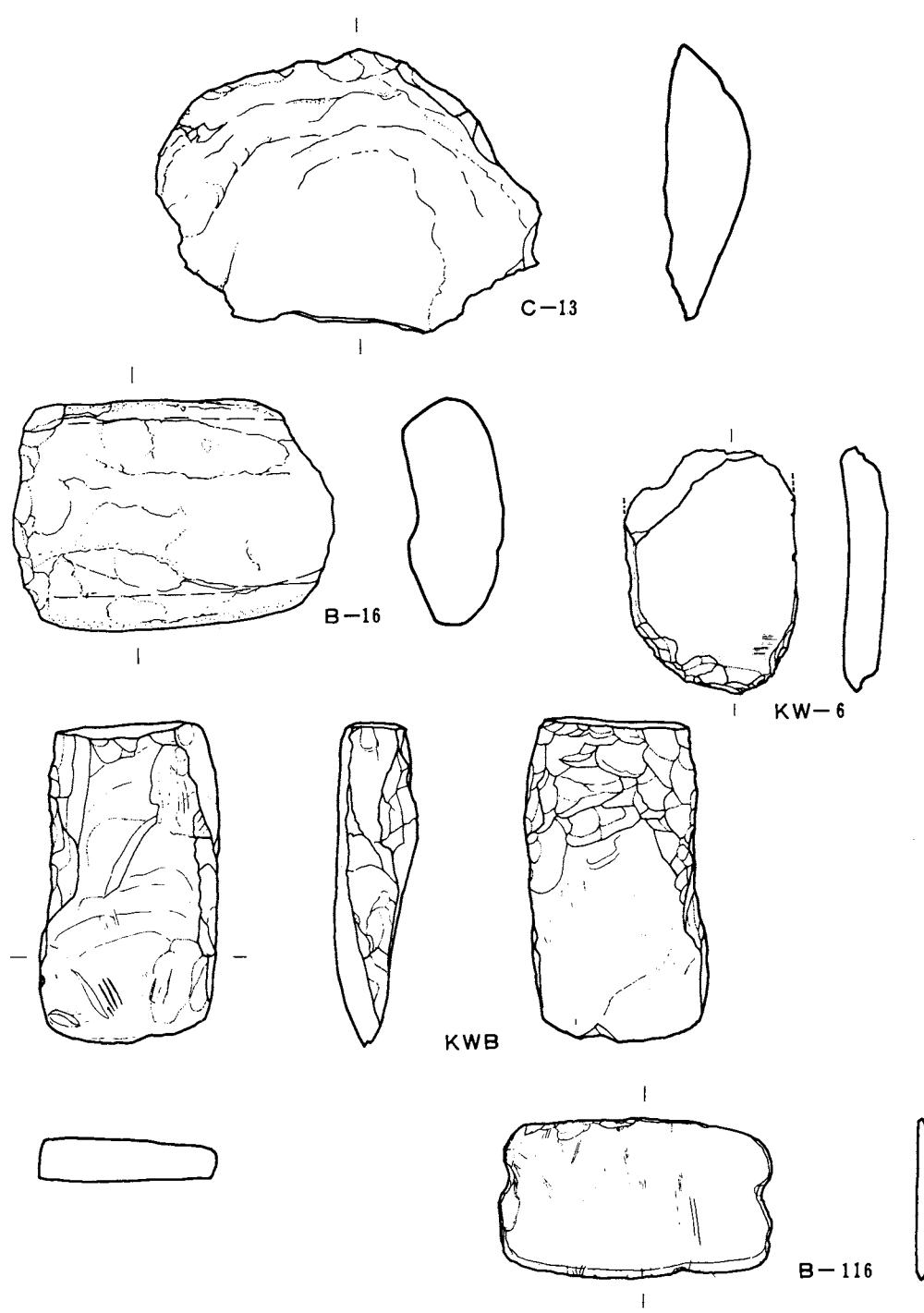
第73図 出土礫実測図



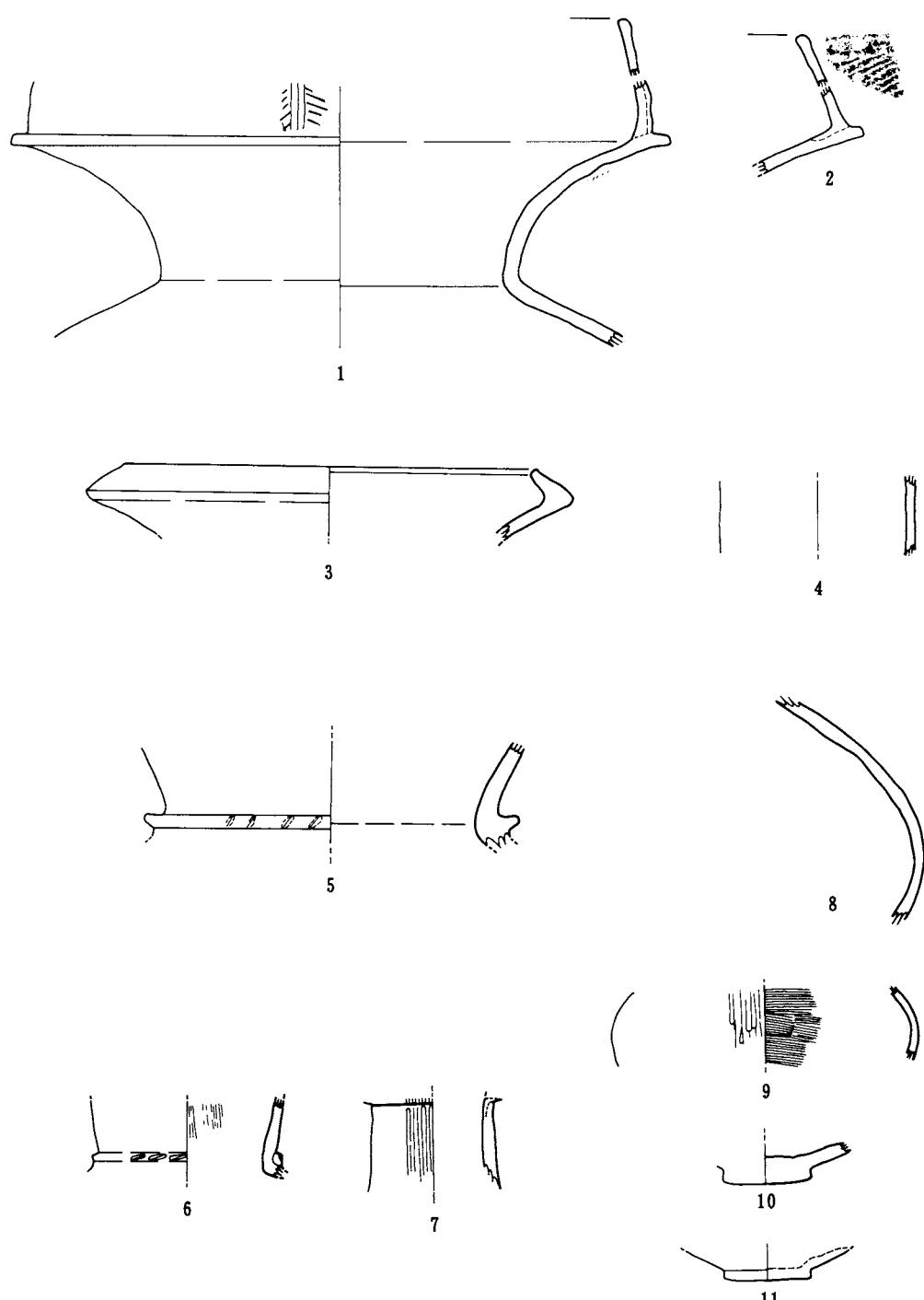
第74図 出土碟実測図



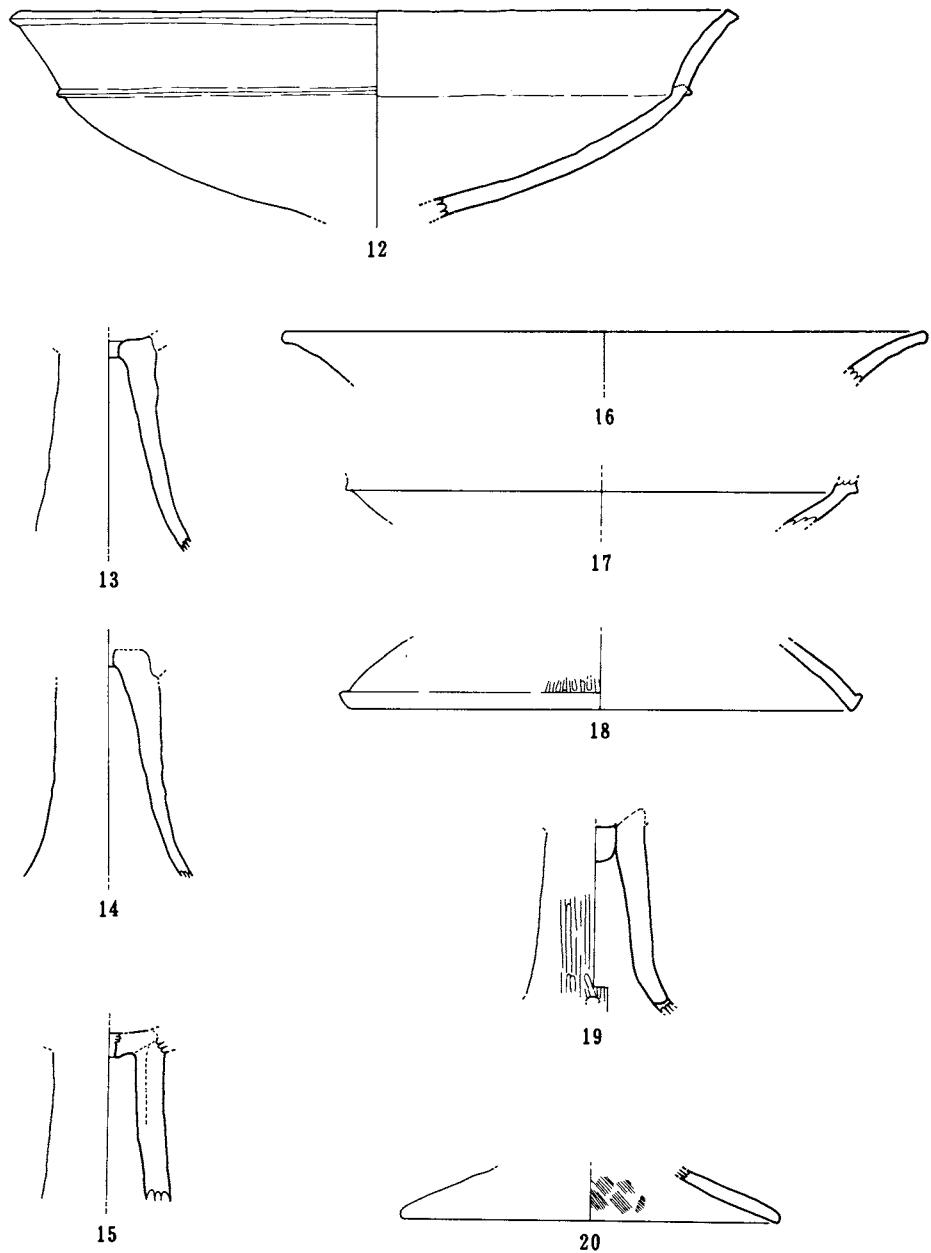
第75図 出土砾実測図



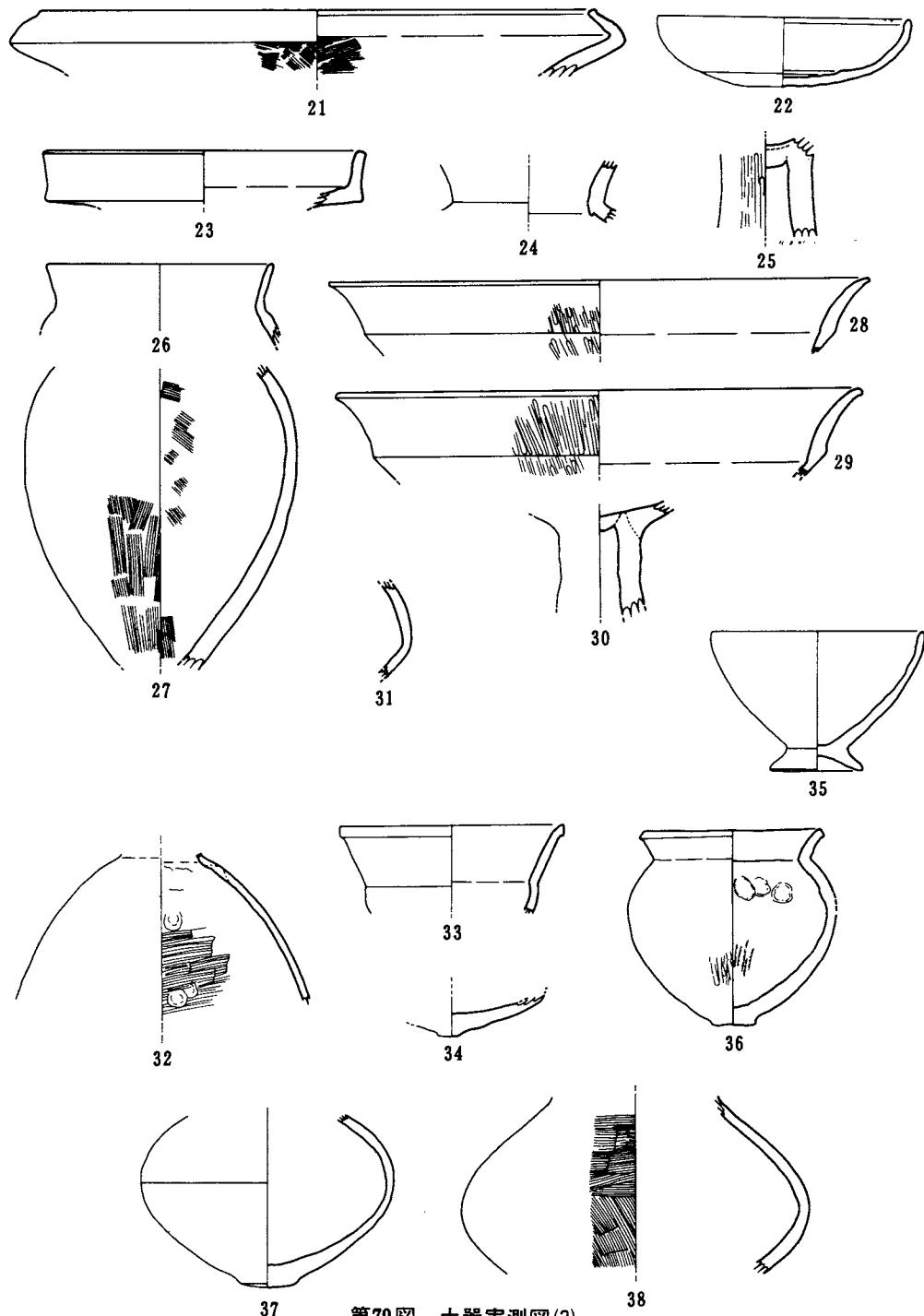
第76図 出土石器実測図



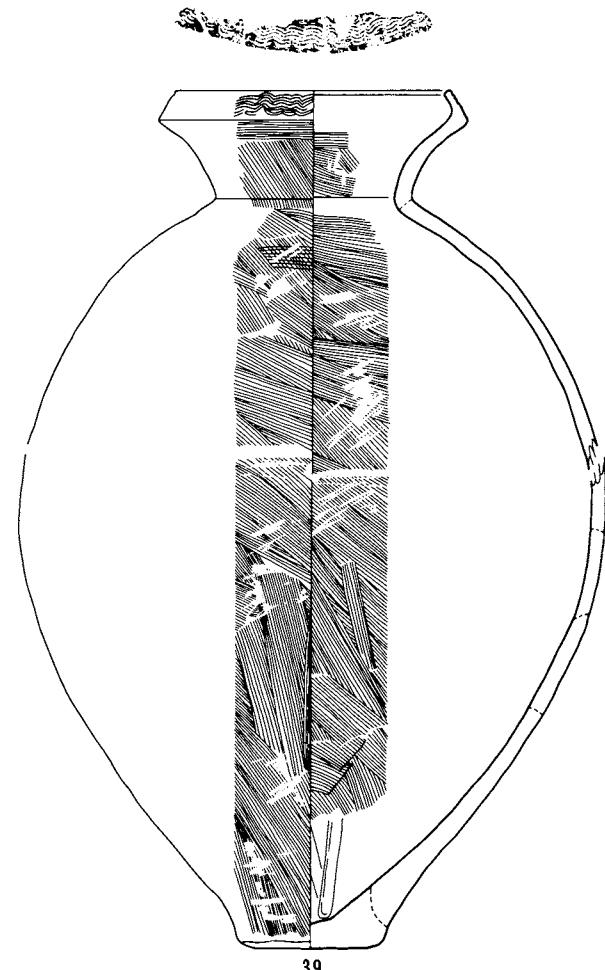
第77図 土器実測図(1)



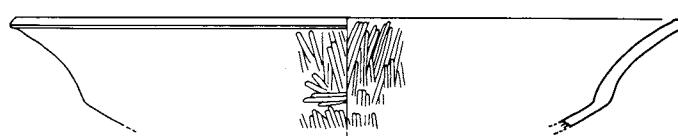
第78図 土器実測図(2)



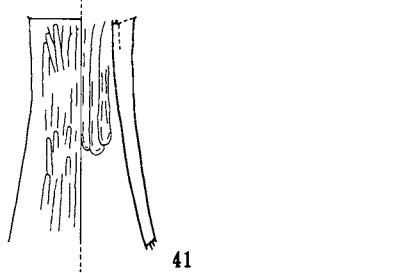
第79図 土器実測図(3)



39

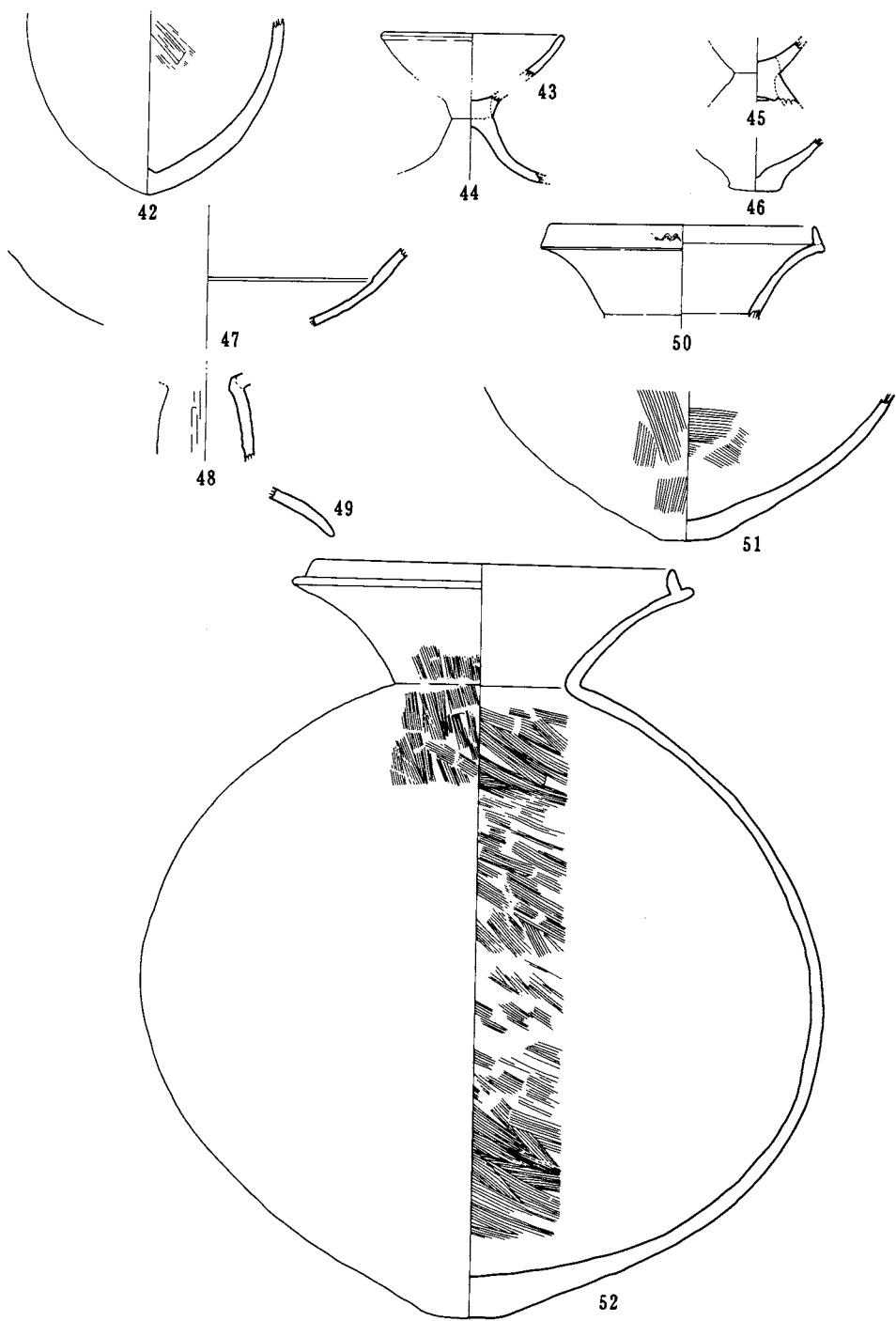


40

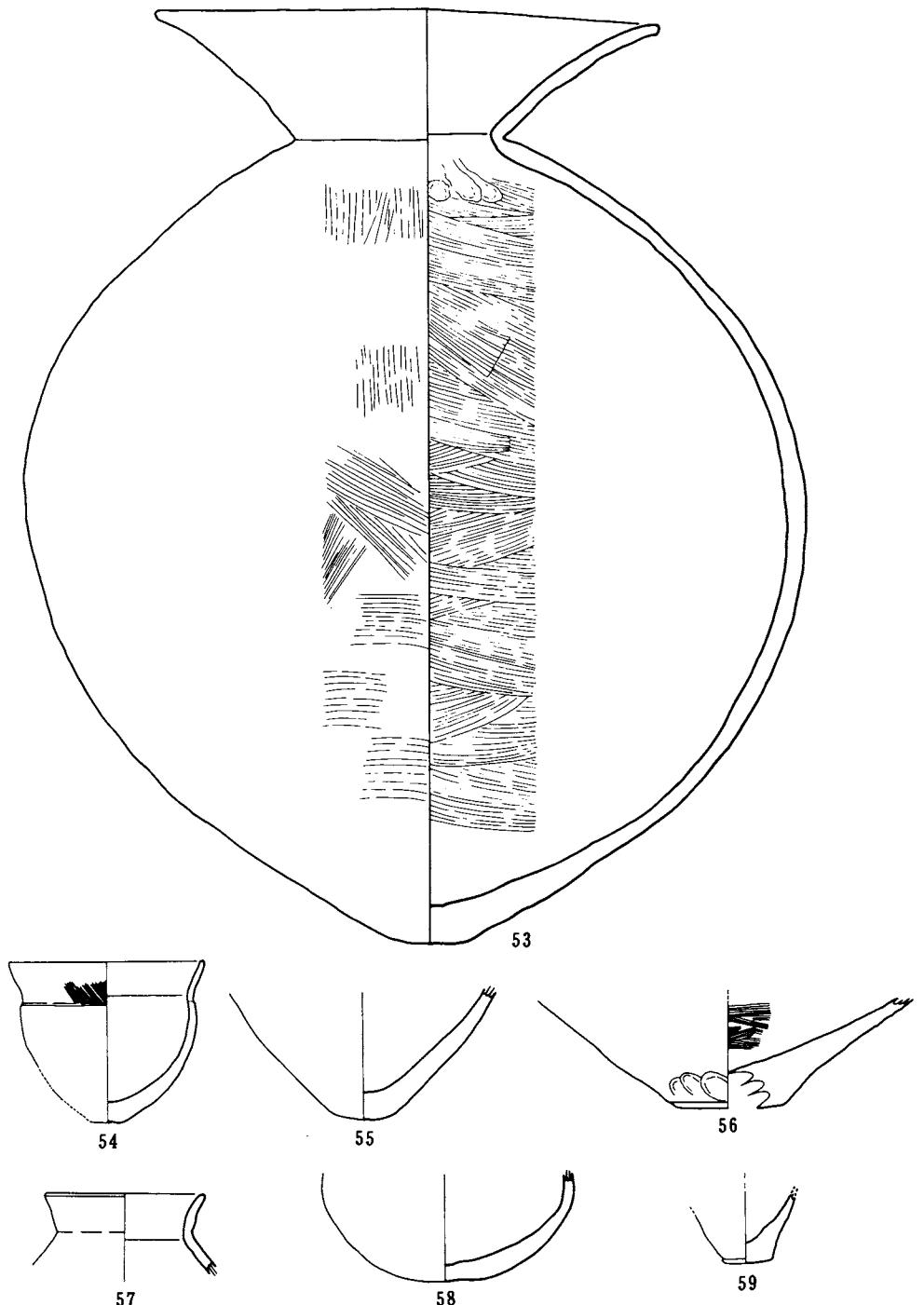


41

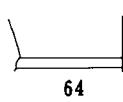
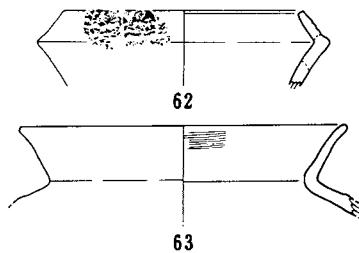
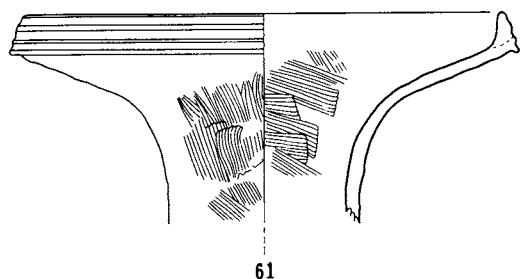
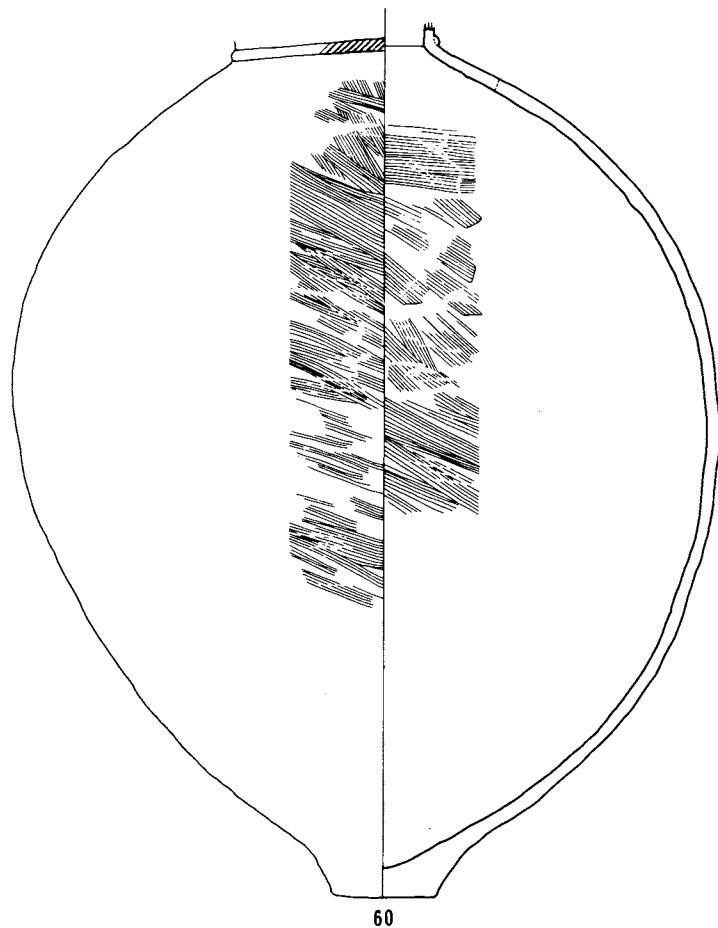
第80図 土器実測図(4)



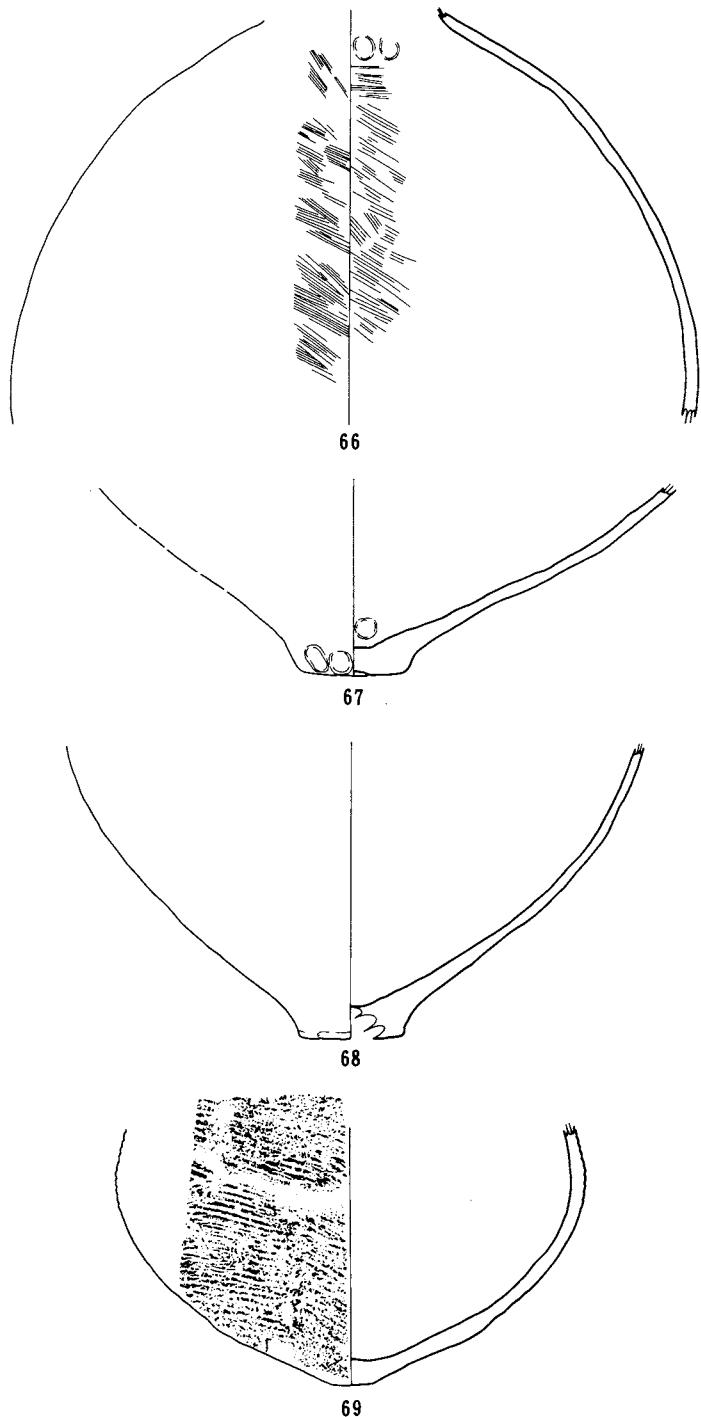
第81図 土器実測図(5)



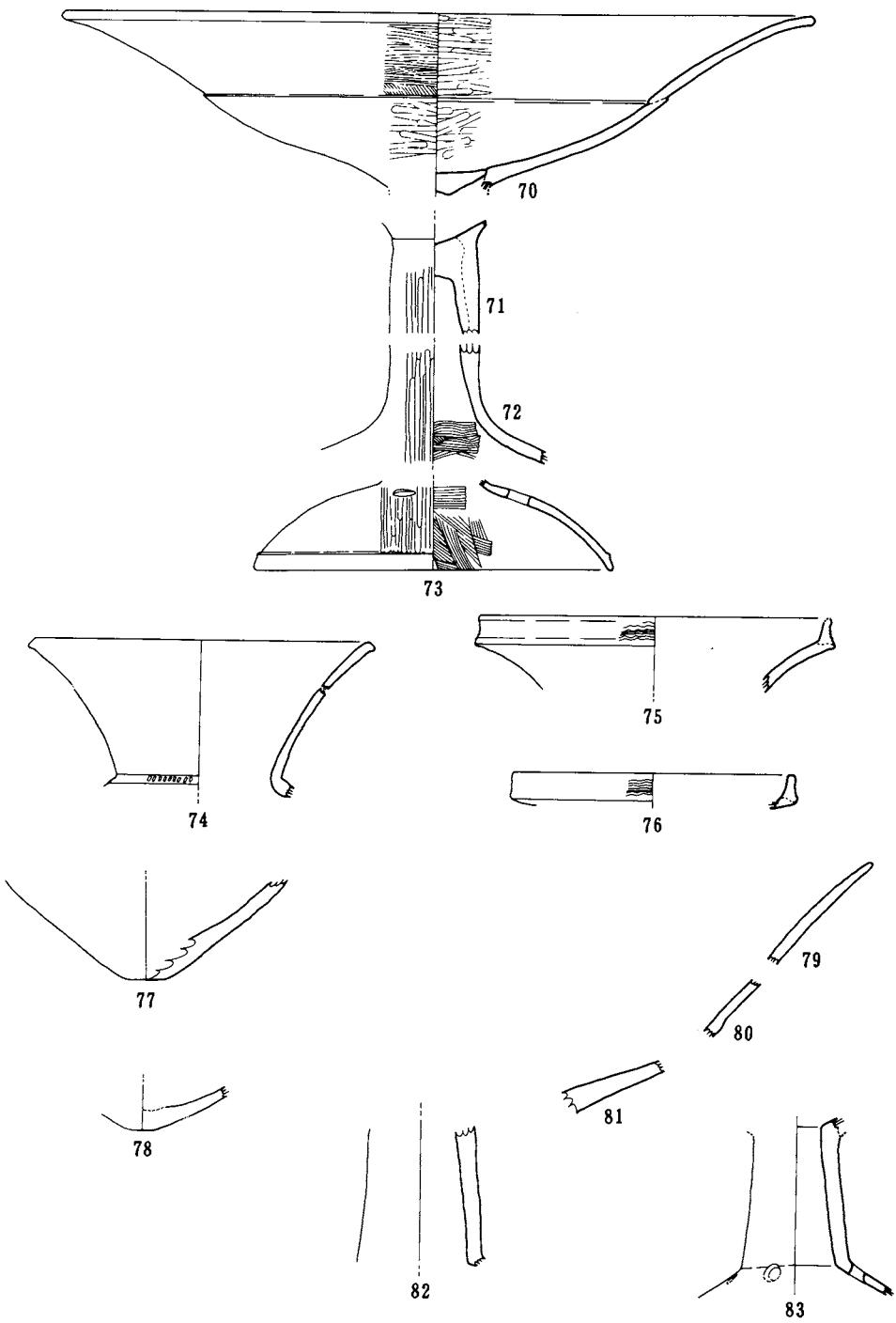
第82図 土器実測図(6)



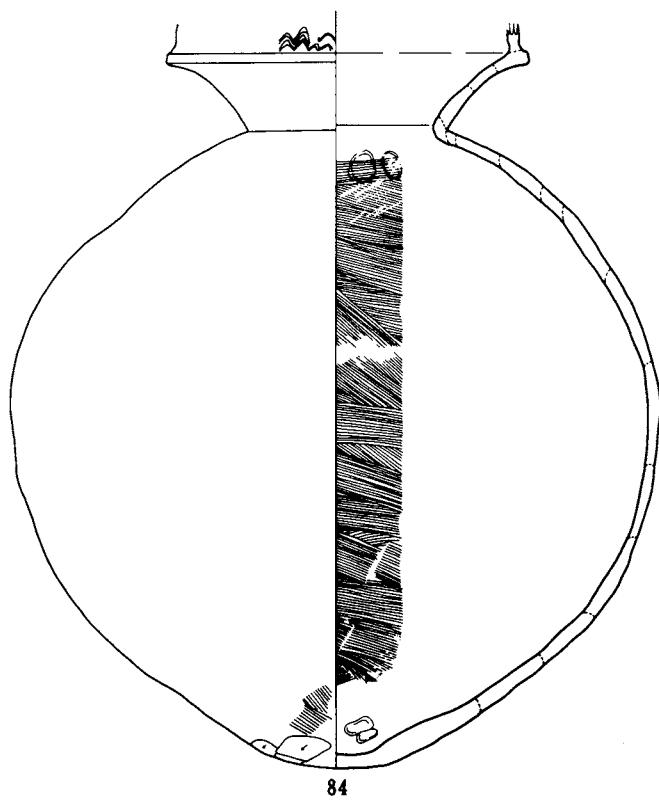
第83図 土器実測図(7)



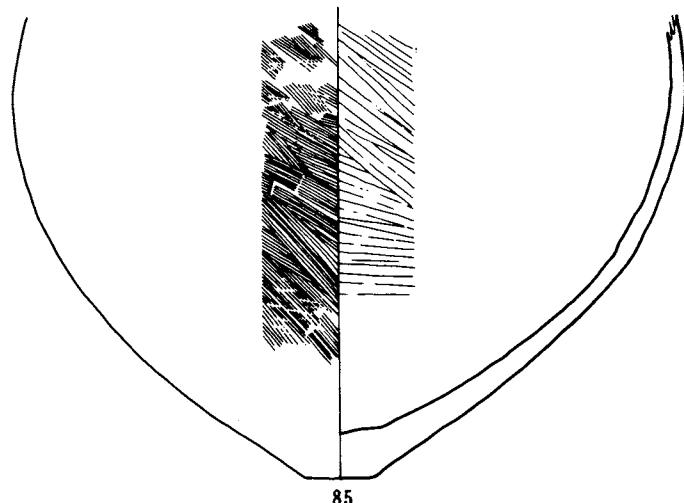
第84図 土器実測図(8)



第85図 土器実測図(9)

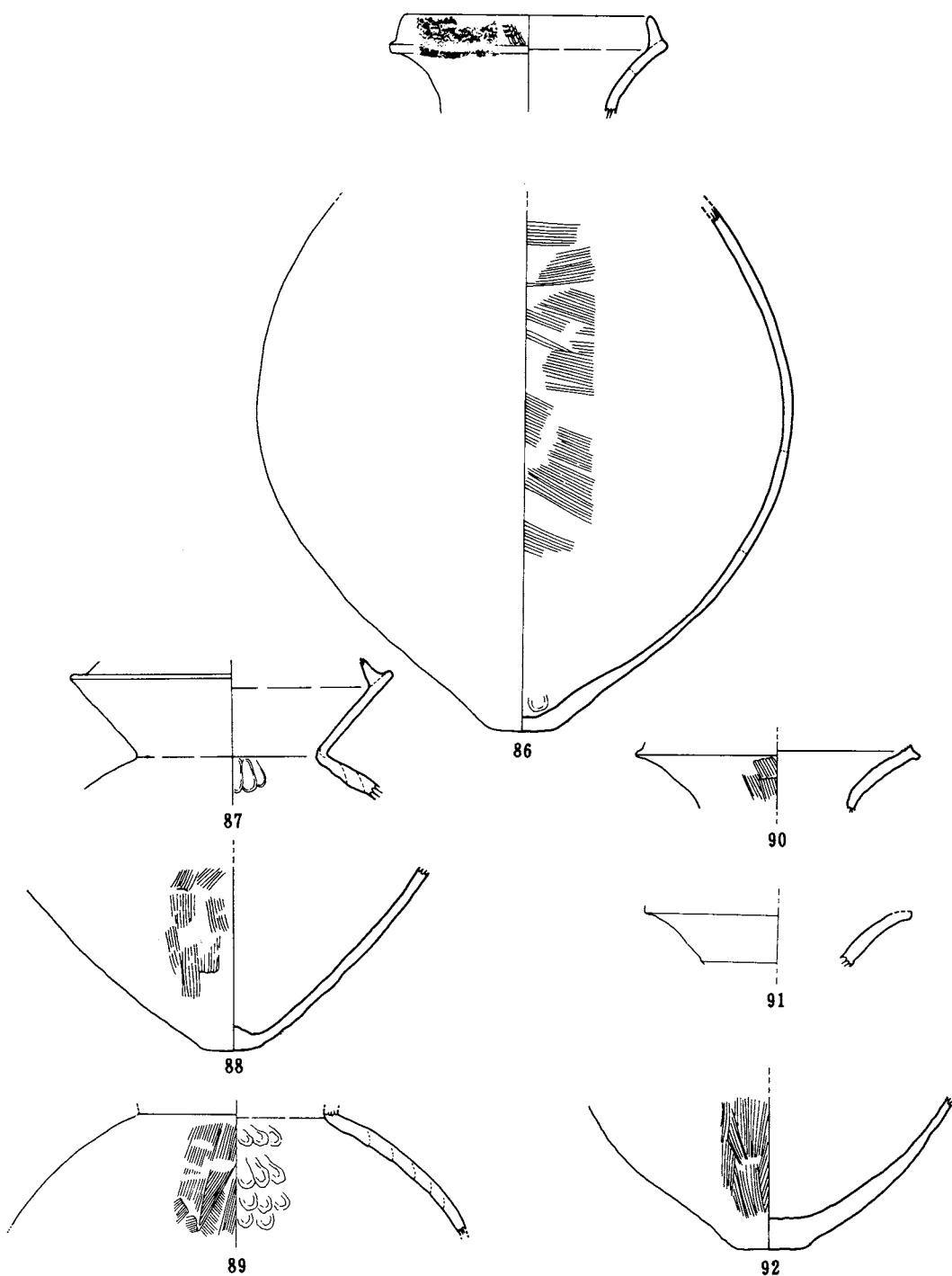


84

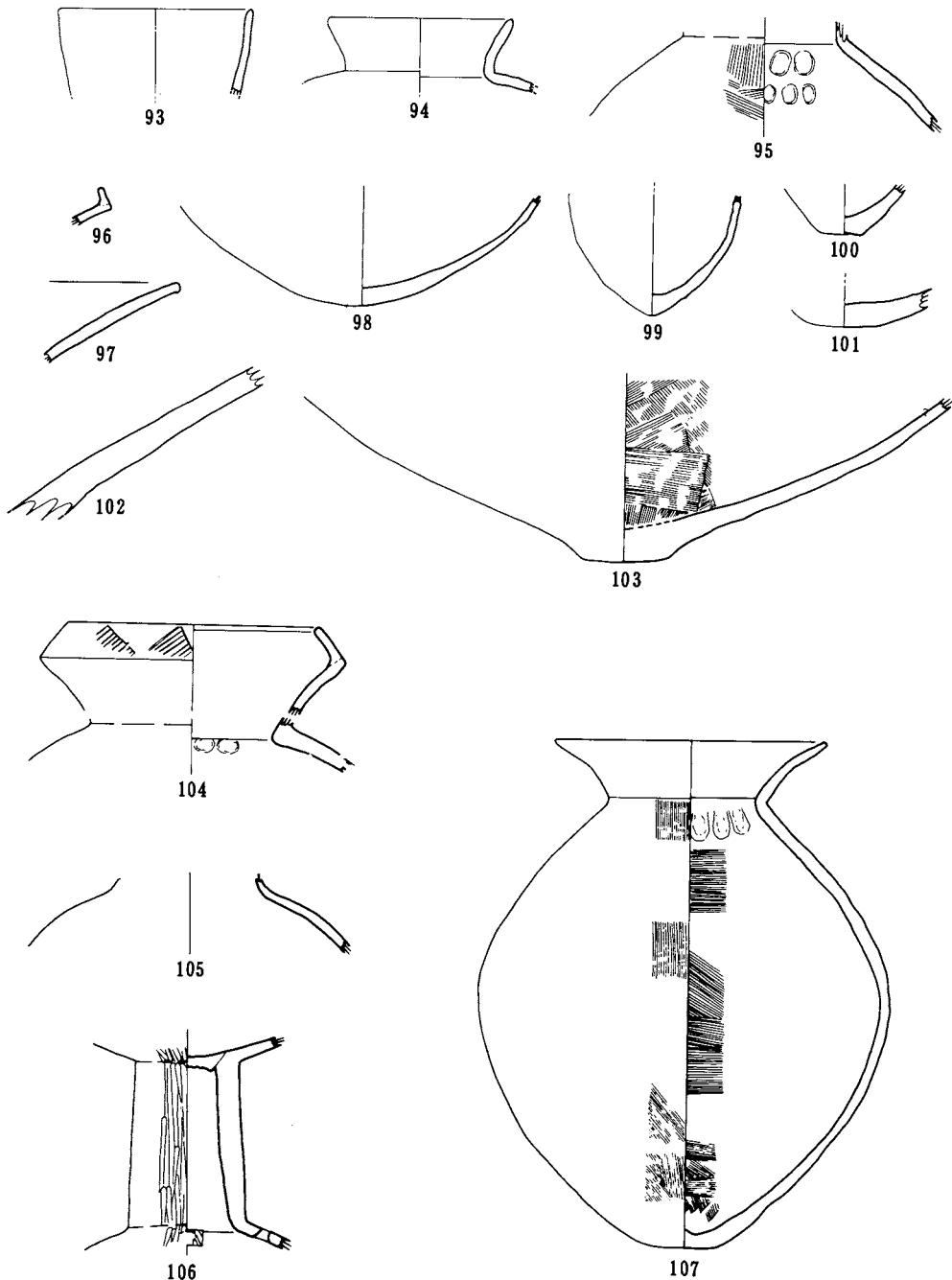


85

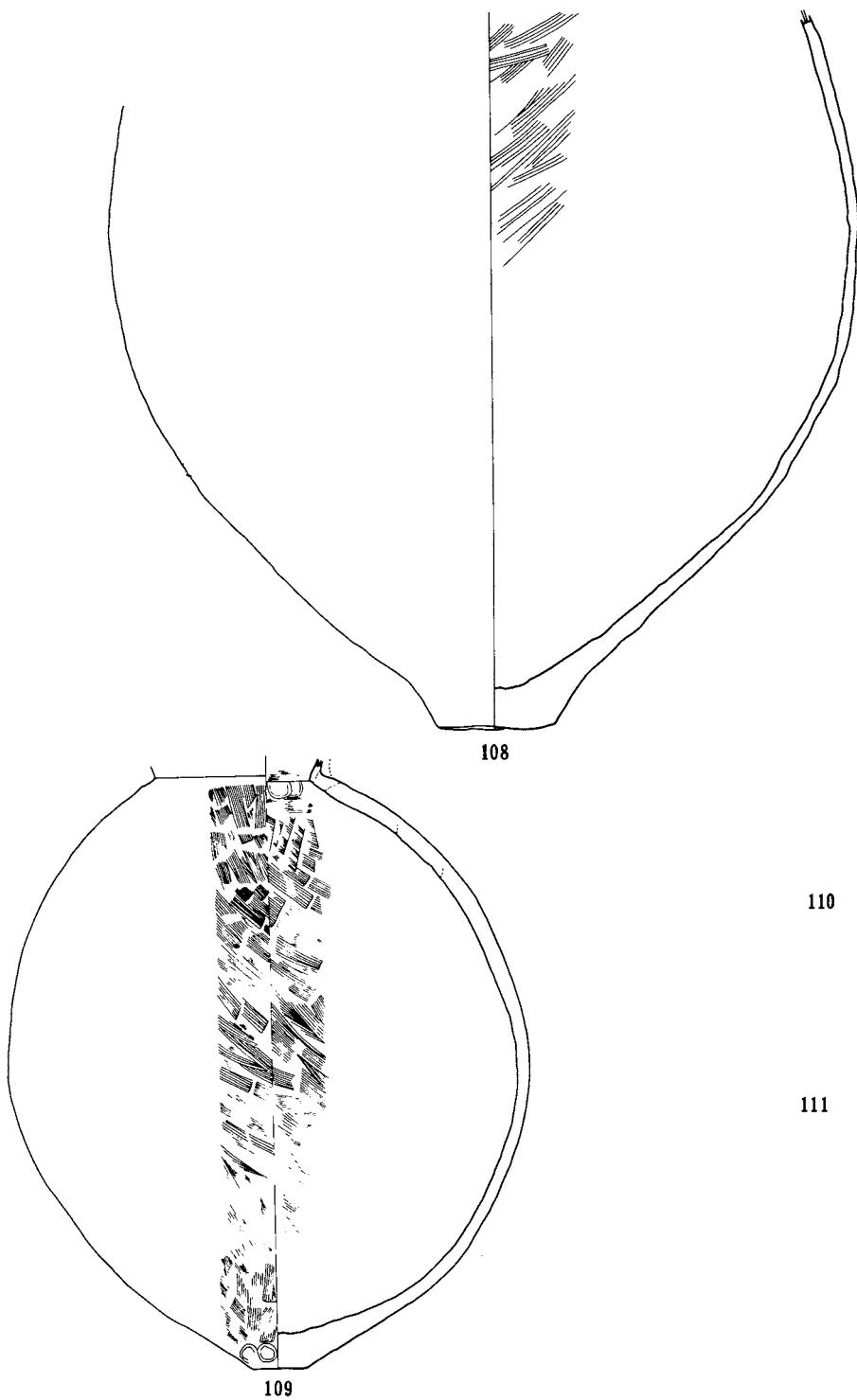
第86図 土器実測図(10)



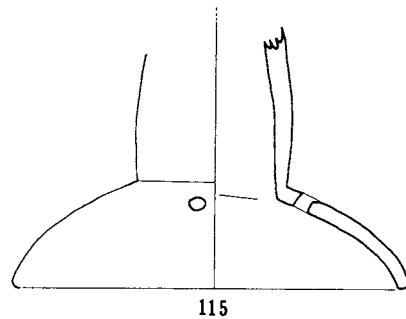
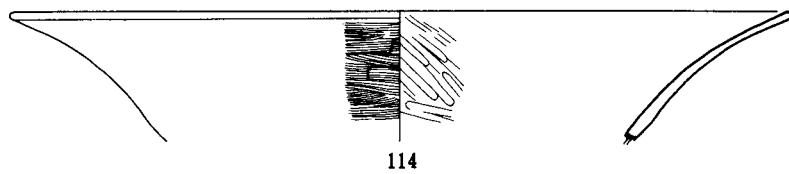
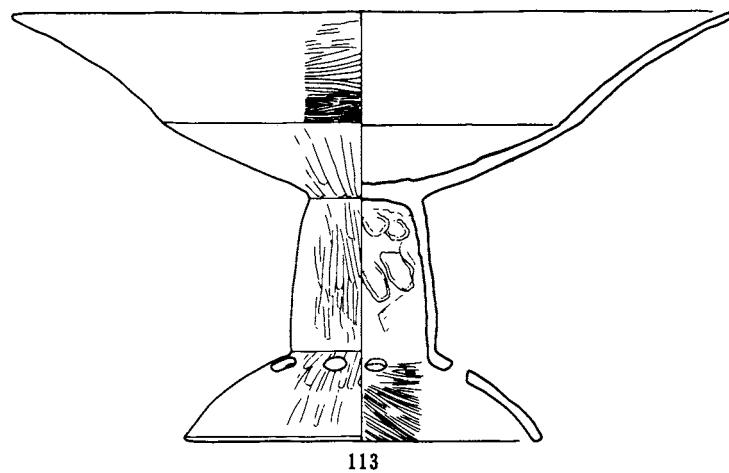
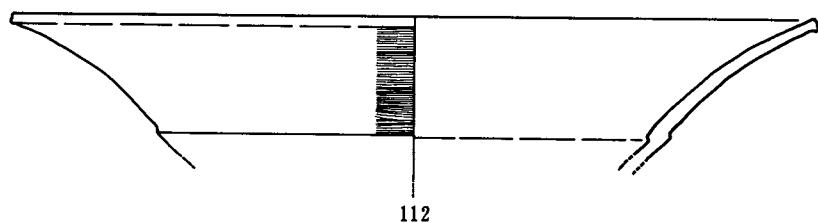
第87図 土器実測図(1)



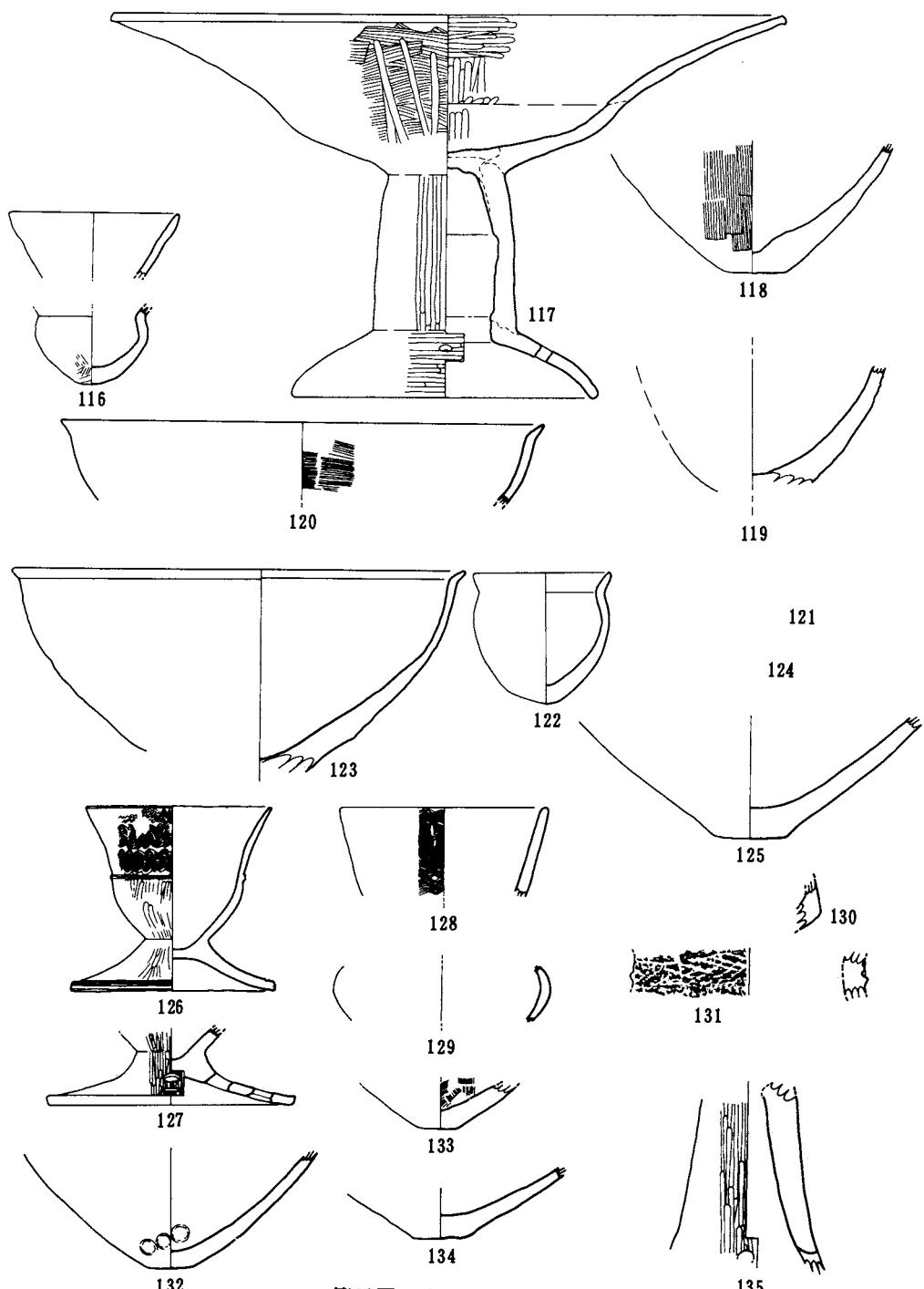
第88図 土器実測図(12)



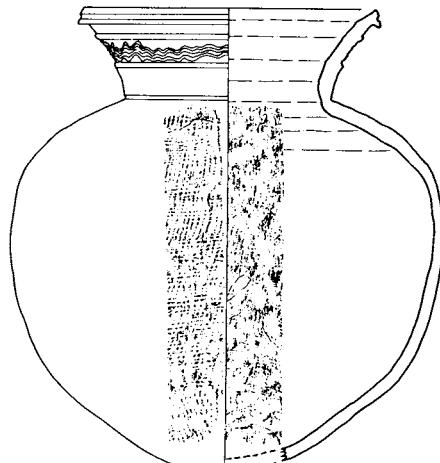
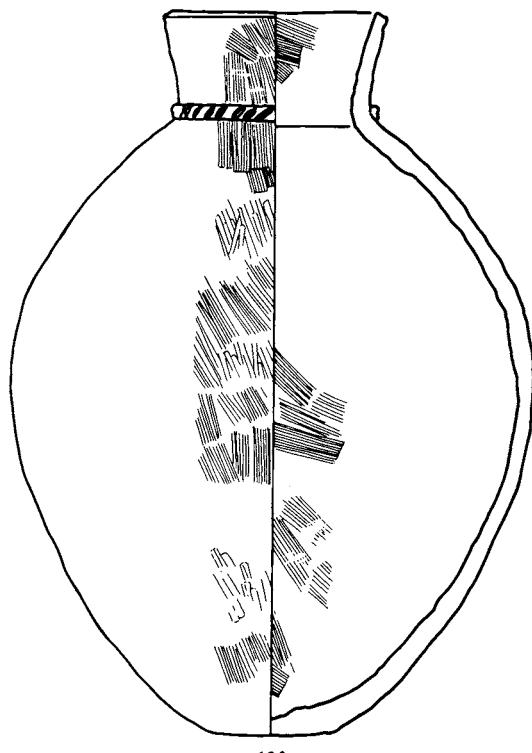
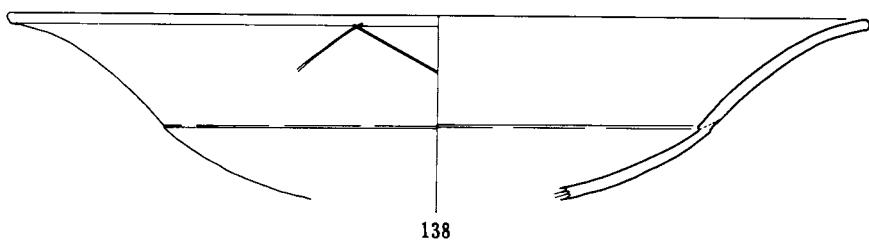
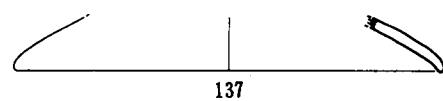
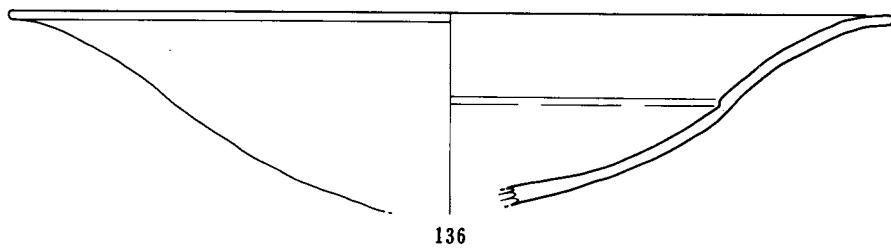
第89図 土器実測図(13)



第90図 土器実測図(4)

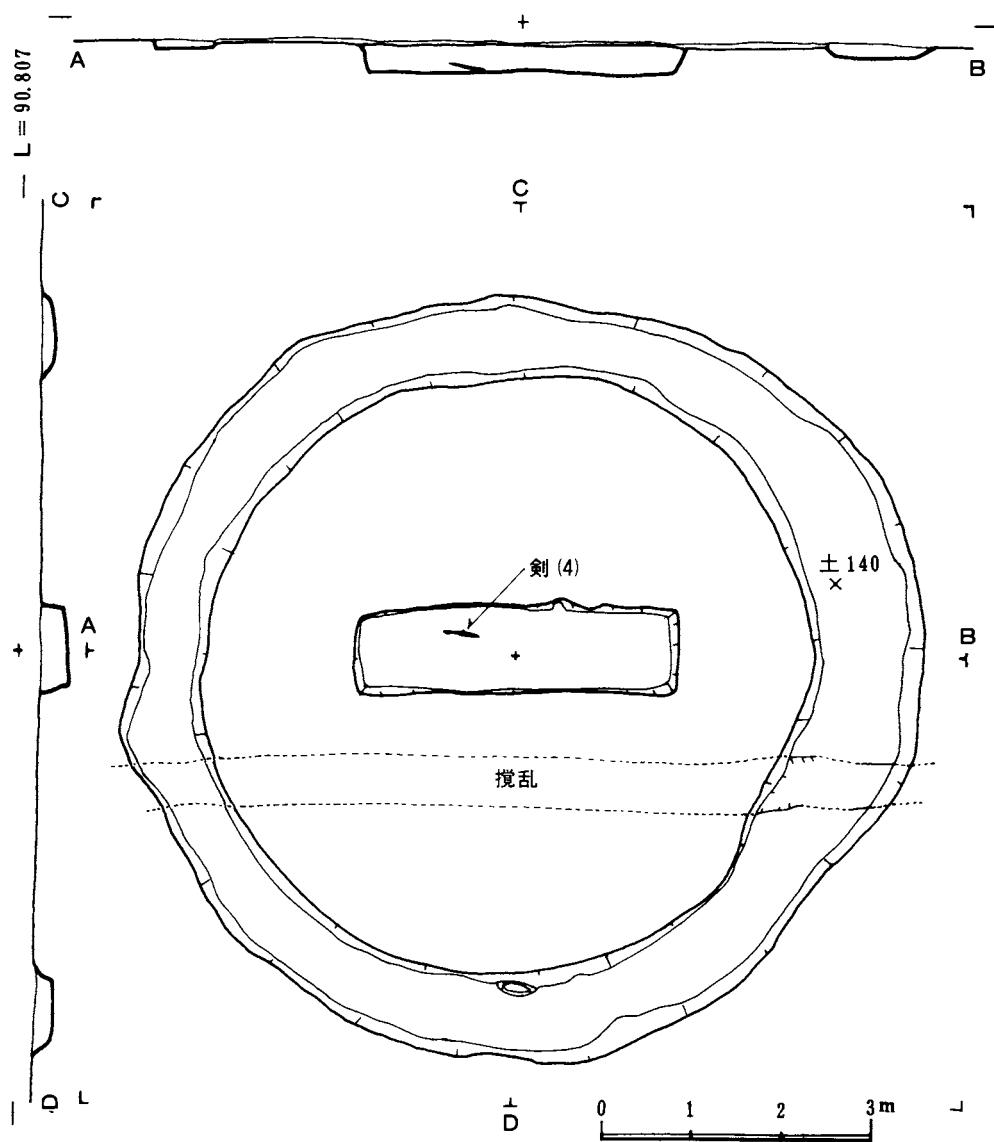


第91図 土器実測図(15)



0 5 10-

第92図 土器実測図16



第93図 川床1号墳 遺構実測図

図 版





図版 3



図版 4



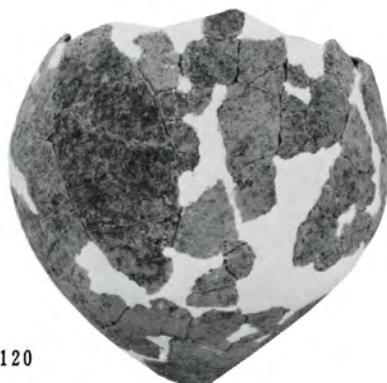
図版 5



C-35



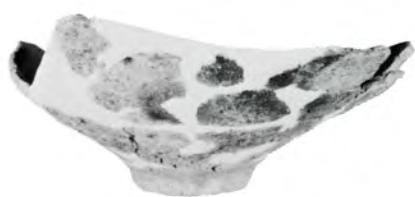
C-116



C-120



C-122
4



C-116
4.5

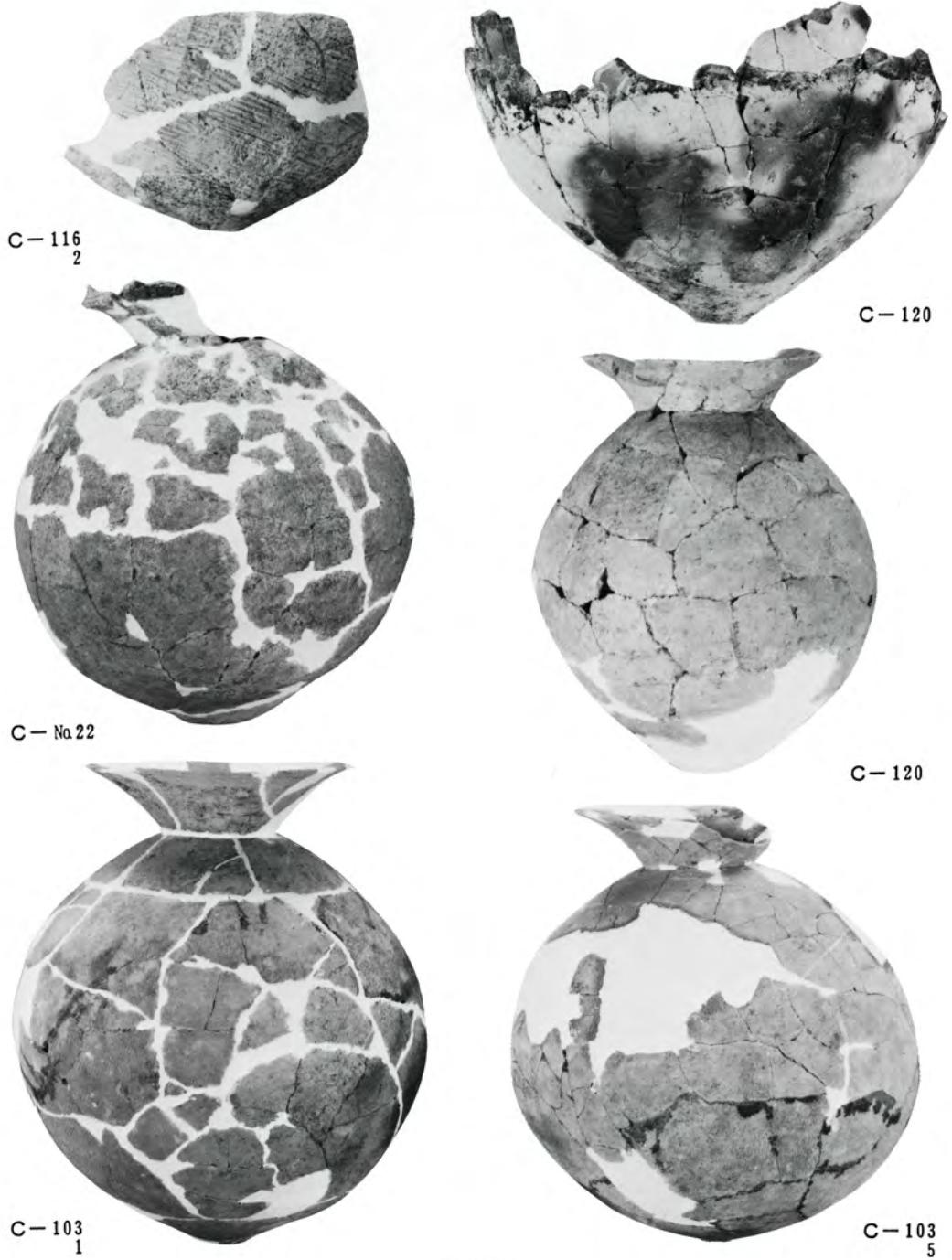


C-127



C-116
6

図版11



図版12



図版13



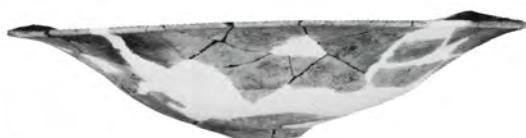
C-116
14



C-15



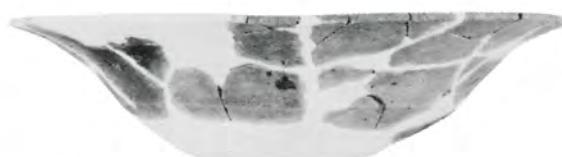
C-15



C-116
8~11



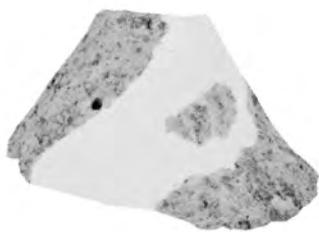
C-Na46



C-15
4



図版14



C - Na 39



B - Na 1

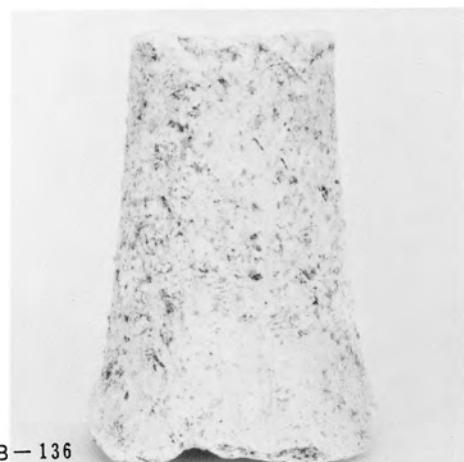


C - 35
3

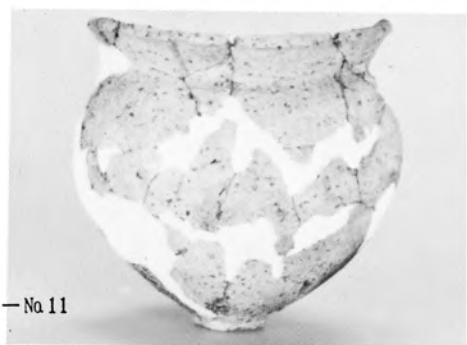


C - 117
10

図版15



図版16

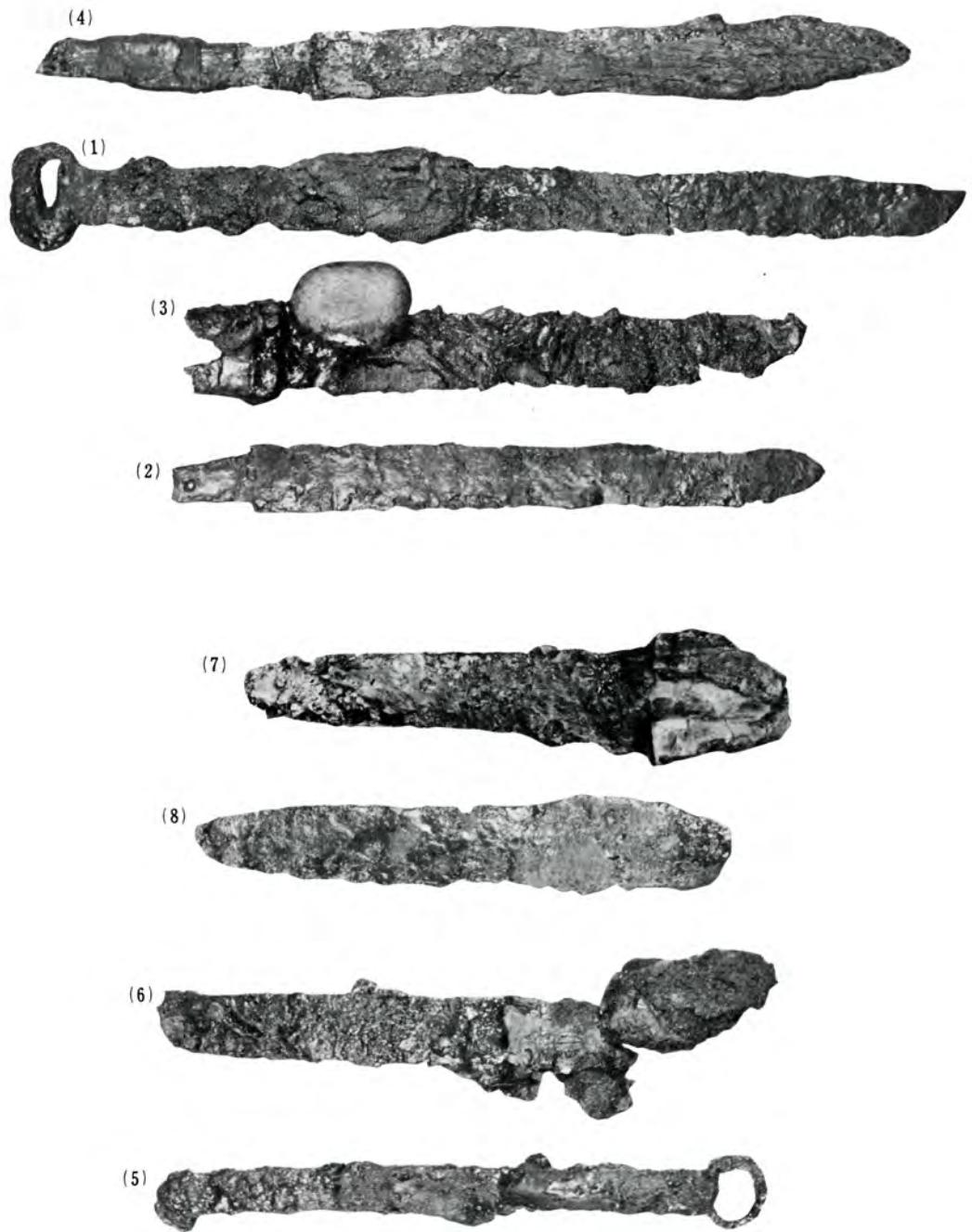


図版17

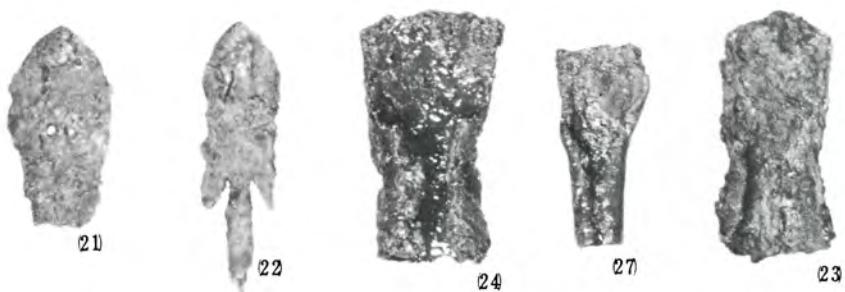
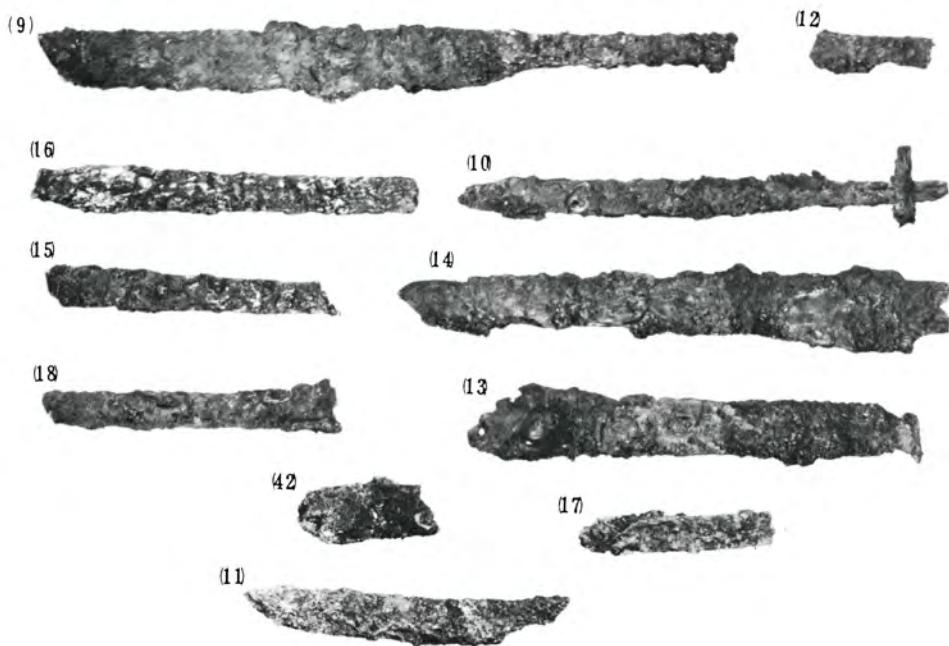


図版18

B-49



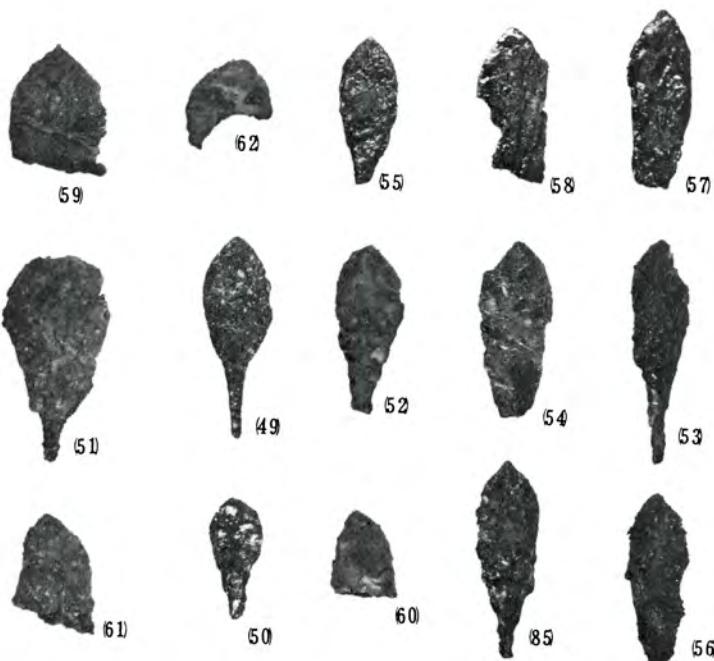
図版19



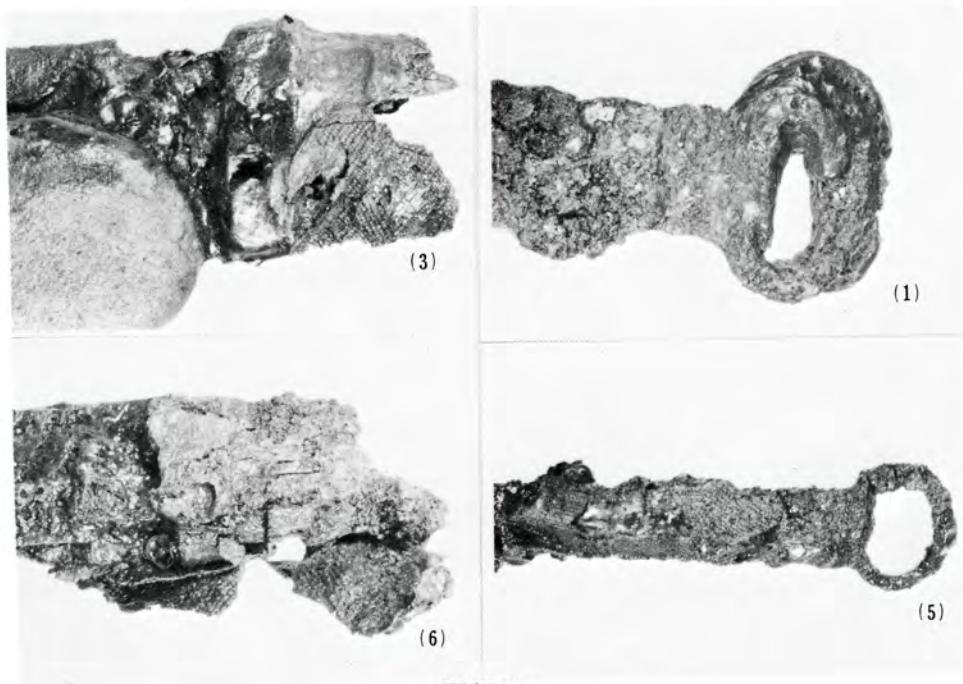
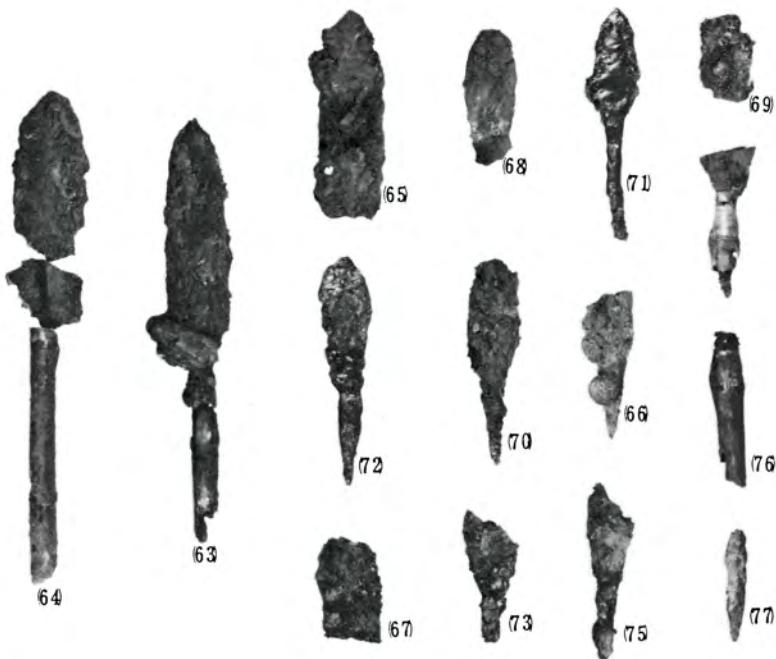
図版20



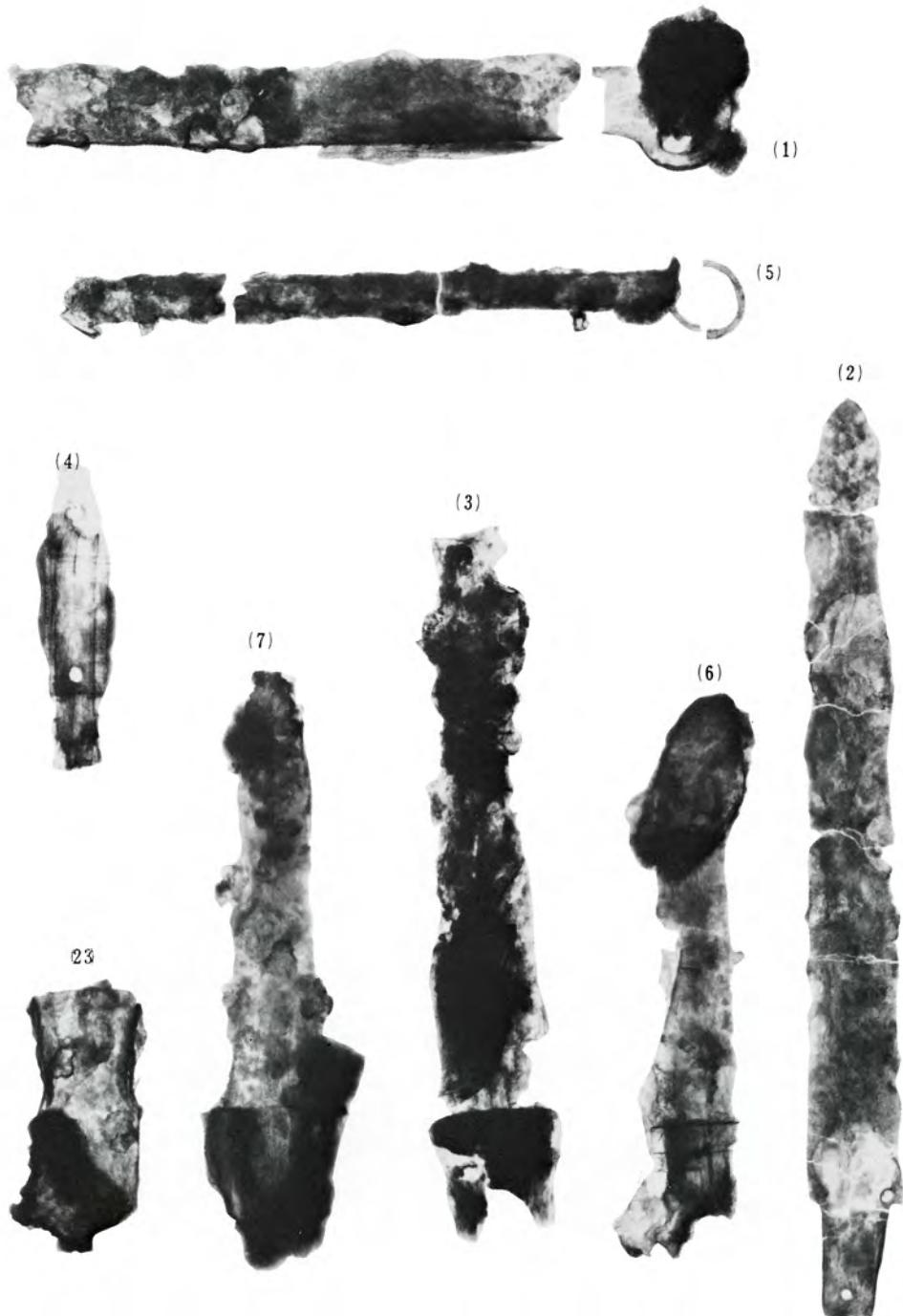
図版21



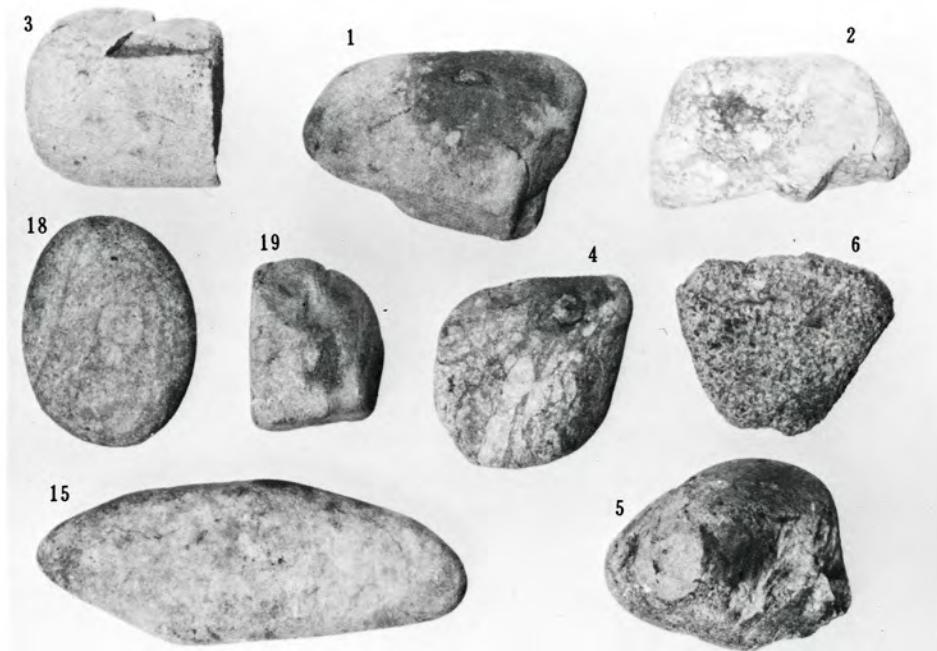
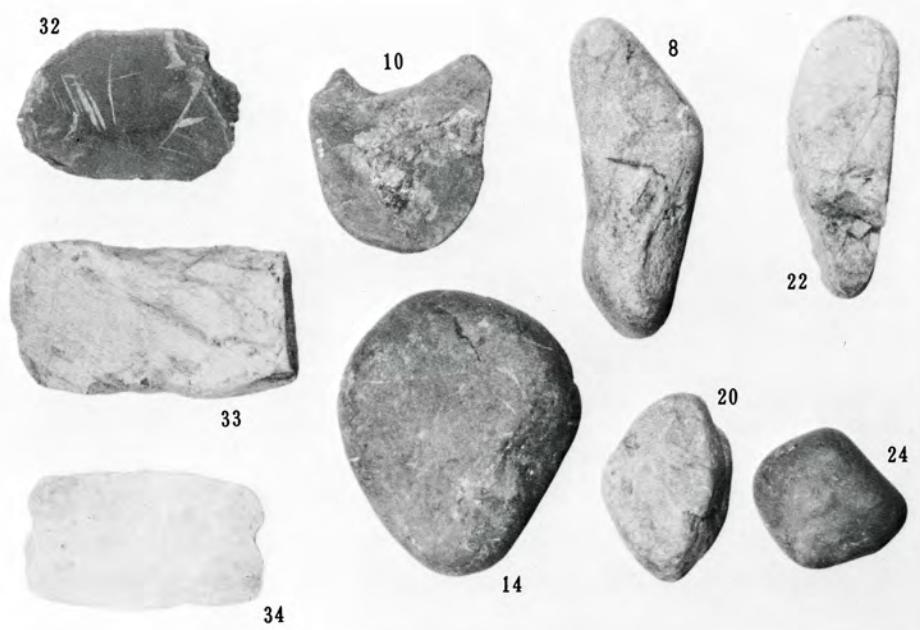
図版22



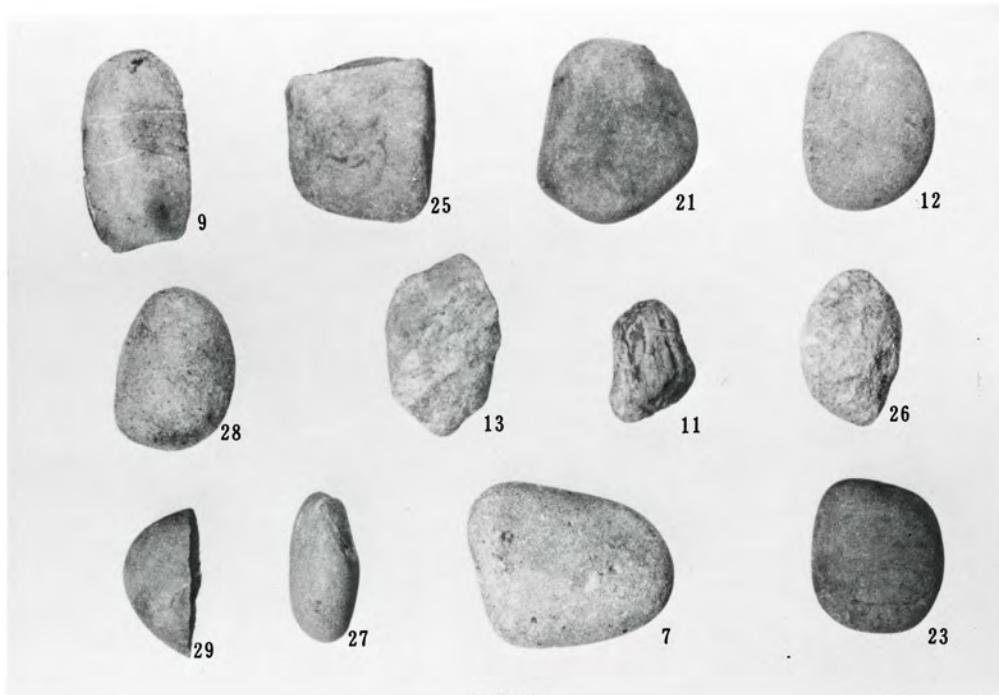
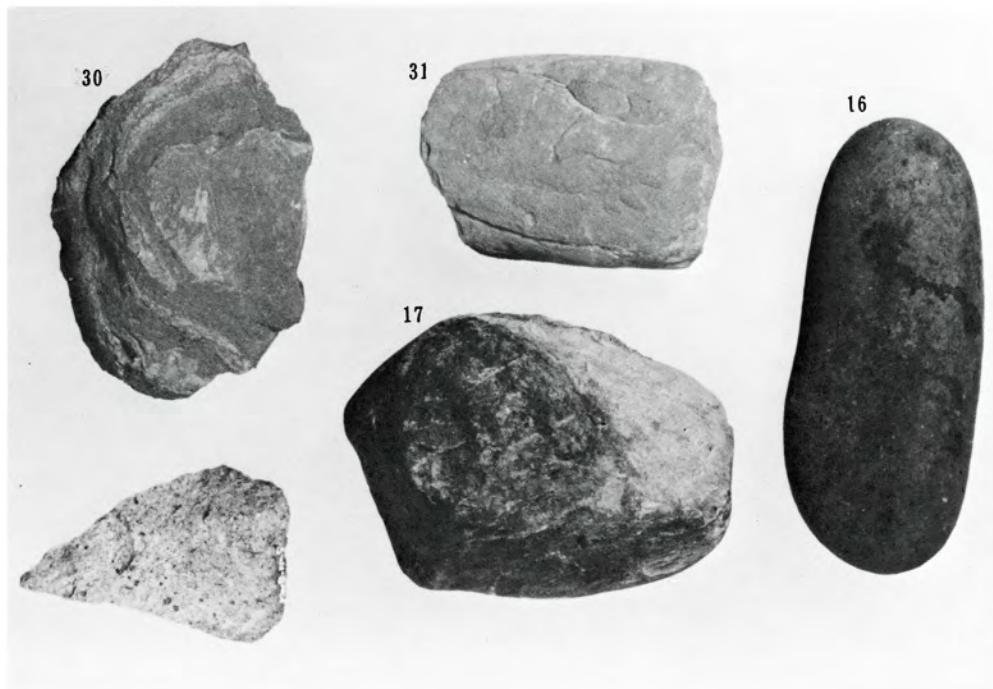
図版23



図版24 出土鉄器 X線写真



図版25



図版26